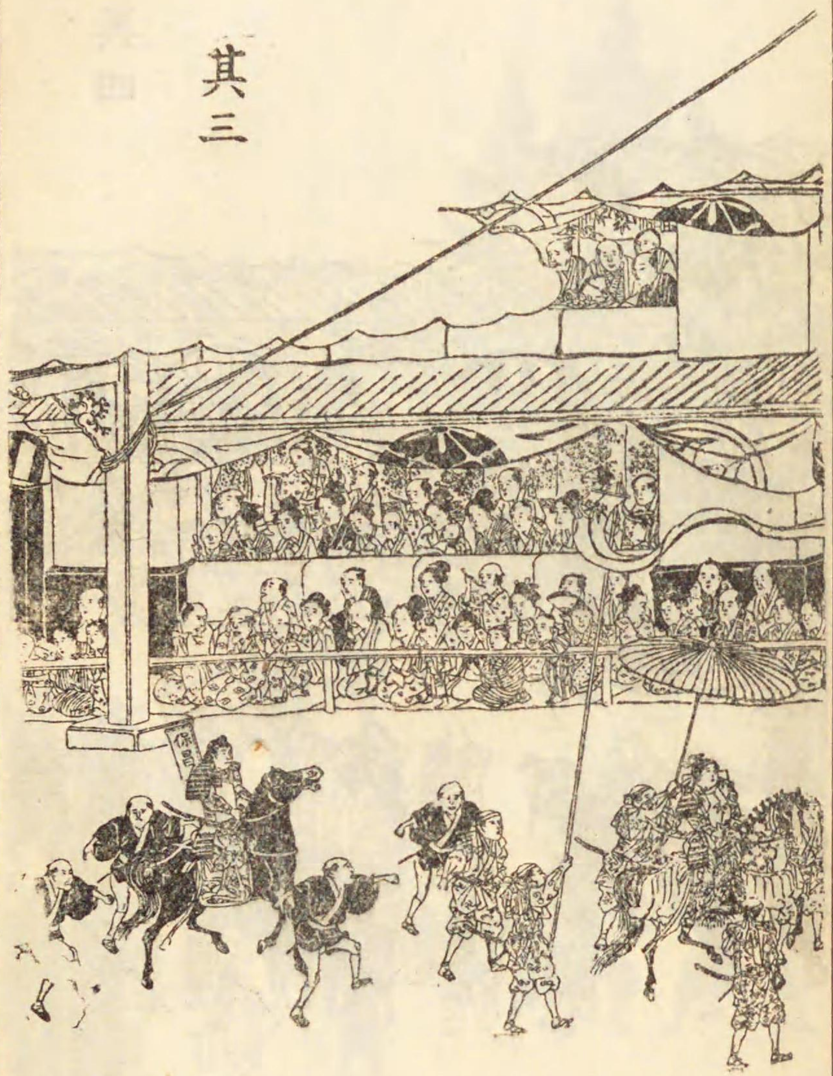
其三



其四

年、御室宮へ參るに、行法の嚴重なるを御感あつて、高野山光臺院の住持職に任ぜらる。又天和二年七月十三日、參内す。頭中將隆眞卿の傳奏にして、光臺院住持職勅に應じ、國家安全、寶祚延長を祈り奉るべき旨、綸旨を賜ふ。祖先の忠義に仍て、名乘の文字を以て義高となし下さる。又元祿四年、志願によつて光臺院を辭して江戸に赴き、本郷三組町に住せらる。其頃大樹、常憲公および淨光院殿、須山女を以て御祈禱を仰附けらる。寶永六年上京す。此時昇殿を許さる。同七年江戸湯島の地に梵刹を建てゝ、萬昌山圓滿寺と號す。大樹文昭公の御志願に仍て、本多彈正少弼忠晴奉行たり。則ち上人を以て當寺の開山とす。享保三年六月七日、化緣の薪盡きて、終に春秋九十五歲にして遷化す。以上開山傳の畧を擧ぐ。

寶林山靈雲寺 大悲心院と號す。圓滿寺の北の方にあり。關東眞言律の惣本寺にして、覺彥比丘の開基なり。

灌頂堂 兩界の大日如來を安置す。

大元堂 灌頂堂のうしろ方丈の中にあり。本尊大元明王の像は、元祿大樹の御筆也。大元明王の法は、往古承和元年山城國小栗栖「オグルス」の常曉阿闍梨唐土に渡り、花林寺の大德元照師に謁す。師常曉の器才を稱して此祕法を授く。常曉歸朝の後、承和二

年、奏聞を經て小栗栖の法隈寺にして始て是を修す。後勅許ありて毎年正月治部省に於て是を執り行はせ給ふよし元亨釋書もよび公事根元等の書に見えたり。又延喜式玄蕃寮式曰、凡大元師法毎年正月起二八日一至二十四日一一七箇日於二省修一之云々。

鐘樓　本堂の右にあり、開山覺彦和尚自ら銘を作る。

寶林山靈雲寺鑄鐘銘竝序

武都北郊有二一勝地一。四野廓落。四方之衆易二來而投一。一丘崛起。一天之星可二坐而算一。菅祠艮聳。神鬼常作二擁衛一。士峯坤峙。靈祇遙爲二鎭護一。東叡天澤後聯。鐘梵互和。都城聖堂前屹。旭曛相映。實武野之甲區者也。從四位下柳羽州源保明者。幕府之侍臣也。天性篤懿。忠孝是務。在公之暇。嚮志二眞乘一。常歎二世季俗漓一。奉佛之徒不レ拘二戒檢一。以レ故象教徒設無レ益。因啓二幕府一。堅請二伽藍之地一。以囑二貧道一。遂使二今茲仲秋之二十二。大將軍下レ旨賜二許斯攸一。予乃夷二榛莽一。卒剏二營構一。遐邇競趨。緇白佐助。自二閏八初二始レ斧。以至二孟冬之半一。土木之績倏示告レ成。從四位下牧野備後刺史源成貞者時之股肱也。覽而有レ感。喜捨二家貲一。命二于鳧氏一。鎔二成鉅鐘一。復令二工匠一締二造其樓一。今月初四樓鐘偕就。以惟斯寺之興起也者。本是大將軍之賜。而二公醇信之所レ致也。予欲レ使二後生有レ感一。于茲。欽遵二佛制一。力荷二教法一。上以禱二臺運無疆一。下以增レ士民壽福一也。乃爲レ銘曰。

城北福庭　山號寶林　元帥賚地　實比布金
作夫四集　役工日臨　彌歷七旬　棟宇成森
牧野備公　爲時股肱　命工作器　侈弇合程
架樓突兀　效響鏗鏘　賢聖畢萃　龍鬼熱醒
聲雖本有　乍起乍滅　迷夫天眞　妄作分別
圓性融相　誰縛誰泄　法音遍益　何有垠埒

元祿四辛未年孟冬

地藏堂　本堂の左の方艮の隅にあり。本尊地藏菩薩　弘法大師の作なり。左を安置す。

左右の脇檀に弘法大師、ならびに覺彦比丘の兩像

開山諱は淨嚴、字は覺彥、妙極と號す。河州錦部郡小西見村の產なり。父は上田氏、母は秦氏なり。寛永十六年己卯十一月二十三日に生る。四歲にして普門品尊勝大陀羅尼を誦す。奇標穎悟夙因の發する所なり。凡そ耳目の歷る所終に遺忘する事なし。衆人是を神童と稱す。慶安元年戊子、高野山撿挍法雲雪を禮して薙染す。時に年十歲、朝參暮詣倦む事なし。紀州亞相公頼宣卿一度見たまひて深く是を器なりとし、眞にこれ方外千里の駒なりとのたまふ。遂に眞言の諸流の祕奧を究む。又餘暇あるときは、孔老をよび諸子百家歷史等涉ざるところなし、常に法戰の場に臨むに、向ふ所敵なし。貞享甲子冬、錫を關左に飛す。其曉瑞雲ありて東を指す、其色赤黃にして長きこと數十丈、之和尙の法化將に東方に振はんとするの兆なり。一度東都に來りてより、法鼓江城の下に震ふ。仍て和尙の道香を慕ひ、弟子の禮を設け、厚くこれに遇する輩すくなからず。元祿四年、大將軍常憲公召見し給ひ、普門品を講ぜしむ。雄辯泉の流るゝがごとく、聽く者欣然として善と稱す。遂に城北にして地を賜ひ、梵刹を經始す。こゝにおいて佛殿、僧房、香厨、門郭甍を連ね、巍然として一精藍となる。號けて靈雲寺といふ。是往年の瑞に依てなり。遂に密壇を建て祕法を行し、講筵を鋪き、大に密敎を唱ふるにおよんで、諸名匠衣を掘て來り至る。同く五年壬申六月、大元帥の大法を修し、國家昇平を祈る。これより以後、毎歲三神通月七日、修法することを永規とす。翌年多摩郡の戶若干を割きて香積に充て、關東眞言律の僧統となしたまふ。又乙亥の夏、大將軍常憲公みづから齋戒し給ひ、大元帥金剛の像を畫き、本尊に下し賜ふ。今大元堂に安置し奉る。同く十年丁丑、僧俗の請に依て曼陀羅を開く。壇場に入る者九萬人に幾し。隔年灌頂を行ふこと今に至てたえず。既に元祿十五年壬午六月廿七日、諸徒を召し、遺誡慇懃なり。我今法界三昧に入るといひて、恬然として順化す。世壽六十四、僧臘二十七、時に顏四十計、色相怡悅として平生に勝れたり。師常に弘通を以て己が任とし、受る所の財帛すこしも貯へず、又みだりに費さず。佛像を造り、聖敎を索め、堂塔を構へ、貧窮を濟ふ。前後經論を講說すること一百三十六會、殆ど三千席、祕軌を授くること五回、著述する所の書三百卷余、度する處の僧尼四百三十六人、具足戒を受くる者十有三人、阿闍梨を得る者一百六十八人、受明灌頂に浴する者一千六百三十一人、菩薩戒を受く

靈雲寺

る者一萬五千人、其餘の法化は擧げて數ふべからず。往哲のいまだ發せざるを發し、先賢の明かならざるをあきらかにす。德化洋々として天下に彌布し。王公より下愚夫惷婦に至る迄敬仰せずといふことなし。今古いまだ曾てあらざる所、實に總持復古の師なり。以上冨寺開山傳の要を摘んでこゝに記す。

妻戀大明神社

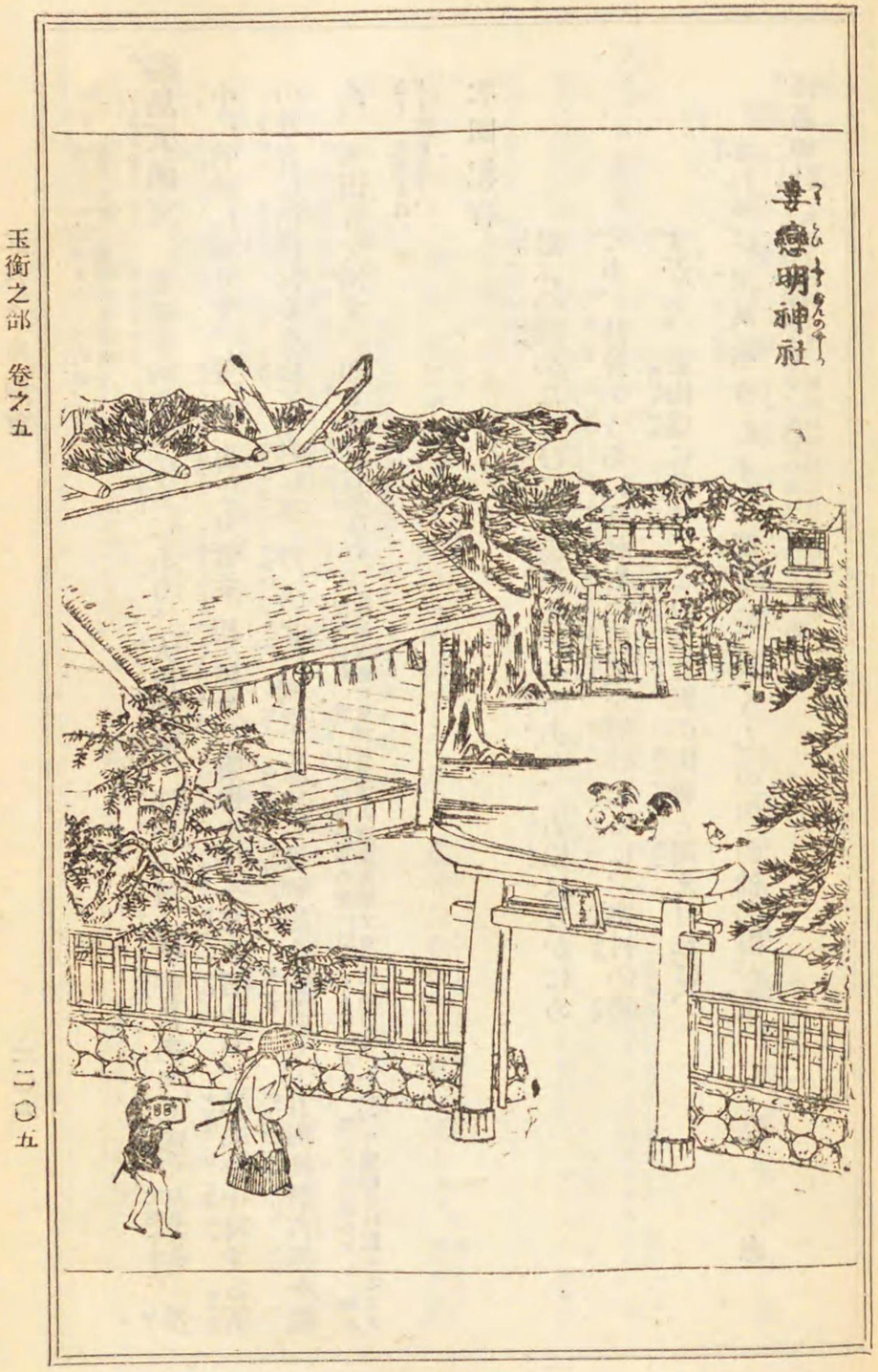
妻戀坂の上にあり。萬治年中、回祿ありて後、今の妻戀臺に遷させらる。

祭神　第一殿　倉稲魂神　第二殿、日本武尊　第三殿　弟橘媛命

社傳に曰く、當社は往昔日本武尊東征の頃の行宮の地なりと云々。

按ずるに、日本紀に日本武尊東夷征伐の時、妃弟橘媛海水に入て(日本紀の本文は第七卷吾妻懼現の條下に出づ)むなしくなり給ふ。依て尊此事を深くなげきたまひ、歸路に遽んで、上野國碓日嶺に登り　東南の方を望みたまひ、吾嬬者耶(アガツマハヤ)と宣ふよし見えたり。因て考ふるに、此地も東征の時の行宮の地たるによつて、彼尊を鎮り奉り、妻を戀ひ慕ひたまふの意を取て、直に妻戀明神となづけしなるべし。今稲荷明神をもつて社の號に稱するといへども、おそらくは後世合祭せるなちん歟。

往昔は社地も妻戀臺の下にありて、境内はなはだ廣かりしに、數度の兵火に罹り、大に荒廢におよび、纔に社の形ばかりを殘せり。時に天正年中、神君當社に御祈願の事ありて、新に二丁四方の社地を賜ふ。又寛永五年、台命によつて、神君の御像を別社に鎮座なさしめ給



ふ。萬治年中回祿ありしのちは、假に今稲荷の社に鎮座なし奉るといへり。

湯島天滿宮　妻戀明神の北の方にあり。太田道灌、江戸の靜勝軒にありし頃、文明十年六月五日也。夢中に菅神に謁見す。翌朝外より菅丞相親筆の畫像を携へ來る者あり。乃ち夢中拜する所の尊容に彷彿たるを以て、直に城外の北に祠堂を營み、彼神影を安置し、且梅樹數百株を栽ゑ、美田等を附す。卽ち當社是なり。以上諸社一覽、江戸名所記等の書に出づるといへども、恐らくは誤ならん。麴町平河天神に菅丞相眞筆の畫像と稱するものありて、かへつて當社に此影あることなし。其論あれども爰に畧す。

北國紀行

忍ぶの岡のならびに、湯島といふ所あり。古松はるかにめぐり、注連のうちに武藏野の遠望を懸けたるに、寒村の道すがら、野梅盛に薰ず。これは北野の御神と聞えければ、

忘れずば東風吹きむすべ都まで遠くしめのの袖の梅が香　堯恵

風土記曰

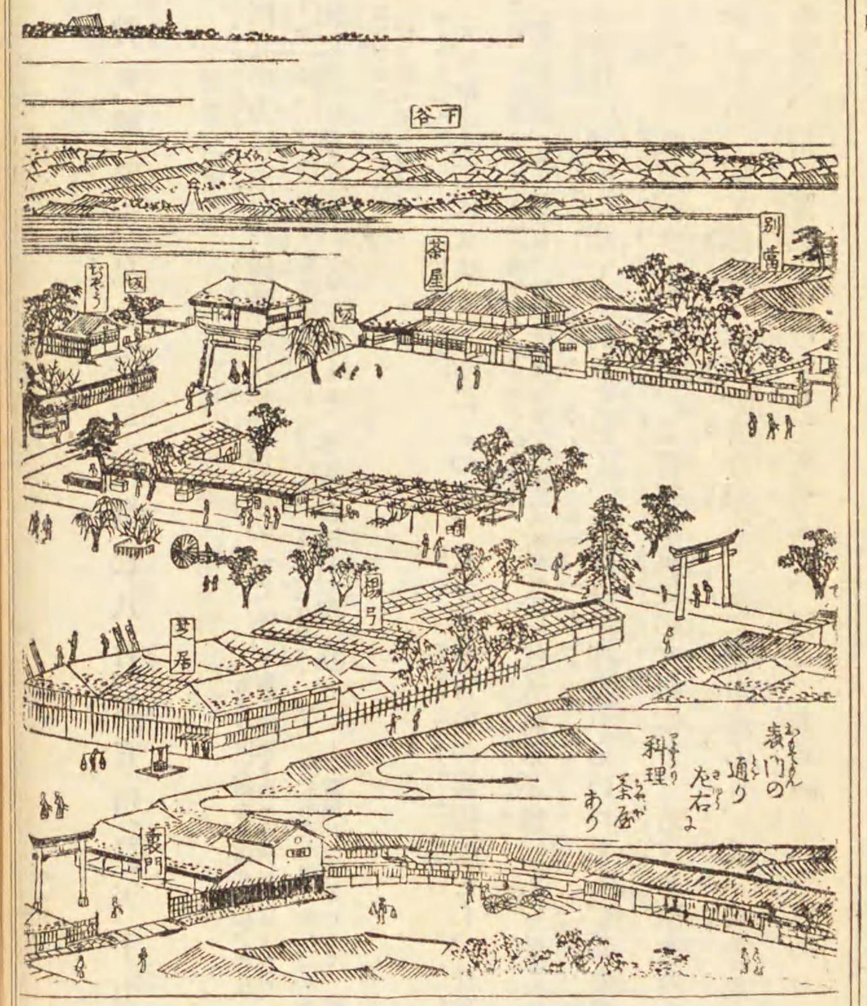
豐島郡湯島神社。雄略天皇御宇二年癸巳八月。自官所祭天手力雄神也。云々。

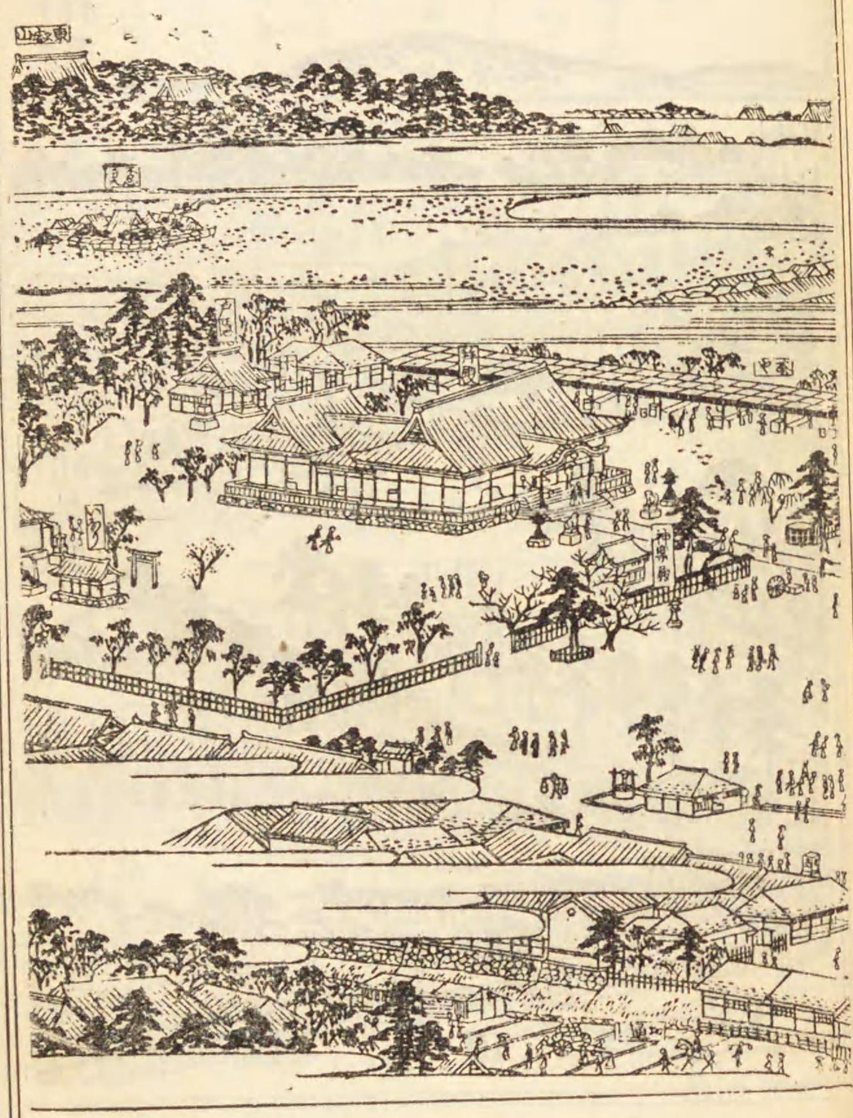
天澤山麟祥院　同所北の方にあり。臨濟宗江戸四箇寺の一なり。舊報恩山天澤寺と稱せしが、春日局の法號を取て麟祥院とあらたむ。本尊は釋迦如來、開山は渭川劉和尚。京師花園妙心寺より招かせらる。本願は春日局なり。三代大將軍の御乳母人「オチノヒト」齋藤利三の女にして、稲葉侯正成の室なり。寛永十八年九月十四日、六十五歳にして歿す。麟祥院殿從二位了義大姉と號す。

寺傳に曰く、寛永元年甲子、二代大將軍の命によつて、當寺を春日局の菩提所とし、且其殿閣をこゝに移す。天和二年回祿す。其以前の禮今十八枚を存す。梅之間、柳之間、寒山拾得等、皆雲谷の筆なり。同く五年、三代大將軍不豫にあらせられしとき、局自ら東照大權現の神前に詣で、禱りて曰く、妾が身不淨なりといへども、苟も乳味を奉りて乳母の稱を汚し、歳月祠き奉れり、且將軍は萬民の父母なり、若今大故あるときは、國家の安危にかゝれり、因て願はくは妾が身を以て、是に替り奉らん、若快復あらしめば、忽に身に病苦を受け、誓て醫藥を用ひずして死せんと、云々。其衷誠正に感應ありて、

湯島天滿宮

月毎の廿五日ハ植木市あり夜更あり一時の壯觀あり

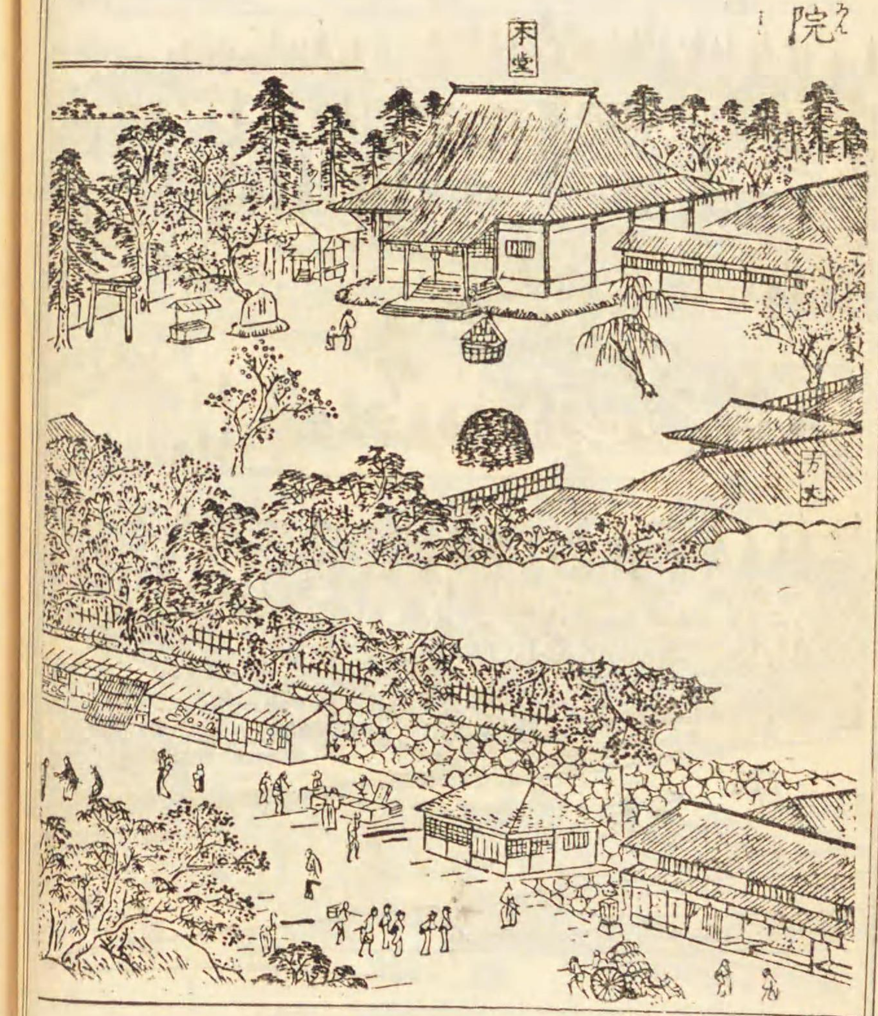


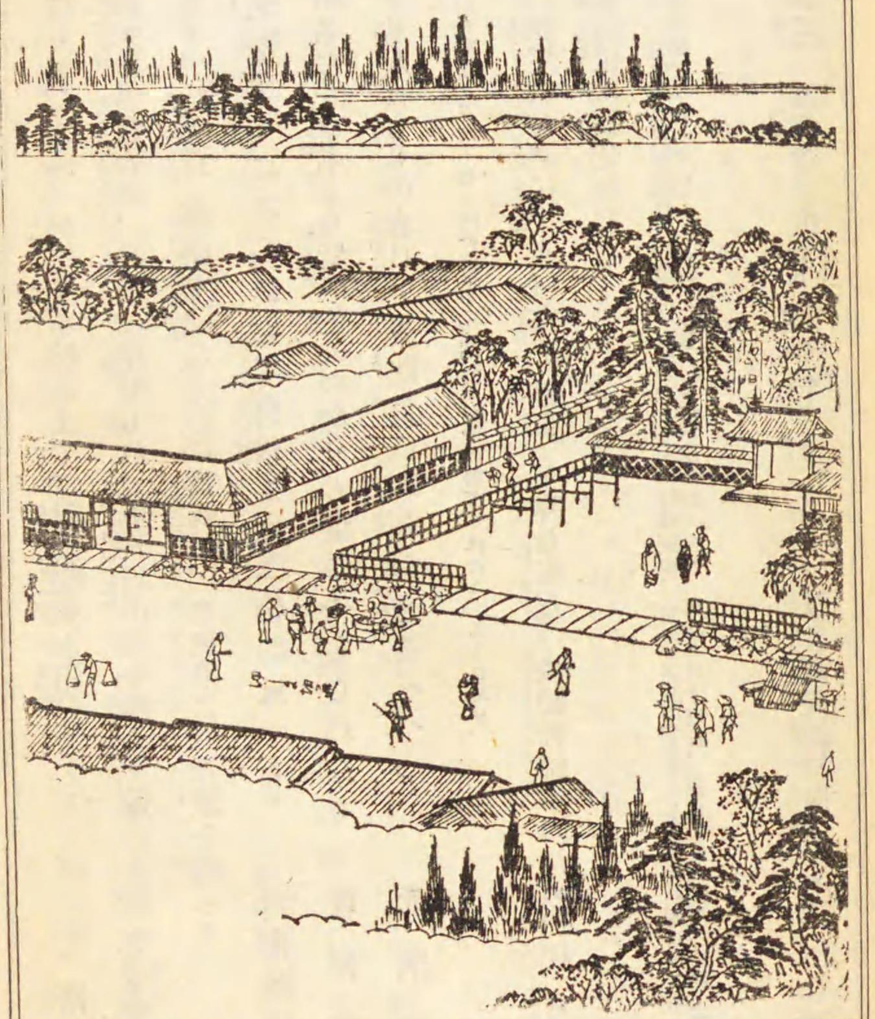


麟祥院

本堂

根生院





日を經ず常にならせたまふ。仍て身を終るまで、針灸藥餌を用ひずとぞ。同六年、洛に上り參内す。西三條大納言實條卿、兄弟に準ぜられ、春日局の號を賜ふ。遂に天顔（後水尾帝）を拜し、天盃を頂戴す。此時良尚親王、ならびに實條卿、光廣卿より和歌を贈らる。

春日山其名をよもにあらはして萬代よばふ松の風かも　良尚親王

かすが野の名だかき名より紫の色のゆかりも世にやしられん　實條卿

いやたかき君がまもりの春日やま四方に朝日の光そへつつ　光廣卿

其外擧白集に、丈山長嘯子より贈らるゝ所の東都下向餞別の和歌詞書等あれども、こゝに畧す

同九年、台命に依て再び洛に上り、女帝（明正帝）を拜し奉る。後勤勞歸休のため、代官町に宅地を賜ひ、從二位に叙せらる。

影堂　本堂の左にあり、二位局の親影を置く。此像は、台命によつて、付野探幽、局の生前裝束を著せし姿を目のあたりに寫せし像なり。表裝も大將軍命ぜらるゝ所にして、唐草の純子に卍壽の字を織入たり。毎年九月十四日、忌日たるに因て、法筵を開き參詣を許す。

金剛寶山根生密院　延壽寺と號す。同く東の方にあり、眞言新義江戸四箇寺の一にして、寛永の始、御祈願所に命ぜらる。本尊藥師如來は、佛工春日の作、脇壇に十二神將の像を置く。榮譽法印（春日局の猶子なり。）をもつて開山とす。

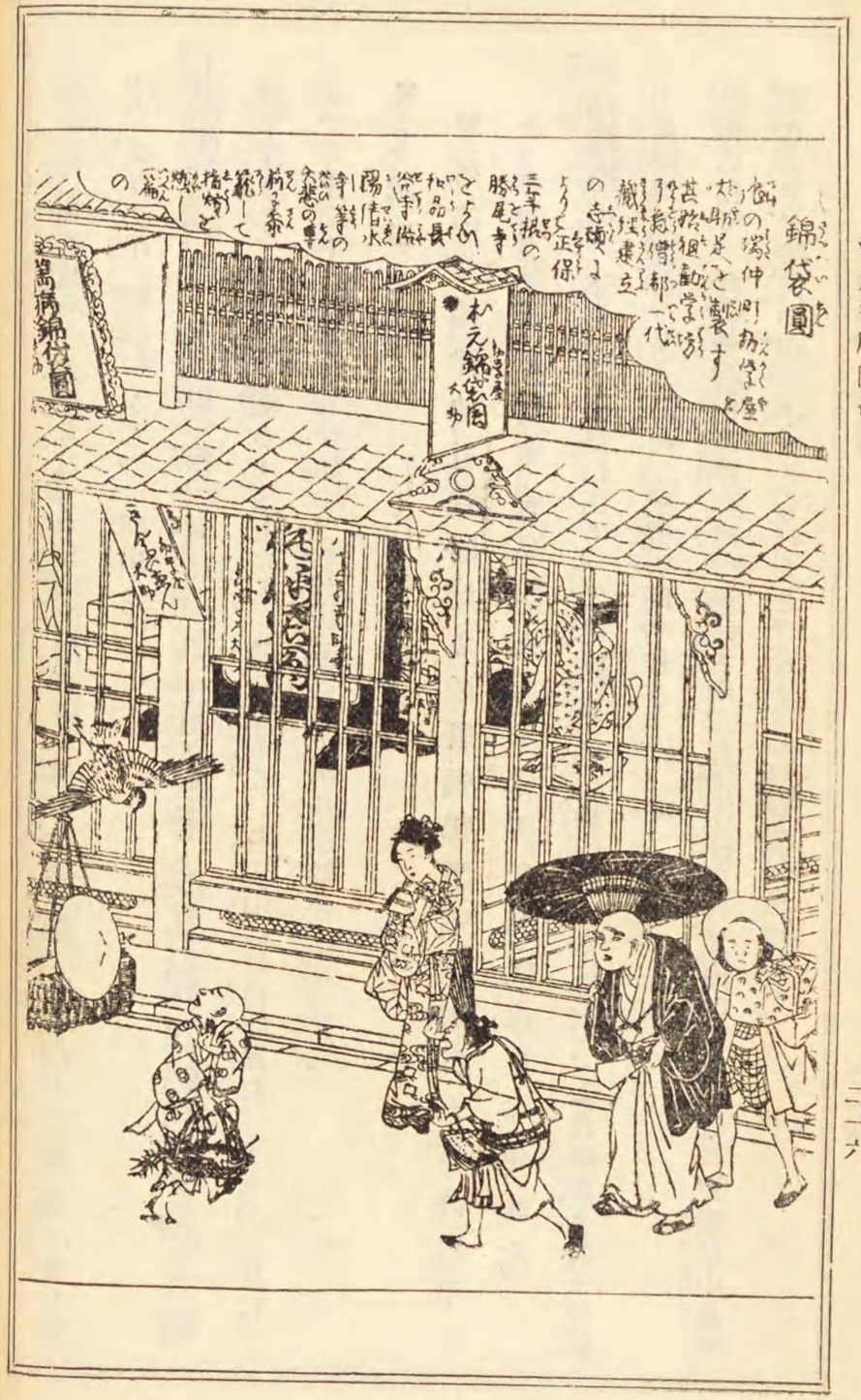
不忍池（又篠輪津（シノワツ）に作る。）　東叡山の西の麓にあり。江州琵琶湖に比す。（不忍とは、忍の岡に對しての名なり。）廣さ方十丁計、池水深うして旱魃にも涸るゝことなし。殊に蓮多く、花の頃は紅白咲亂れ、天女の宮居はさながら蓮の上に湧出するが如く、其芬芳遠近の人の袂を襲ふ。

風土記曰

豐島郡篠輪津池。貢鯉鮒鰻魚鴻雁鸛鶴鷺鴨等。周行十里許程。旱日水不涸。霖雨不爲害。祈旱雨人詣于茲。所祭瀨織津比咩也。云々。

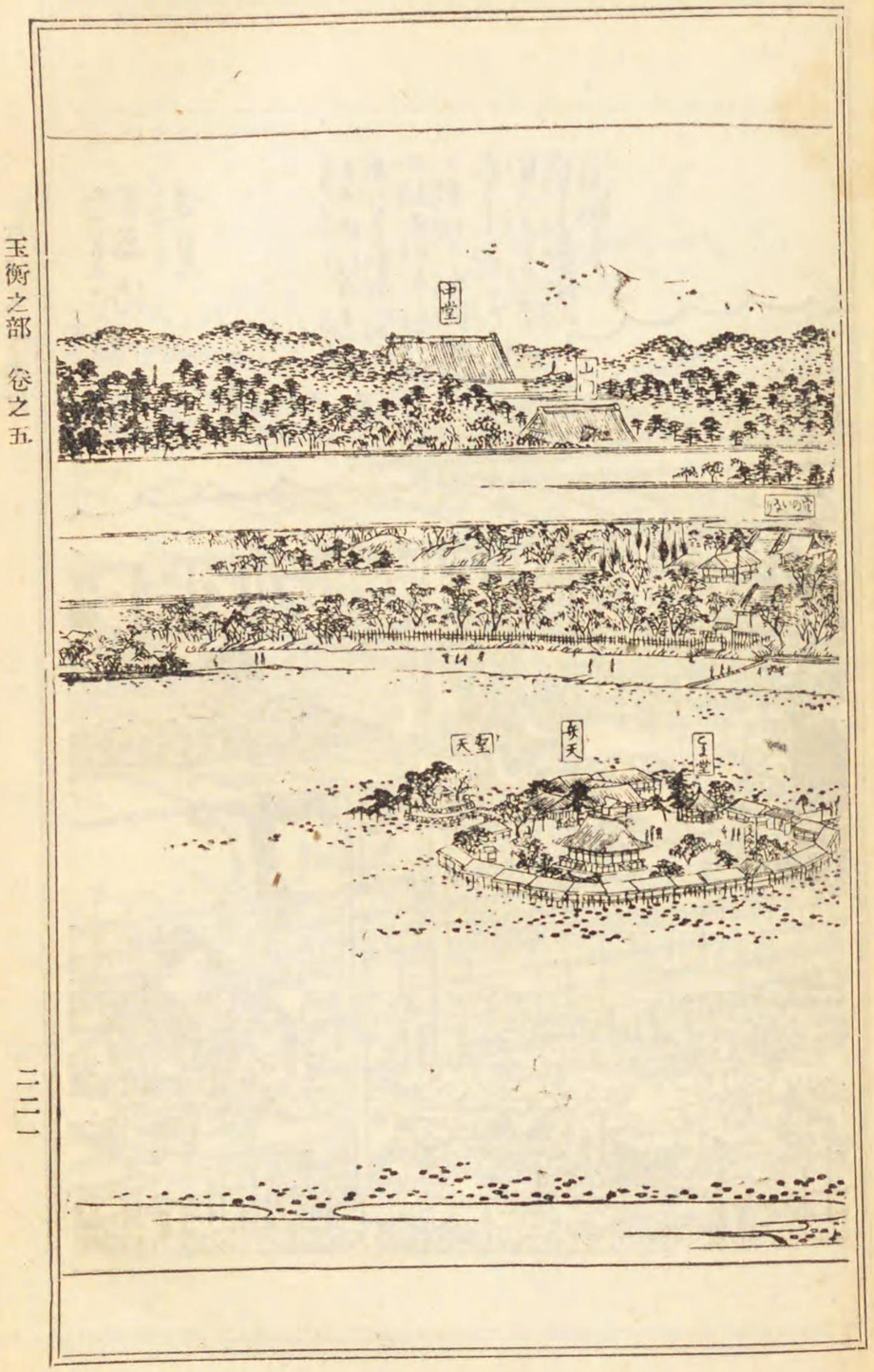
中島辨財天　不忍池の中島にあり。當社は江州竹生島のうつしにして、本尊辨財天および脇士多聞、大黑の二天ともに、慈覺大師の作なり。

社傳に曰く、往古東叡山草創の時、慈眼大師、此池を江州の琵琶湖になぞらへ、新に中島を築立てて、辨天の祠を建立せられしと。云々。（江戸名所記には、水谷伊勢守建立せらるゝとあり。）


錦袋圓
當病錦袋圓
松元錦袋圓

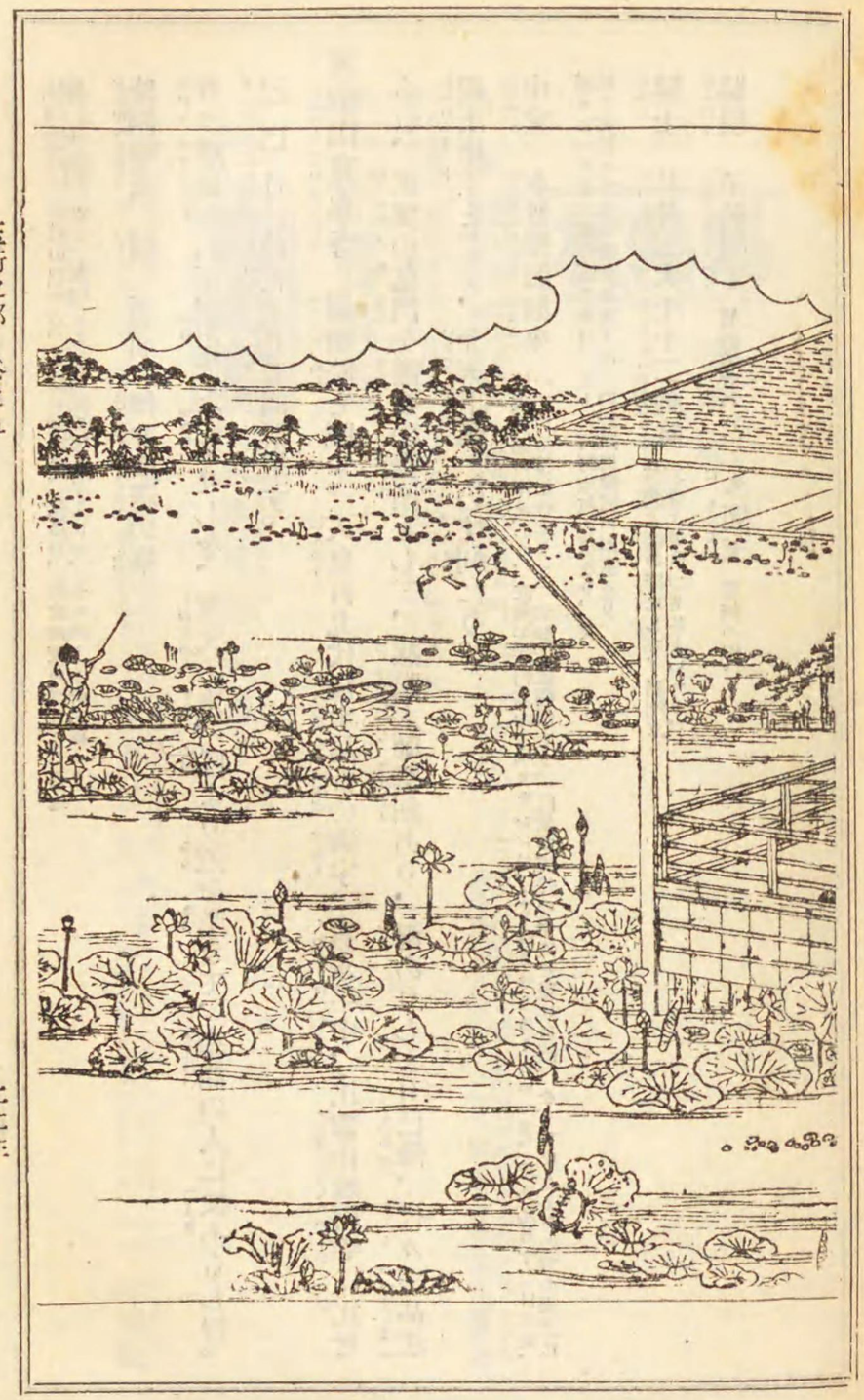
東叡山黒門前
隅田川
三橋

忍ヶ池
中島辯財天社



不忍池 蓮見

不忍池は江府第一の蓮池なり夏月に至れば荷葉累々として水上より蕾付し花の紅白色とりどりにかくれなく彩ふ蓮と色をあらそひの華交晨を競ふの清觀とす



聖天宮　社の北の方、小島に勸請す。此島は、其始辨天の祠ありし舊地なり。其頃もこの聖天の宮ありしにや、今も地主の神と稱せり。

紫銅華表　額　天嶺山　細井廣澤の筆

昔は離島にして、船にて往來せしを、寛文の末、陸より道を築きて、參詣の人に便あらしむ。

己巳日は前夜より參詣群集す。

東叡山寛永寺　圓頓院と號す。人皇百九代後水尾帝の御字、寛永年中、比叡山延曆寺に比せられ、江城の鬼門を護るの靈區として、慈眼大師草創あり、爾ありしより已降、代々一品法親王座主として、今天下第一の梵刹たり。

中堂　本尊藥師如來　傳教大師の作にして、江洲矢造村石津寺［セキシンジ］より移させらるゝといへり。正五九月十二日には、一山の僧徒出仕ありて、大般若經轉讀あり。此堂中天井の中央に畫ける龍、ならびにうしろの方の壁上に圖せる所の十六羅漢等の像は、ともに狩野永叔の筆なり。又同じ天井の左右に圖せる天人は、狩野探信探雪の兩筆なり。

脇士　日月二大士十二神將　慈覺大師の作にして、羽州立石寺よりうつさるといへり。

脇壇　不動明王　智證大師の作。　多聞天　定朝の作。

額

瑠璃殿　靈元法皇宸筆

竹臺　廊門のうち左右にあり。昔慈覺大師入唐の時、五臺山の竹を根こじに携へて歸朝ありし後、叡山根本中堂にうゑちる。よつて東叡山にも其根をわけ移し植ゑて、法流の絶えざるしるしとするよし、驢尻といへる書に見えたり。世にこの竹を山王權現及び八百萬神の影向所なりともいひ。又同じ左右に小き塚あり、石槨［シヤクナゲ］を植ゑたり。諸夜叉夜叉女の影向所なりとぞ。

廊門　天井に迦陵頻迦を畫けるは、狩野探信探雪の兩筆なり。

額

後水尾帝宸筆

雲水塔　中堂の前右の方にあり、多寶塔と唱ふ。此塔は初め慈眼大師の建立にて、今は公の御修理所なり。三十番神社　雲水塔のうしろに有り、當山の護法神にして、開山慈眼大師建立ありしといへり。轉輪藏　中堂の前左の方にあり。一切經を收む。前に傳大士および菩賢菩薩の像を置く。この堂は水府公の御建立なり。

東叡山寛永寺

櫻ヶ岳

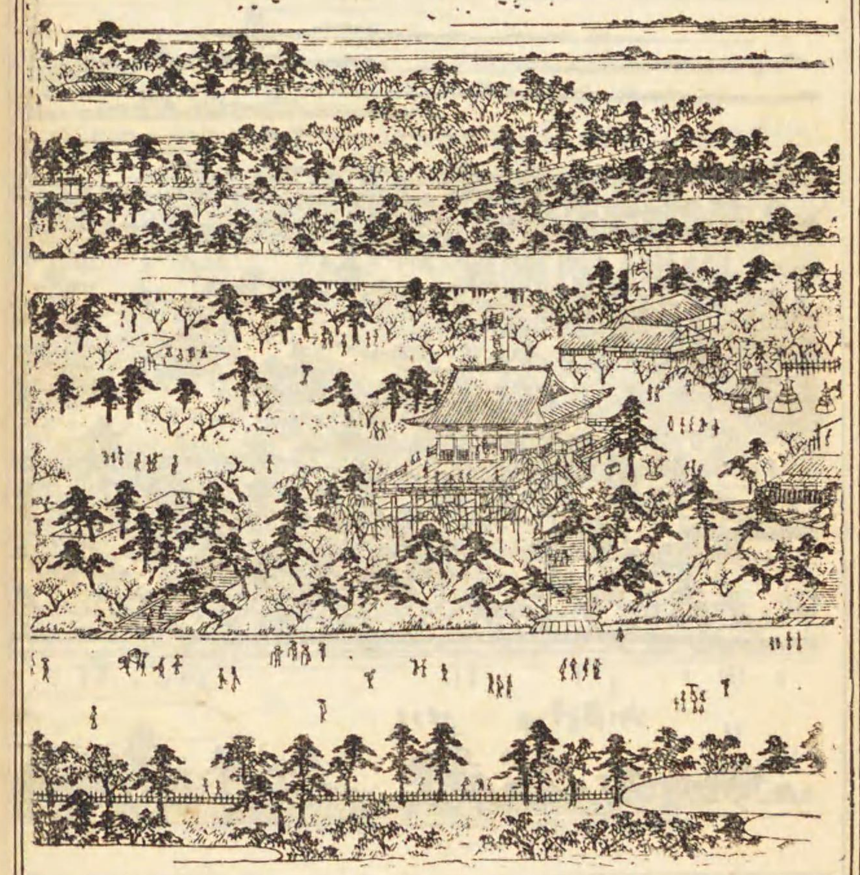
山王社

山内櫻樹多き中
ふもと成辺を櫻ヶ岳
と号し也むかし隱山
先生栽られ給ふ所
我等年ごとに賞ふ

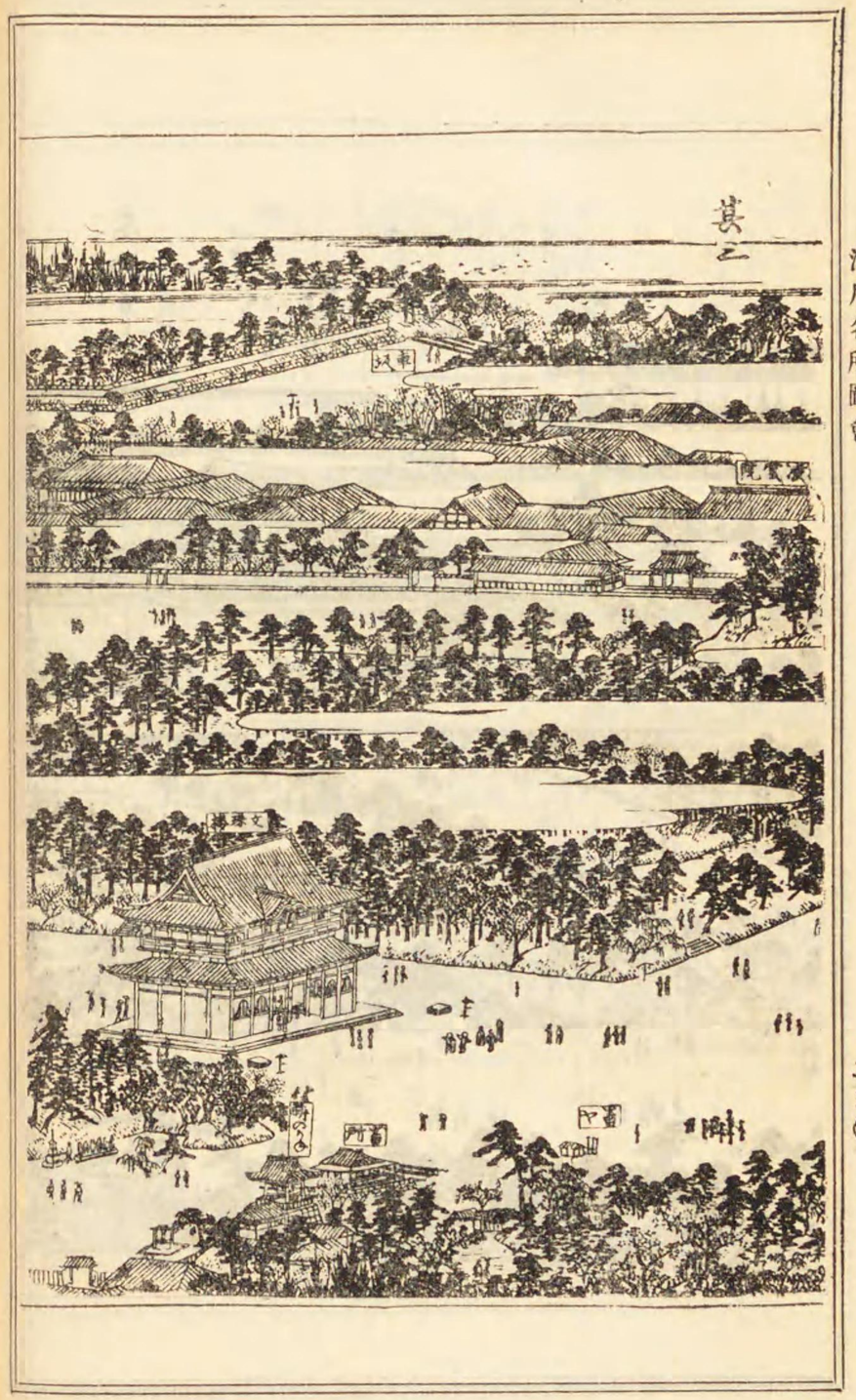
東叡山上陽春衣　南鄰
東叡山下有花歸
回看終日酣歌處
風起晚來爲雪飛

其二

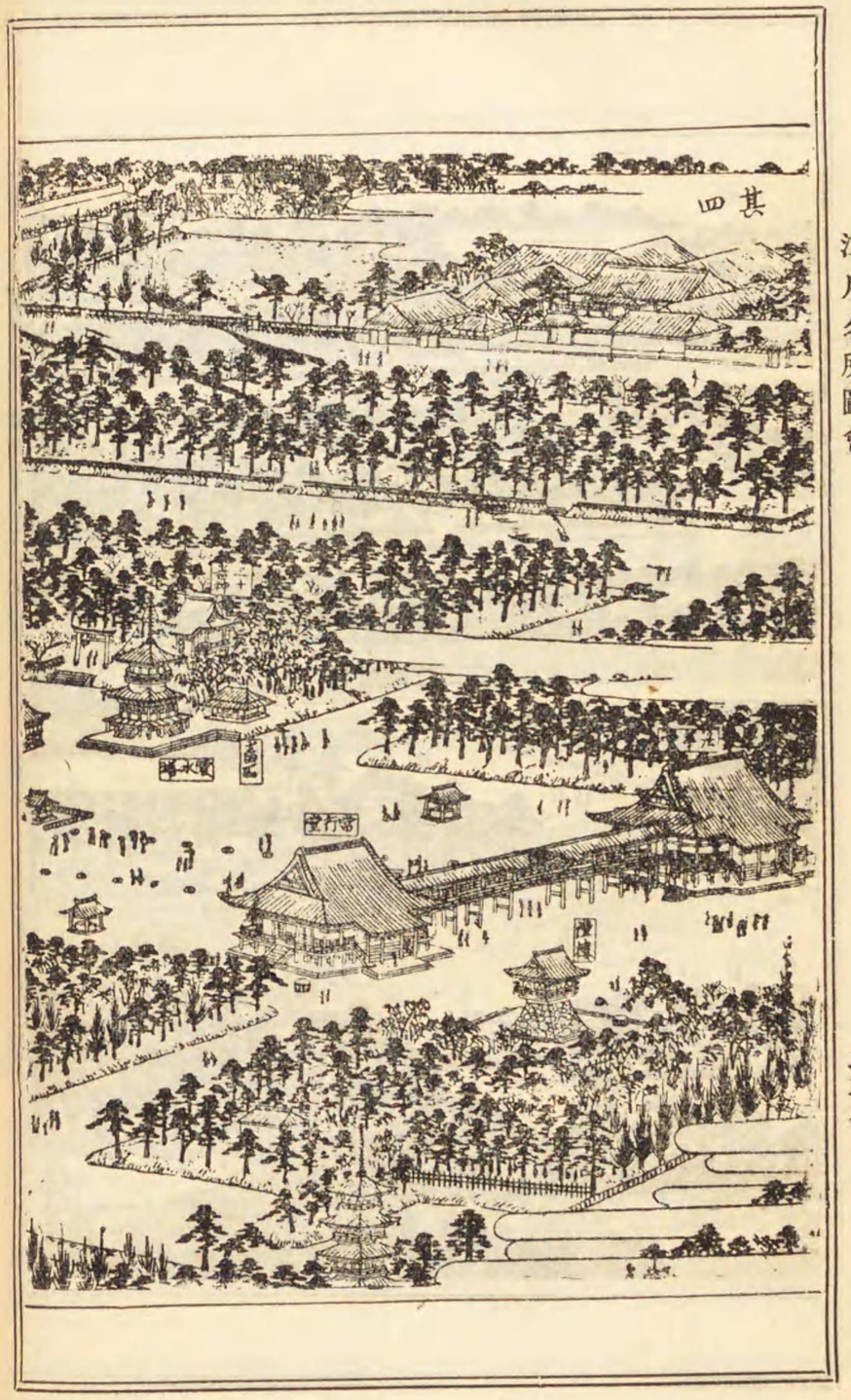
清水觀音堂
秋色橋

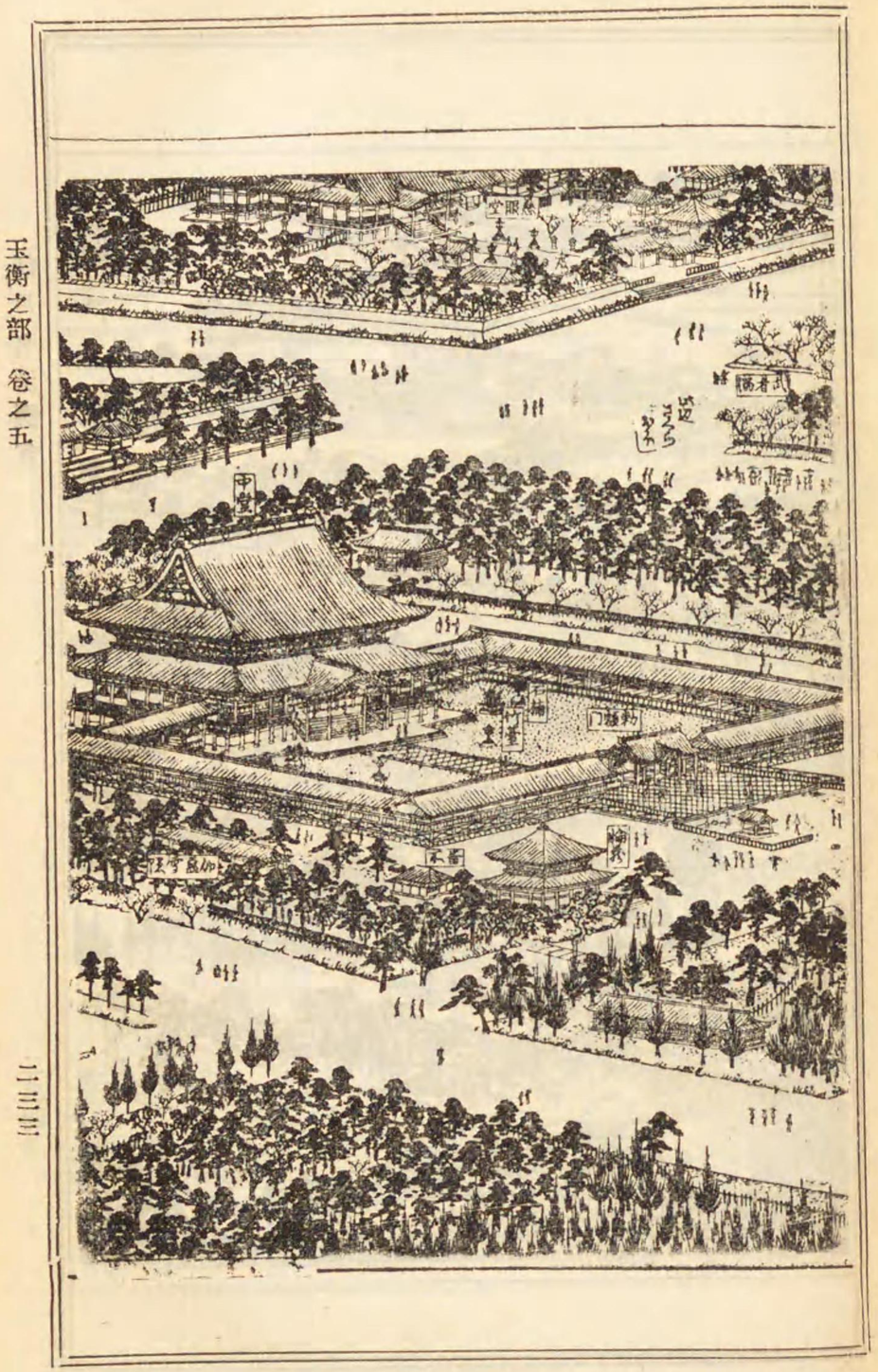


大佛


其二

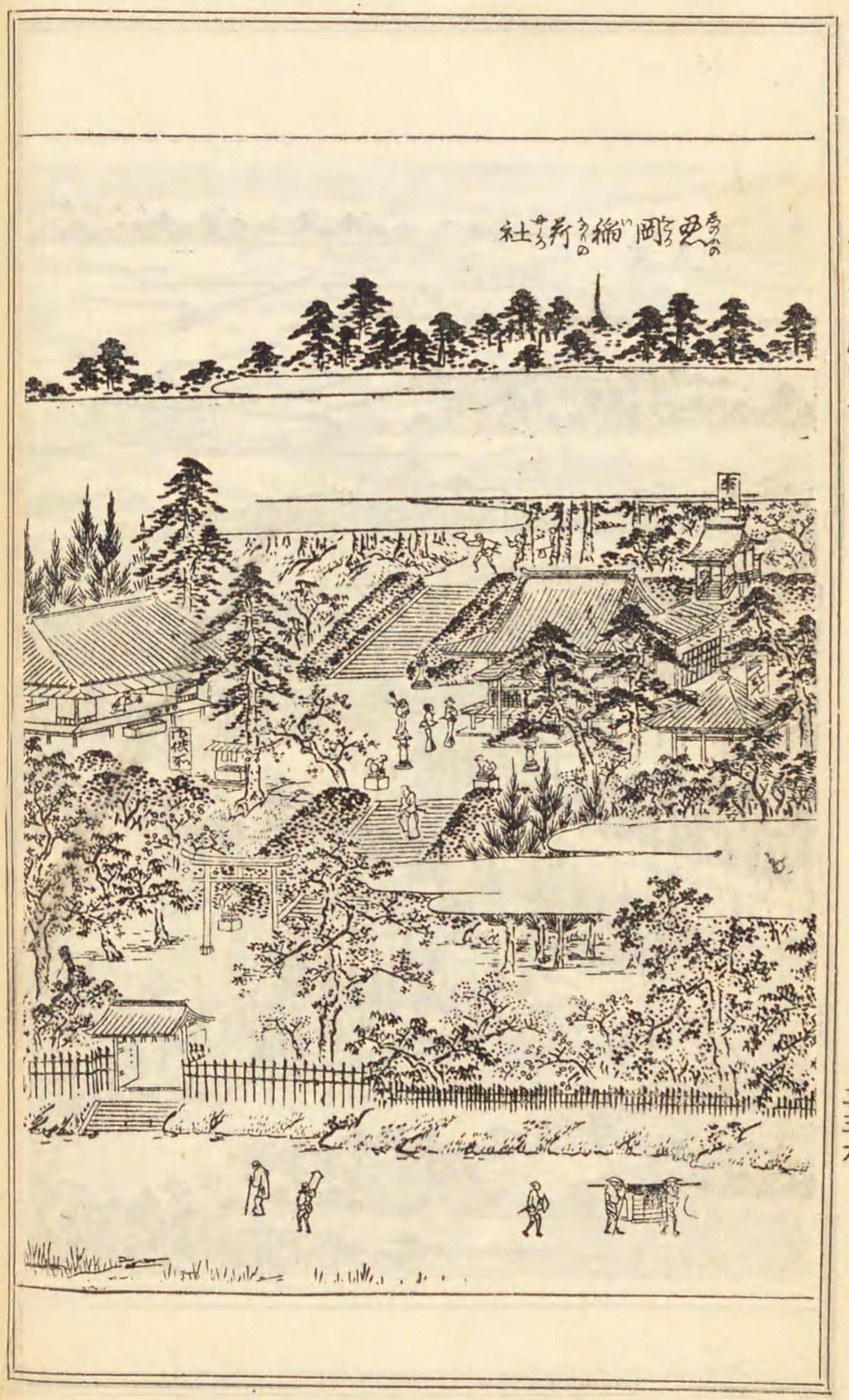
其四





ごまどう
所女園
宗教
長大
院校學

其五
所本坊
庫經
日長寺



法華堂（ほっけだう） 中堂の前右の方にあり、普賢菩薩を安ず。毎年四月八日佛生會修行あり。この堂は紀州公の御建立なり。

常行堂（じやうぎやうだう） おなじく左の方にあり、阿彌陀如來を安置す。此ふつたの堂の中間に、渡殿を設くる故に、世に荷擔堂（ニナヒダウ）と云ひならはせり。毎歳二月十五日涅槃會修行あり。此日狩野常信の筆の涅槃の畫像をかくる。此堂は尾州公の御建立なり。

摩多羅神、常行堂の中に勸請す。依てこの堂の脇の方に華表を建てたり。傳へいふ、往古最澄入唐の折から、金毘羅神船中に現はれて曰く、我汝を護ると云ふ。仍て風帆つゝがなく、歸朝の後、この神を祭る。一名は摩多羅神、是大巳貴命の一體なり。山王はもと此神を配せり。

鐘樓（しゆろう） 同じく左の方にあり、土井大炊侯の建立なり。銘は林羅山先生是を作ちる。高欄にまとへる彫物の龍は、世に傳へて彫工左甚五郎なる者の作といへり。

武州東叡山鐘銘竝序

江城艮維有一佳境。誠是靈區也。叡山大僧正天海。告官相攸。以欲奉營東照大神君之原廟。由是伊賀羽林次將高虎。雇梓匠之力。成土木之功。屹焉巍然。昭々如在。益廣祖廟大孝之本。擧世皆崇。闔國悉敬。此時貴戚之群卿。共繼其志。或列立高堂。或造設輪藏。加之士林之濟々。各同其心。亦建院宇。不日而成。輪奐信美。既而寶池朝清。紺園夕霽。可謂盛事矣。於是利勝建五層塔。謹奉神意。風霜有日。瓦甍猶新。如峙于

空。似涌自地。然今爲奉祝大相國公之寶算。新鑄鳧鐘。高架一樓。伏顧因此丹忱。保其黃耇。惟夫範圍之體。外圓而中虛。是心之譬乎感應之理。聲來而耳往。亦妙之謂也。長鯨吼月。早開一天之曙色。唳鶴應霜。永延千年之遐齡。庶幾乎神風威風。叩之大鳴。君道臣道。唱而後和。懇禱之趣不在茲乎。銘曰。

東州寶池　上方銀界　茲移臺嶠　迺唱梵唄
神德同塵　常不語恠　靈庇閟宮　人天俱拜
陶鎔鑛銅　脫出鑪鞴　疊石構樓　拘筐高掛
聲教遠聞　朝警暮誡　壽久福介
仰祝　國家
寛永八年龍集辛未秋九月日
從四位佐倉侍從源朝臣利勝

寛永中。東叡山寶刹始成之日。我先侯利勝。造立鐘樓一宇。新鑄華鐘以叡焉。年代久遠。鐘破聲嗄。於是謹仍舊貫。更鑄以懸焉。刻以先侯銘文。因記其由云。于時

寛政二年庚戌五月。下總國古河城主。大炊頭從五位下源朝臣利和

治工　太田駿河守

東照大權現宮（とうしょうだいごんげんぐう）　文殊樓の後左の方にあり。

大石燈籠（おほいしどうろう）　同所構の外にあり、高サ二丈あまり、笠石の徑り一丈二尺、棹石三圍、京師南禪寺、尾州熱田社と、當山とをあはせて、日本に三つの大石燈籠なり。いづれもなじ人の造立する所にして、比類なし。銘に寶永八年孟冬十七日佐久間大膳亮勝之とあり。

大佛殿（だいぶつでん）　同所にあり、紫銅をもつて二丈二尺餘に作れる釋迦如來の坐像を本尊とす。萬治年間、太食淨雲といへる沙門、是を造立あり。又彌勒佛の像を安ず。蔡濟庵空無上人の建立にして、江府六地藏の一なり。すべてこの三尊をもつて、現世、過去、未來の三世を表せり。往昔大明院宮この銅像をみそなはし、其頃宮宇もなかりしかば、雨露の侵さん事を愁へ給ひ、佛殿を營建ありしとぞ。今は公より修理をくはへらる。

天王社（てんわうのやしろ）　同所にあり、當山地主の神にして、寶永八年辛未、堀丹後守直時これを崇敬有て、社を造ちるゝといへり。神影は唐筆にして、青龍院第二世無相院亮甚護持ありしとぞ。

鯨鐘（けいしょう）　同所にあり、二六時にこれを撞けり。牛頭（ごづ）の頂堂宇を建立す。疱瘡の祈願にしるしありといへり。

文殊樓（もんじゅろう）　樓上に文殊菩薩を安置す。此靈像は、奥州會津の法藏寺より移させらるゝとぞ。

寶光堂（はうくわうだう）　同所にあり、本尊に吉祥天を安ず。享保

額 吉祥閣

大明院宮公辨法親王眞筆

忍岡稲荷祠　文殊樓の左にあり。石鳥の上に祠ある故に、世俗穴稲荷となづく。當山草創の時、開山慈眼大師これを勸請ありしといへり。又江戸雀に、當社を淨雲稲荷と記せり。淨雲とは木食淨雲の事なるべし。按ずるに、慈眼大師勸請の後、此沙門再興にてもありしにや、こゝを以て淨雲の號ある歟。又或説に、當社は太田道灌勸請なりともいへり。靈驗他にこえたる故に、常に詣人絶えず。

清水觀音堂　京師清水寺に比して、舞臺造りなり。此邊殊更に櫻多し。本尊千手大悲の像は、惠心僧都の作にして、主馬盛久が守本尊なりとぞ。長門本平家物語に、盛久斬首の罪に處せらるゝ時、清水觀音の加護によりて、刀杖段々に折て命を助けらるる事を載せたり。されど東鑑および其餘の書にも此事を見ず。

山王大權現社　清水堂の南にあり、內陣、拜殿、階下に至る迄、悉く彫物ありて、輪奐玲瓏人の眼を射る。此地を櫻が峯と云ふ。湯島聖堂の舊地にして、昔は殊に櫻多かりしといへり。

勸學寮　俗に百軒長屋といふ。池の端錦袋圓の元祖了翁僧都、天和二年に建立す。四方に列るところの寮舍あり。のちの五十餘間づつ、其數あはせて二百戶とす。勸學の僧徒常にこゝに居る、則ち當山の檀所なり。

講堂　勸學講院と號す。貞享元年に修營す。釋迦如來の像を安じて、日々に三數の書を講ずる事怠慢なし。今は觀音を本尊とす。

經藏　天和四年に建立す。中に一代藏經を收め、崎陽興福禪刹の開山如定禪師、經山寺（キンザンジ）より齎來ありし三聖人の古銅像を安ず。屋上より柱底に至るまで、悉く銅葉をもつて包裹す。其四方は石を疊んでこれを築き繕ちす。又經藏の後、左の方に、其戒師慈光不昧禪師、授號師前能泉禪寺法石大和尚、および二親養父母、ならびに自得居士の石塔婆を造立す。傍に僧都の石像あり。同所石壁の外に、道行の碑を建てたり。文は黃檗高泉和尚これを撰す。

武州東叡山勸學講院了翁僧都道行碑記

自古法中大沙門。播名布德於天下者。豈苟然哉。莫不皆是菩薩乘夙願輪而生於世。故示行菩薩六度萬行。以利天下。使天下人咸躋於無上無等至眞至聖之域。此之妙行實未易以言諭也。若今東都勸學講院了翁僧都者豈其人歟。自其脫白爲沙門。便發大乘心。行菩薩行。精持戒律。不失威儀。到處參方。嘗親近黃檗開山隱老人。及吾唐諸知識。飡風宿露。不以己憂。唯憂佛法不大興於世。而世之僧俗而不能盡諳佛祖之大法。乃乞武陵東叡山。剏勸學講院。正中築經藏。以貯三藏聖教。其外裏以銅葉。以防火患。內奉三聖像。乃明僧知定公得自雙徑蓋古銅像也。藏後之左右。立其戒師祝髮師。及二親養父自得居士之塔塚。其孝忱如此。藏前之西偏。有僧都石像。乃本院僧衆九百八十人。竝都料輩。感其功績浩大。以示不朽云。東西有文庫。藏儒老二教。及本邦書籍。又別設一講堂。中奉釋迦如來像。日講三教之書。俾國人聽者。知

三聖設教雖少異而利人善世則一矣。其前有方丈。院之四周有寮舍凡二百間。以栖諸方學子。其餘庖湢之屬悉備焉。僧都年老慮後堂宇朽壞。預備白金一千二百兩。爲遞年修葺之需。是則院既不壞。而衆可安身學道。無風雨之逼。無饑凍之憂。身安學成。則足以爲世福田也。於乎今之爲僧也。則田我已脫塵出俗。圓頂方袍。作三界大師之子。一餅一盎。飄然自在。天子莫得而臣。王侯莫得而友。高則高矣。是則未是。豈不聞佛事門中不捨一法乎。若捨一法。則不成滿足菩提。若僧都者可謂知本矣。以敬王公大人。與夫四衆。莫不知其名重其德。嘗於二三十載間。以苦行所積淨貲。盡贖大藏之經。散施諸名山大刹。凡二十一藏矣。年來又爲虎關國師。重建濟北院。今年春因予奉旨住黃檗。又願遞年施貲爲修飭伽藍。以及合山子院。但有所益之事。靡不勤行之。然奉己至薄。每坐臥一小樓。未嘗嫌棄。食則藜羹粟飯。行則竹策蒲鞋。以致

老病交侵。予常勤其少加受用以保道軀。僧都終不諾。予嘆曰。垂老而頭陀不息。非佛世之迦葉波乎。予與僧都法契已久。然未及至其講院。今春因詣東都謝恩。遂到院相訪。觀其措意之妙。立法之嚴。世所罕有。僧都需爲記。因述其大心大行以勸後賢云。　時

元祿壬申五年四月穀旦

黄檗山萬福禪寺第五代住持高泉敦敬撰

勸學坊了翁僧都、其俗性は鈴木氏、羽州尾勝郡八幡村の産なり。寛永七年庚午三月十八日に生る。宿業にやありけん、二歲にして悉く親族をうしなひ、おなじく十八年辛巳(十二歲)同國淸泉禪寺に入て奴僕となり、つひに齋藤自得居士のすゝめによりて薙染し、僧となりぬ。こゝにおいて因緣の不可思議なる事を發明せり。おなじく廿年(十四歲)みづから思惟すらく、それ一切藏經は如來の肝膽にして、人天の眼目なり、我心肝を碎き、誓ひて一代藏經を建立せんといつて、正保元年甲申(十五歲)鎭守八幡宮に詣し、至心に志願の成就を祈りたてまつり、夫より諸國を經歷し、あまねく高德の師に謁して、こゝかしこに掛錫す。承應四年肥前州興福禪刹の開山如定禪師の示現によりて錦袋圓の鑛方を製し、市店をひらきてこれを賣き、六年を經て、其價の餘許黃金三千兩を得たり。こゝにおいて、寛文十年庚戌(四十一歲)忍ばずの池の中島にして地を賜ひ、あらたに一島を築き、一宇を建てはじめて藏經全部安置することを得たり。よつて其頃報恩のため、錦袋圓を四十二萬人に施す。天和二年(五十三歲)又東叡山の中にして、四方五十餘間の地を賜ひ、勸學寮を建立す。院宇三甍四方二百戶の寮舍を設く。又二字の文庫を建て、儒老二教および倭漢の群籍を收藏する事、すべて三萬餘卷なり。すなはち忍ばずの中嶋より藏經をうつして經藏を建て、これを收む。こゝにいたりて志願圓滿す。日光御門主其功の大なるを御感ありて、學頭淩雲院をして、般若心經を講說開白せしめたもふ。又貞享二年、高野山光臺院に一藏庫を置く。仁和御門主御感賞ありて勸學坊權大僧都法印に住ぜらる。(以上了翁傳の要をつんでこゝに擧ぐ)

常念佛堂　護國院にあり。本寺には、釋迦、文殊、普賢を安ず。何れも佛工春日の作なり。寛永の初、慈眼大師公(白し て、開基生順に命じ、常念佛興行し給ふ。御祈願所に常念佛を置き給ふこと、深き所以有る由、殊勝の地也。

宗廟　御當家御代々の御靈屋なり。當山の院中より御別當を務む。

坊舍凡三十五宇　各領國の大諸侯是を營建し、食邑を附す。拾遺名所圖會に詳なり。

忍の岡　古き名所にして、當山の惣名なり。八雲御抄および歌枕名寄等にも、武藏の國にいれたり。

按ずるに、當山の惣名を上野と號す。或人云ふ、むかし藤堂侯の第宅ありし頃、本國伊賀の上野に地勢相似たるを以つて名とすとなん。是大なる誤なり。永祿二年小田原北條家分限帳に、島津孫四郎および圓城寺左馬助等江戸知行の中に、上野の地名を加ふ。よつて古くより唱へ來る事のあきらかなるをしるべし。

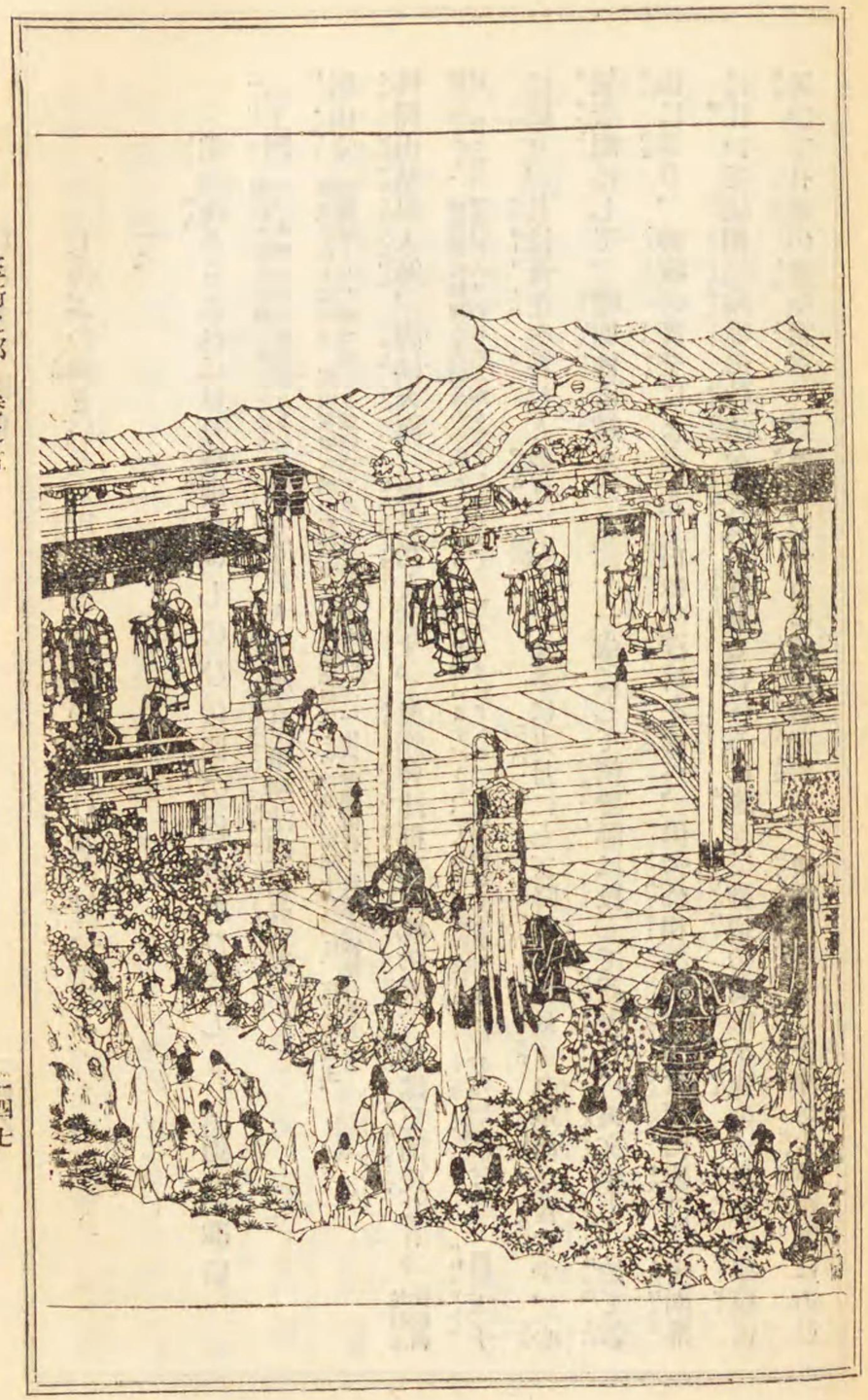
北國紀行

むさし野のさかひ、忍ぶの岡に優遊しはべり。鎭坐の社五條の天神とまうしはべり。をりふし枯れたる茅原を燒きはべり、

契りおきてたれかは春のはつくさにしのびの岡の露のしたもえ　堯惠

回國雜記

十月二日寛山堂
法華八講



しのぶの岡といへる所にて、松原のありけるかげにやすみて、

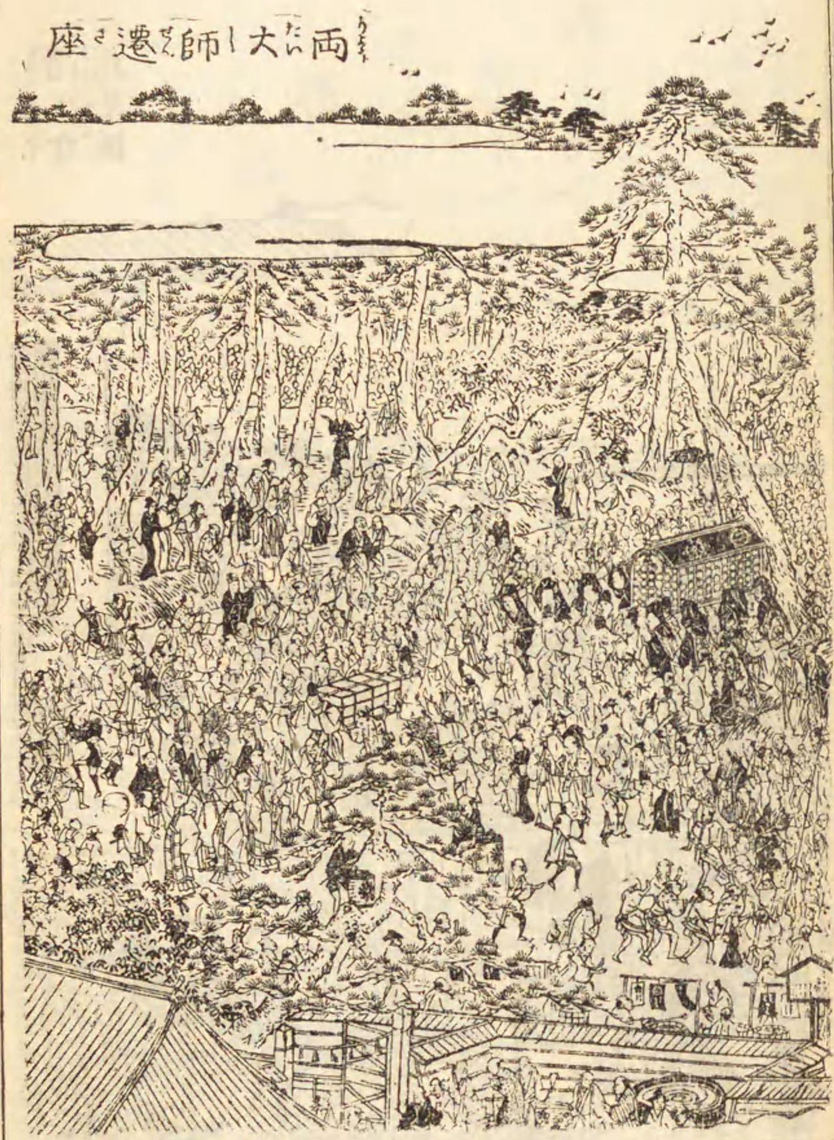
霜の後あらはれにけり時雨をばしのびの岡の松もかひなし　道興准后

二王門　明和九年の回祿に焦土となりて、今礎石ばかりを存せり。　額　東叡山　大明院宮公辨法親王眞筆

開山堂　屏風坂の上にあり。開山慈眼大師の影堂なり。世俗慈眼堂といへり。毎年十月二日、座主法親王、御導師として御本坊より輦輿にてこゝにわたらせらる。一山の僧徒出仕、法華八講執行あり。

抑開山慈眼大師、諱は天海、南光坊と號す。奥州會津郡高田郷の人、姓は三浦氏なり。足利法住院義澄の子とも、或は蘆名修理大夫盛高の一族ともいへり。されど師いますがうち、人あつて其俗姓を問へば、ひとたび空門に入りぬれば、知りてよしなしとて、答へたまはずとぞ。故に其實をしる事を得ず。父母嗣なく、月天子に禱り、其母奇花を呑むと夢見て娠む。まさに九月にして降誕す。幼より葷肉を食せず、心氣淸朗にして、聰敏他に越えたり。十一歳にして辨譽師に投じて祝髮し、天文年中、始て叡山に登り、神藏の實全にまみえて台教の深旨を傳へ、俱舍性相を園城の尊實に學び、復南都に往いて法相三論等の教法を學び、成重といへるに逢うて神道の奥儀を究め、足利の學校に遊びて孔老の書を讀み、道器といへるに首楞嚴を學ぶ。後郷に歸り、會津の大寧禪師にあひて教外別傳の旨を發明し、善恕和尚に碧巖集を聽く、一百則の話頭を會得す。其頃甲斐の信玄、台教を敬ひ、ある時諸師を請じて論義せしめ、天海を講主とす。衆皆辭理の奇なるを感稱すといふ。是よりして名を朝野にしらる。後常州江戸崎不動院に住す。時に文祿二年夏、大に旱す。民うれへて、師をして請雨の法を修せしむ。其時神女あつて五鈷杵を授く。師高田浦の深淵に臨んで法を修し給ふに、膏雨忽ち注いで、百穀大に登る。彼五鈷杵、今猶傳へて靈堂にありといへり。又慶長四年、武州仙波の喜多院に住す。同八年、下野國長沼の宗光寺に移る。同十二年、神君命じて叡岳の南光坊に住持せしめ、再び命じて喜多院に歸り居らしむ。同十四年、山門に登り、法華大會を行はるゝ時に、重職の勅許を蒙り、新題者の精義嚴重につとめ給へり。上皇　後陽成院　度々召ありて法要を詔問したまひ、奏對詳明なるに依て、叡感淺からず、權僧正に擢られ、御手づから御衣燕尾等を賜ひ、山科の毘沙門堂の門室に附せらる。又宸翰を下したまひ、權を轉じて正に任ず。同十七年、神君河越に狩したまふ折から、仙波に立寄せたまひて、殿堂を修營せしめ、莊園を寄させたまふ。同十八年、復命を承りて日光山に居る。神君薨

月毎の晦日は西大師の
御影を爰の院に安置
おしまいる星の時迄
奉らんとて江府を近
者人群参して道路
溢る実に此地繁昌
の中最こも首かる


西大師遷座

清水堂
花見圖

上野
清水堂

ながめけて
志ろも
さらさの
袴
うれ

室井
其角

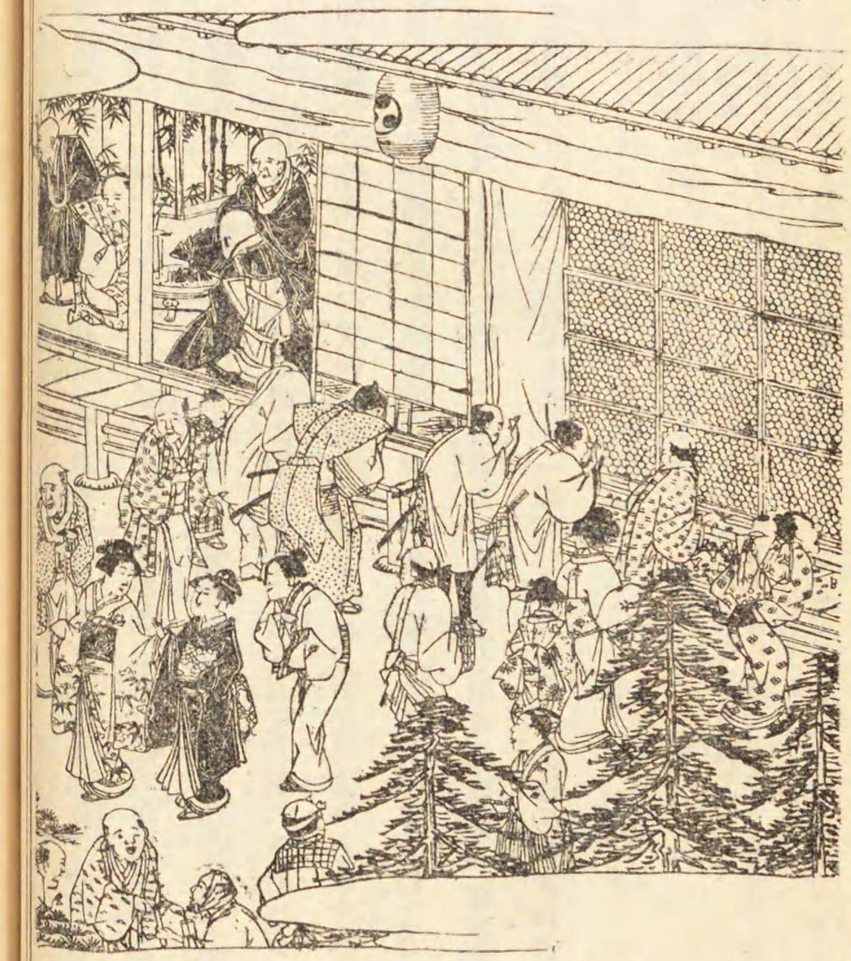
去の後、其遺命を奉じて葬を久能山に營み、元和三年、尊靈を日光山に遷坐なし奉る。是往古の大職冠の例に倣ふ。則ち山王習合の神に鎮りたてまつり、勅を奉じて、東照大權現と號し奉る。大樹 台德公 亦神君におとらせたまはず優寵したまひける。其先元和二年大僧正に任ぜられ、先帝 正親町院 二十五の御遠忌にも、御導師に請じたまふ。其後寛永二年、大樹 大猷公 命じて東叡山を闢かしめ、師をして開山とす。又上皇の二宮を 守證親王 日光山の御門主に請ぜさせ給ひ、師の御弟子に沙汰したまふ。其後上野國新田庄世良田山長樂寺を賜ひ、東照大權現の神祠以下の諸堂を造立あり。亦同じく二十年の秋、僧正微疾を示す。時に大樹 大猷公 および紀州亞相 賴宣公 駕を屈し疾を問ひたまふ。僧正遂に遺語五則を書す。大樹畫工探幽に命じたまひて、其頂相を寫さしむ。一日唯識論を閲す。忽に文殊菩薩の來現を見る。則ち其時至るをしり、端座合掌して遷化す。時に寛永二十年十月二日なり。東國高僧傳に、寛永十九年壬午十月二日化寂とあり。其譯は凡そ百有餘歳といへども詳ならず。紫雲天華の瑞あり。影堂を當山、ならびに日光、天台の三山に建つる。當山慈眼堂其一なり。慶安元年、慈眼大師と謚號の詔勅を下したまふ。以上兩大師緣起および東國高僧傳等の要を採る

師、諱は良源、江州淺井郡の人、父は木津氏、母は物部氏なり。延喜十二年壬申九月三日に生る。父母子なきを憂へ、觀音に祈りて設くるゆゑに、觀音丸となづくといへり。十二歳にして叡山の理仙を師とし、同六年に薙染す。理仙入寂の後、三條右大臣定方公、恩訓律師をして大師に受戒せしむ。亦尊意僧正を拜し登壇し、早く博學の名を得たり。應和三年八月、清涼殿に南北雄才の僧を召て、御八講行はせたまふ時に、卽身成佛の相を顯す。康保三年、天台の座主に補せられ、山務を領する事すべて二十年、又天祿二年四月十五日、梵網戒品を誦す。纔か數句を唱ふるに至つて、口より光明を放つといへり。天元四年七月、大僧正に轉じ、輦車の宣旨を下し給ふ。永觀三年正月三日、彌陀の尊號を唱へて入寂したまふ。化壽七十四。一條院、永延元年、其德の高を仰ぎて謚を賜ふ。以上兩大師緣起、元亨釋書等の要をつむ。

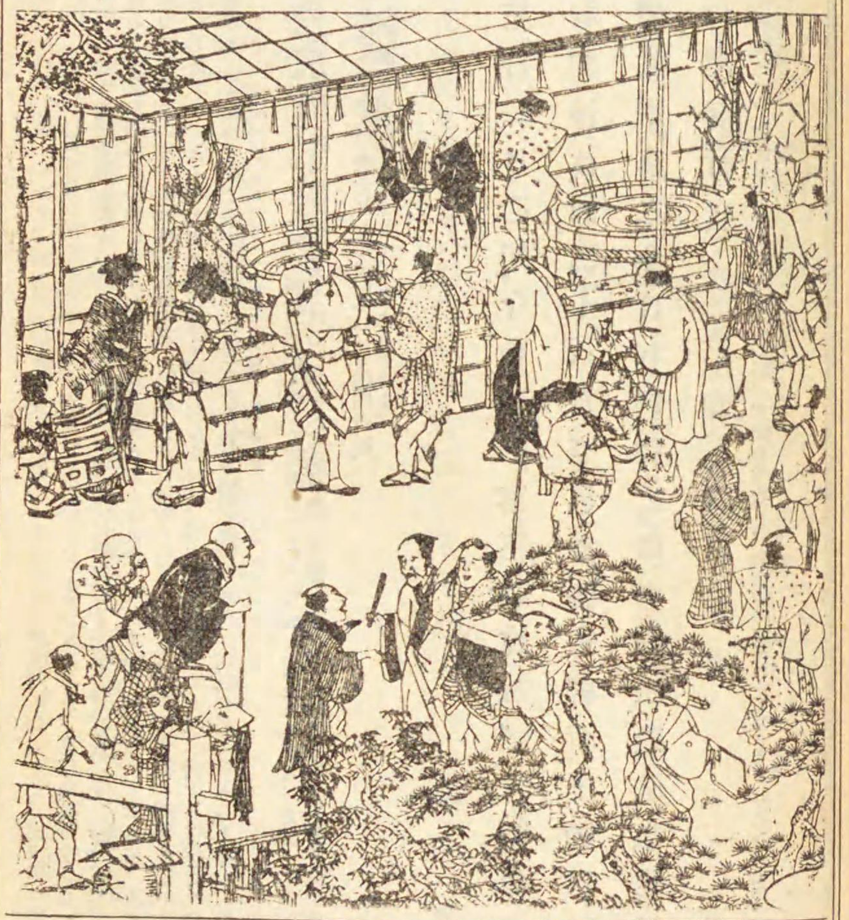
慈恵大師影像　民部法眼の筆

慈恵大師の影像は、阿闍梨の君の寫させたまふ眞影と共に比叡山にありしに、元龜の頃尾州織田氏出門を襲れし時、その折の執事福成坊の阿闍梨、みづから兩像を負ひたてまつり、香芳の谷を經て仰木村をさし落ち行きけるに、敵道をさゝへて、衆徒一人も通さじとたをはなちければ、こゝに供奉するは元三大師の尊像なり、すみやかに通すべしといひければ、此手の大將關白秀吉公、いまだ木下藤吉郎といへる時なりしが、是を聞き、いそぎ馬上より飛びおり、兜をぬぎ道を開きて、通したてまつりぬ。こゝにおいて乎爽の難を免れ

正月三日
大黒詣



毎歳正月三日の御下の備人東叡山護國院の大黒天へまうゝ此門影へ恭しく信貴參詣す世か盛敷者一此日供物の煮飯を陽おひたしと奈良漬の筆おあらし俗是をもつて福の陽といふ



たまひ、夫より堅田の浦へいで、船にて湖東へいたり、頻田井の庄にしばらく鎮めたてまつり、後山門再興ありて、天正年中彼阿闍梨の公のうつしたまふ尊影は、横川(ヨガハ)に還坐なしたてまつる。今四季講堂に安置したてまつる是なり。民部法眼のうつしたてまつりし尊影は、勢州安濃津の西來寺といへるにすゑたてまつれり。其後度々山門より乞ひたれども、更にうけひかず。寛永十七年、大樹大猷公御令嗣御誕生の御祈のため、慈眼大師かの影像をまうし下し、丹精をこらしければ、やすらかに御出生あらせらる。そののち慈眼大師遺言してのたまはく、本山の例にまかせ、この眞影を當山院々三十日づつ執事したてまつるべし、又大權の聖像に竝ばんは恐れあれども、我が頑像もそのあとにしたがひ、ともに大樹の御武運を守りたてまつり、國土豐饒を惠まんとぞ。夫より當山院々に一箇月づつ執事したてまつる事とはなりぬ。しかありしより、貴賤のへだてなく、歩を運び祈願するに、成就せずといふことなし。月毎の三日十八日、參詣群をなせり。

同除魔影　或時疫鬼來りて慈惠大師を惱まさんとす。時に圓融三諦を觀じて彈指したまふに、かの疫鬼たちまちに去る。よつて衆生をして疫災を遁れしめんがため　夜叉の形相をあらはし、みづから鏡を把つて影をうつし、誓つて宣く、我が此像を置かばかならず邪魅の來る事なく、疫災をはらはんと。夫よりして後は、三台槐門の柱、萬民茅屋の扉に至るまで、今にこの影像を貼したてまつらずといふことなし。

東鑑曰

寛元五年丁未三月二日乙卯。今日可レ摺寫不動竝慈慧大師像之由。被レ仰二政所一之間。有二其沙汰一。同二十八日辛巳爲二將軍御祈一。不動尊竝慈慧大師像一萬體被レ摺寫之。今日有二供養之儀一。導師松殿法眼也。信濃民部大夫入道行然奉二行之一。

權大納言飛鳥井榮雅卿は近世の歌仙にて、世にきこえある人なりしが、大師を信敬し、影像摺寫常にたえずとりおこなひたまふ。彼の家の集にいはく

慈惠大師の尊像を、毎月兩度摺りたてまつることは、上は玉體よりはじめ、其外わたくしざまの妻子從類のため、また兩道の門弟をいのること多年になりはべりぬ。今老病こゝろぼそくはべる。今日も摺りたてまつるとて、おもひつゞけける。

我が身世になからん後の末までもいのる心はとほれとぞ思ふ　榮雅

慈眼大師眞影　狩野探幽の筆

慈眼大師の眞影は、慈惠大師の影像と共に、當山院々順番にて、一箇月づつ執事す。年ごとの十月は、御本坊に遷坐あり。

大悲籤　慈眼大師夢中の告げによりて、信州戸隱山に在りしを、當山にうつしたまひしといへり。今も兩大師の龕のまへに安置す。諸人吉凶禍福をトふに、掌を指すがごとし。

佛祖統紀曰

大士籤。天竺百籤。越圓通百三十籤。以決二吉凶一。其應如レ響。相傳是大士化身所レ述。云々。

抑當山は江戸第一の櫻花の名勝にして、一山花にあらずと云ふ所なし。いにしへ台命によりて、和州吉野山の地勢を摸し植ゑさせらるゝが故に、花に速あり遲ありて、山上山下盛をわかてり。彌生の花盛には、都鄙の老若貴となく賤となく、日毎に袖を連ねてこゝに群遊し、花のために尺寸の地を爭ふて、帷幕を張り、筵席を設く。詩歌管絃は鶯聲に和し、錦衣繡裳は花影に映じ、愛玩賞詠日の暮るゝをしらず。

慈雲山瑞林寺　上野清水門の外、二三丁北の方にあり。日蓮宗にして、甲州身延山の觸頭、江戸三箇寺の一なり。開山は本山十七世慈雲院日新上人、天正十九年の草創なり。本尊丈六の釋迦如來は、延寶五年の回祿にほろびて、今御首ばかりを存せり。當寺に安置せる日蓮大士の像は、むかし同所谷中感應寺にありしを彼寺改宗のときよりこゝに移すといへり。

長耀山感應寺　上野谷中門の外にあり。天台宗にして、本尊は傳教大師の作の毘沙門天を安置す。當時始は日蓮宗にして、宗祖上人を開山とし、日長上人中興ありて、ゆゝしき一宗の寺院たりしが、元祿年中、故ありて台宗に改められ、爾より後、東叡山に屬す。其時大明院

の宮の御願によりて、叡山横川にありし傳教大師の作の毘沙門天の像をこゝに移し、本尊とせらる。京師鞍馬山の毘沙門堂は、比叡の乾に當りて、佛法守護の道場なれば、當寺も東叡山の乾に當るを以て、鞍馬寺に比せらるゝといへり。境内櫻桃の二花ありて、春時爛漫たり。

五層塔　始め當寺中興日長上人建立ありしが、明和九年の火災に焦土となれり。仍て寛政の今再建して、むかし記復せり。

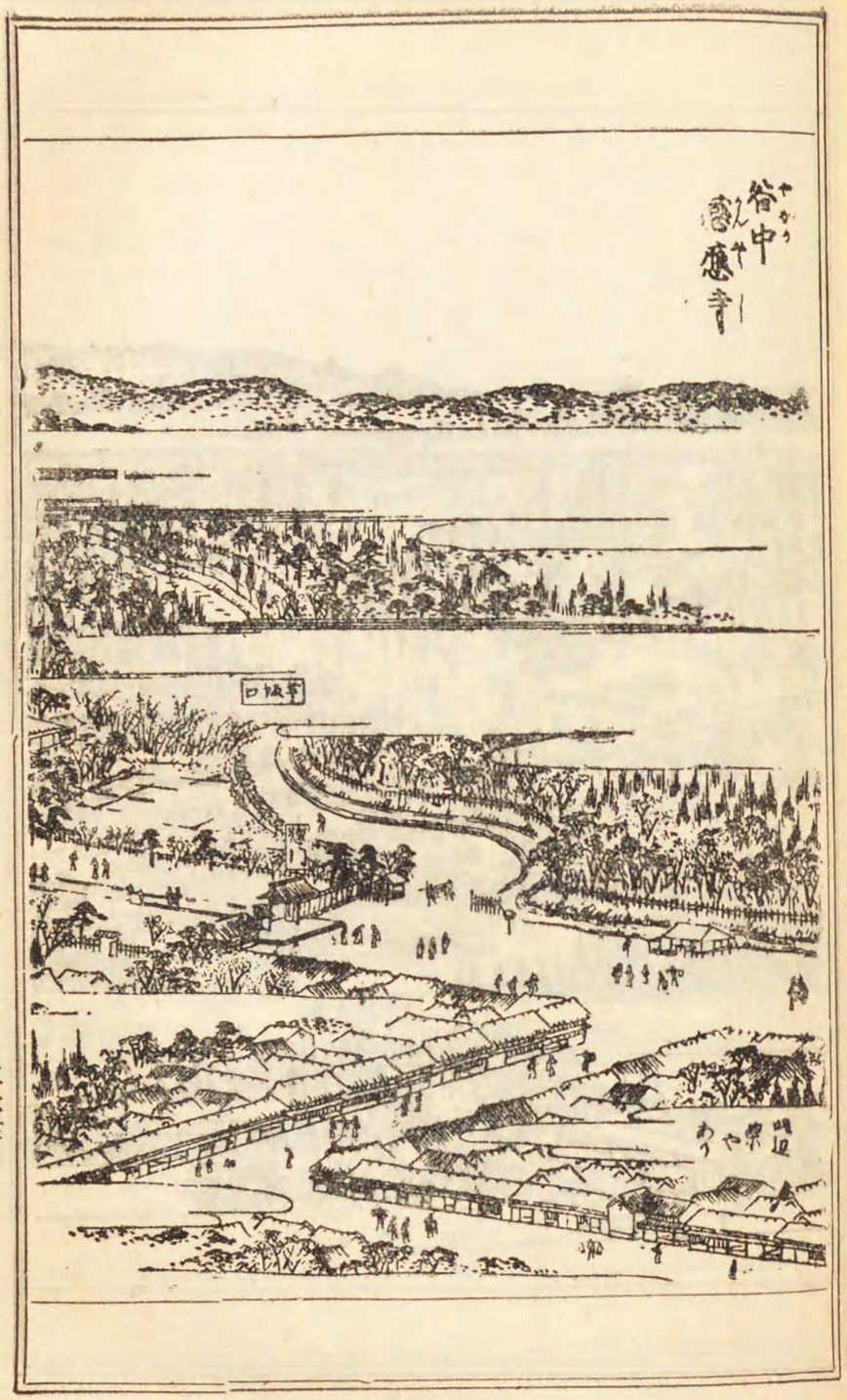
長久山本行寺　同所北の通にあり。

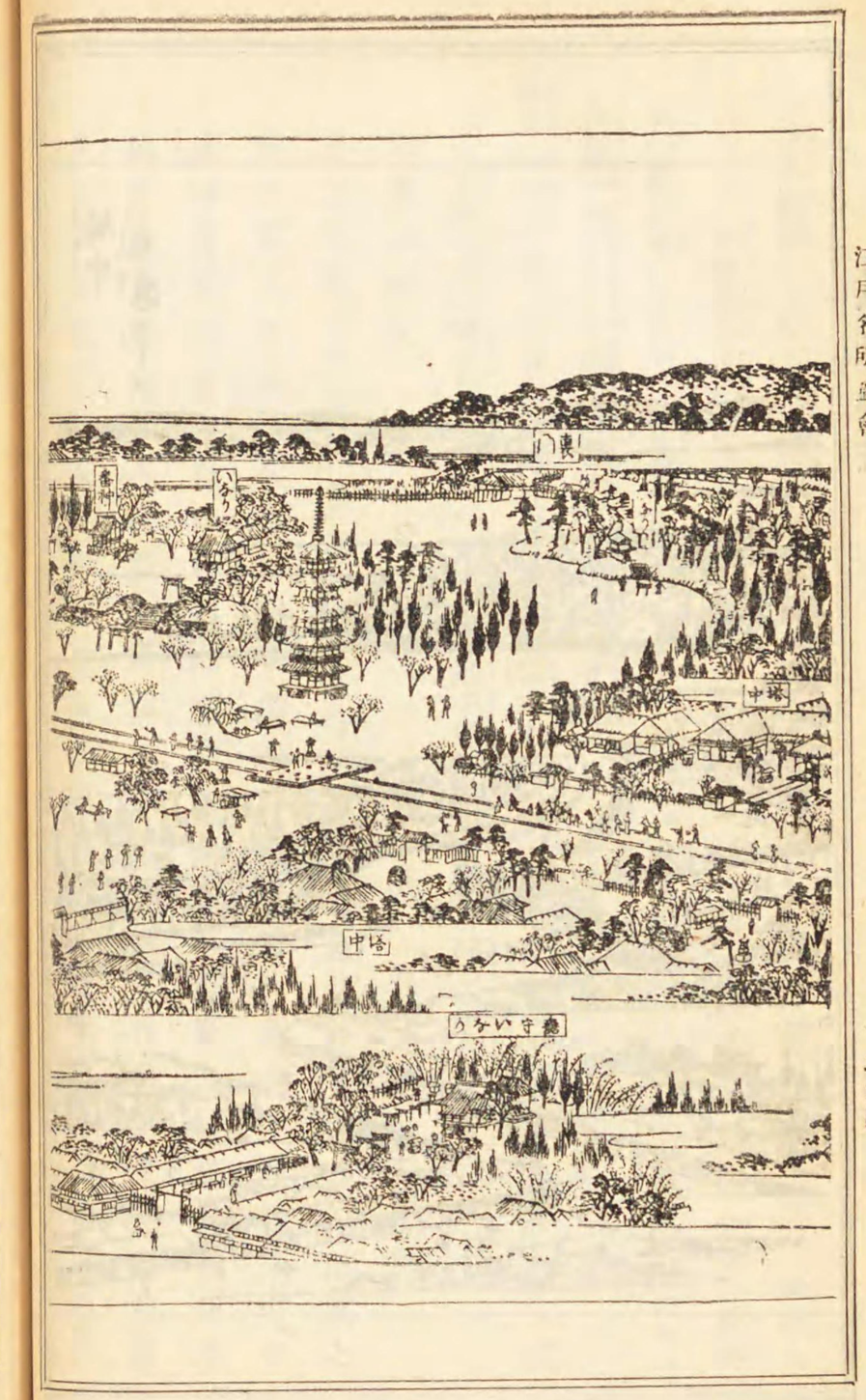
日蓮宗にして、開山は日立上人、大永六年に草創す。往古は太田道灌の建立なりといへり。當寺庭中に道灌斥候塚と稱するものあり。

道灌丘碑文

筑波石正猗撰

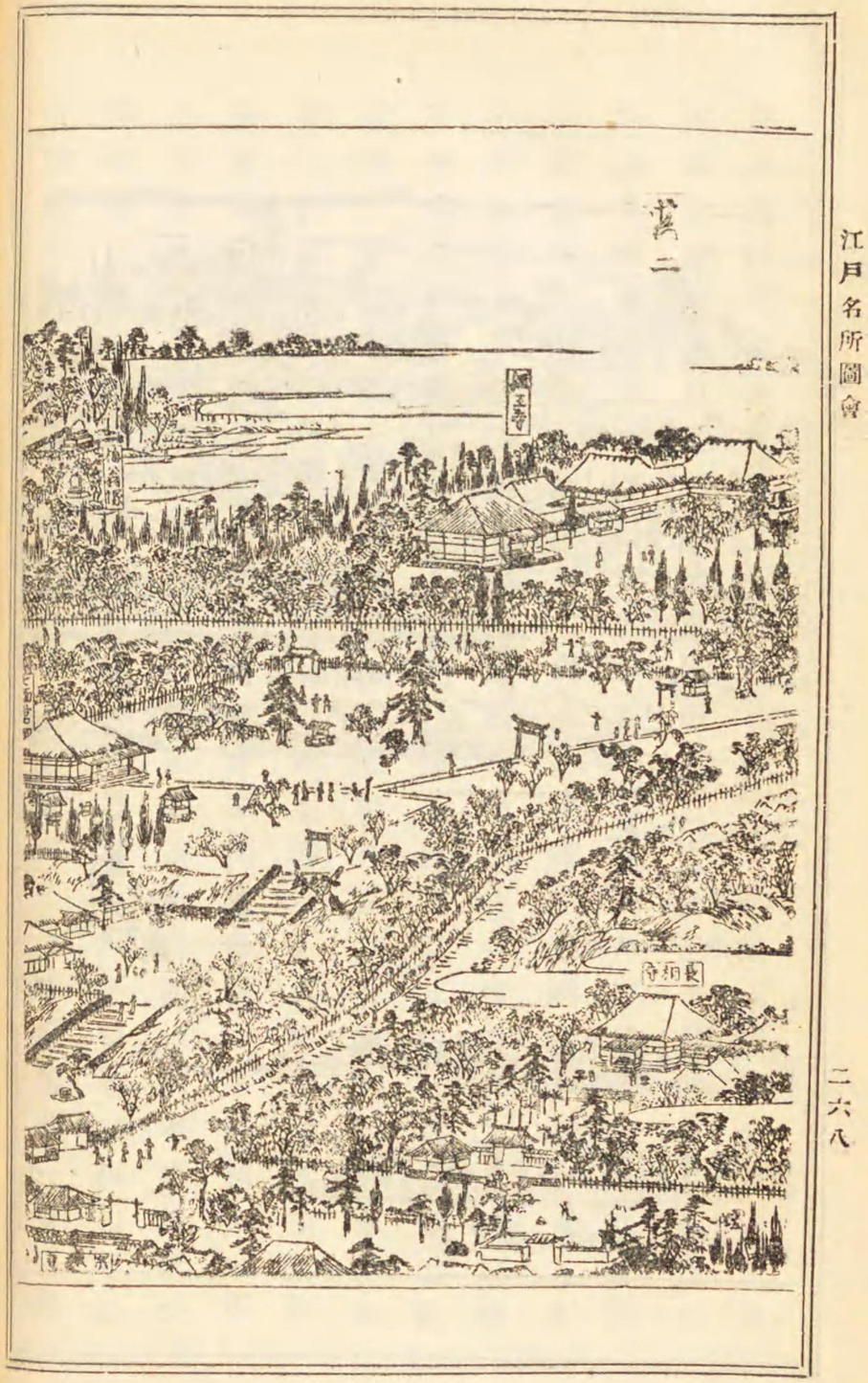
里曰日暮。寺曰本行。在東都郭北。寺有丘。曰道灌丘。奚名道灌太田氏之號乎。里人思太田氏也。里人奚思太田氏無忘其惠也。寺西北有山。亦曰道灌。蓋山則太田氏保鄣之遺。而丘乃其斥候臺之址也。故無丘唯址耳有之。剏自里人之思太田氏也。自有丘二百有餘年于今矣。相傳昔太田氏既亡。里人過其墟。盡爲禾黍。閔壘壞臺圮。彷徨不忍去。而丘



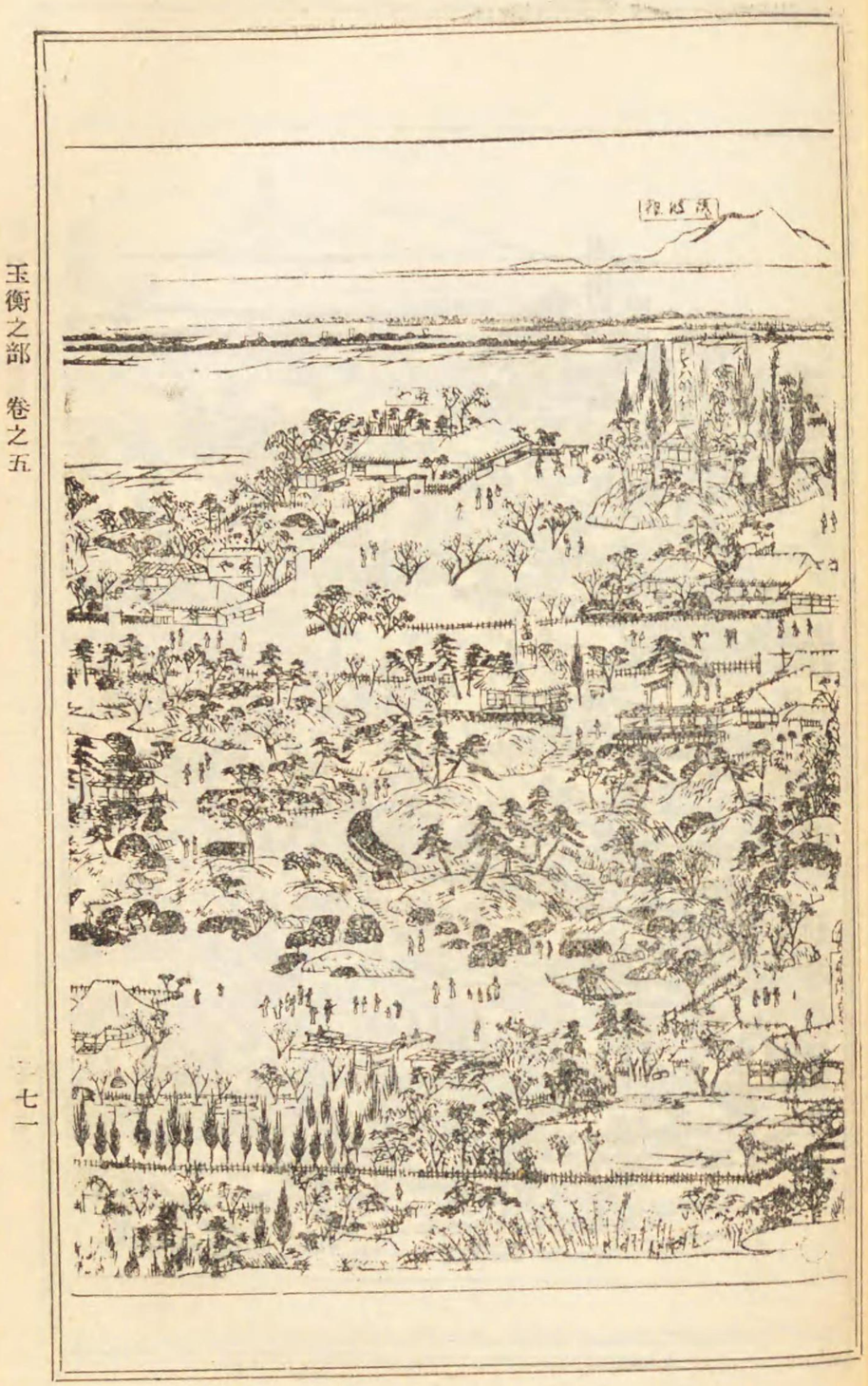

東門
塔中
中塔
うなぎや

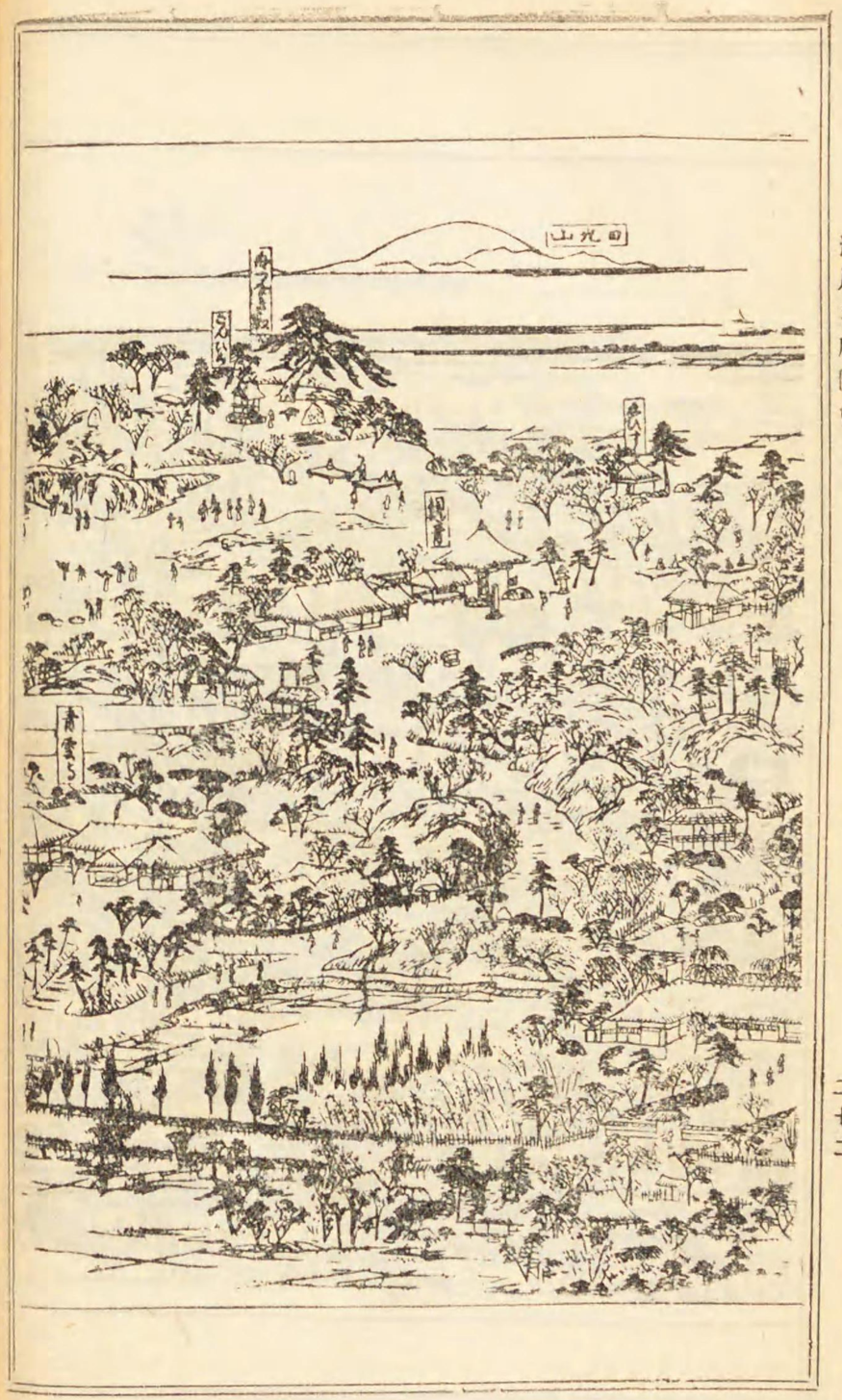
中塔
西門
中塔

其址焉。故丘與山皆用其號名矣。寺舊在谷中里。太田氏群屏攝之所在。而道灌之曾孫今懸河侯。世々相承以守其祀也。寺與群屏攝遷於斯里者。繇寶永中也。遷則得斯丘。蓋不幾得矣。可不謂奇也。稽諸譜牒。太田氏名持資。官左衛門大夫。道灌其號。源光祿賴政十世孫。父道眞名資淸。以永享四年壬子。生道灌於相州扇谷。少恢廓有大志。博涉經史。善兵法。明畫策。是時天下戰爭。諸國瓜裂。各據其黨。迭爲脣齒。道眞道灌二世屬管領上杉氏。府中推道灌贍智豪邁。有文武之材。專委兵機之要。長祿二年戊寅。城武州江戸焉。而鎭之。正其封壘。險其走集。每與鄰國戰。利在以寡勝衆。兩毛二總諸城。聞風震慴。降者不絕。大半爲上杉氏之有者皆其力也。既而州界寧肅。百姓悅服。道灌增修德。信以懷初附。至敵國諸將皆謂彼專爲德我專爲暴。是不戰而自服也。寛正中。道灌入京。王人采道灌所詠國風。奏御。天子乃賜御製歌一章。以褒



其三




富士山

揚之。迨于今世所傳稱。其人英武而文者可知也。寛延三年庚午。寺主僧日忠。與懸河大夫古屋孝長。四宮成煥圖。樹石于丘上。俾余屬厥事石子。曰。昔灌公之德。及武州人。豈猶荆人之思羊叔子乎。不然何至斯里之人。亦無忘其惠。丘其址焉。以貽諸後世也。吾聞之。羊叔子死無子。襄陽百姓。於其平生游憩之所。建廟立碑。歲時享祀。望其碑者靡不墮淚。唯灌公者異於此。國初時。其五世孫資宗。始稾茅土之封。食邑五萬石。寔爲道顯公。繇顯公又四世于今。瓜瓞緜緜。奕葉昌阜。其斯爲盛矣。方今縣河君大夫。以歲時朝東。則春秋齊肅有事。群屏攝遂登斯丘望之。必有若觀當其時。褊裨分隊。整勒戎馬。旌旗繽紛。白羽若月。赤羽如日。壁司徒鋭司徒。各慎其守。猛士發揚踊躍用兵。乃皆延頸企踵。以待斥候之擧燧者焉爾。於是乎君大夫慨然。無念爾祖。聿修厥德。將慎其四竟。完其守備。訓有司。以義。施小民。以惠而光昭令名。以示子孫。無亦監於斯乎。然後知里人丘其址焉。寺主碑其丘焉。皆有日也夫。

三十番神堂　本堂のまへにあり。昔濱城中平川に安置せし靈像にして、開眼は日蓮上人なりとぞ。

日暮里　新堀に作るを正字とす。永祿二年北條分限帳に、讀山彌九郎江戸知行の中に、屋中新堀の名を加ふ。今、日暮里と作るは、寛延の頃よりの事なりといへり。

感應寺裏門のあたりより道灌山を界とす。　此邊寺院の庭中奇石を疊で假山を設け、四時草木の花絶えず、常に遊觀に供ふ。就中二月の半よりは、酒亭茶店の榿几所せく、貴賤袖をつどへて春の日の永きを覺えぬも、此里の名にしおへるものならん。

七面大明神社　同所延命院といへる日蓮宗の寺に安置す。開山日長上人、萬治三年庚子正月十六日、夢中に靈告を得て後勸請すといへり。

或人云ふ、慶安元年三澤の局、甲斐の七面山へ千日の間參籠し、夢中に鱗一枚を感得す。依て當社を建立し、嚴命に因て延命院となづくるとぞ。

補陀山養福寺　觀王院と號す。同所北の方にあり。本尊は三尊の彌陀佛、開山は木食義高上人なり。傳は前の圓滿寺の條下につまびらかなり。

觀音堂　西國坂東秩父百番の札所をうつせり。本尊如意輪觀音佛工春日の作にして、西國札所第一番紀州那智山のうつしなり。

十一面觀音　弘法大師の作にして、坂東札所第一番相州鎌倉杉本のうつしなり。　正觀音　慈覺大師の作にして、秩父札所第一番四萬部寺の摸なり。

抑此百觀世音は、義高上人の建立なり。上人初め高野山の高臺院に住職たりしが、後彼寺を退去し、當地に赴き、百番の札所を摸さん事を企つ。是本土に至りがたき兒女等の結緣の爲となり。依て此地に小庵のありけるを、闢きて寺とし、往古太田道灌勸請ありし下諏訪明神の社地なり。數千歩の地を寄附せられしとぞ。本尊おほくは野山より遷し奉る靈像なりといへども、百體に充たざるを歎き、これを修補し、一體毎に佛舍利一顆を御首に籠め、竟に百體の尊像全からしむとなん。

二王門の額に補陀山とあるは、油小路隆貞卿の眞蹟なり。

諏訪明神社　同所北の方、諏訪の臺にあり。信州諏訪の祭神におなじ。上諏訪は健御名方命、下諏訪は八坂刀賣命なり。古事記に云く、健御名方命は大巳貴命の子なりとあり。

當社は元亨の頃、豐島左衞門佐建立す。其後太田道灌、此地を江戸城の出張の砦とせしみぎり、修營して、郭内の鎭守となせしとぞ。社頭今も杉の木立生茂りて上久たり。例祭は七月廿七日なり。當社別當は眞言宗にして、法輪山淨光寺と號す。當寺の書院は、高崖に架して、眼下に千歩の田園を見下せり。風色尤も幽雅にして、四時の眺望たらずと云ふ事なし。中にも雪のながめ勝れたれば、世に稱して雪見寺とも號くとかや。

人麻呂祠　當院庭中に安ず。頓阿法師の作にして、杉の白木をもつて作れり。是則ち攝州住吉社へ奉納ありし三百體の共一なりといへり。

地藏堂　同じく門のかたはらにあり。本尊は紫銅（カラカネ）にて、立像八尺の地藏尊なり。慈濟庵空無上人建立ありて、元祿四年に開眼供養す。六地藏の一なり。

淨居山青雲禪寺　同所にあり。妙心寺派の禪宗にして、堀田家代々布金の道場たり。昔堀田相州刺吏紀正亮侯、羽州山形在城の頃、白瑛和尚の道光を慕ひ、師に就て法を需む。侯台命を奉じて、封を下總の佐倉に移すの頃、彼地に小庵を結び、師をして燕座せしむ。其後當國入間郡より、藤井山淨居寺といへる頽廢の寺院を引いて、此地に當寺を草創す。白瑛和尚、寶暦七年、相の鎌倉建長寺にして坐化す。依て侯謚祥碩海和尚と謚つて當寺を建立す。故に白瑛和尚を開祖とし、碩海和尚を中興とす。青雲の二字は、正亮侯の法號なり。其後嗣君正順侯、香花料として北總の佐倉にて百石の地を寄附せらる。境内富士淺間宮、秋葉金比羅、辨財天、護國稻荷等、何れも往古太田道灌の勸請なりといへり。

船繫松　青雲寺の境内、涯に臨み、欝蒼として聳えたり。往古は二株ありしが、一株は往じ安永元年の秋、大風に吹折れて、今は一木のみ殘れり。此樹蔭より眺望れば、荒川の流は

道灌山穂蟲

文月の末を過る中ふーとてうりわしさ名ゐーあふ虫塚の辺を奇絶とす風人吟客こゝ[illegible]まつて終夜その音聲を珍重す中ゆゑ蓮兒の言い勝て[illegible]いく蘭麝珍孤娘のあつまるゆゑ金閣寺の振袖うくあらはれ宵明の月と紛やすくも一夏とゞいまん

ほうらの糸
すゝむし
さうを
尾茅
つれ
真角

白布を引くが如く、筑波、黑髪の山々は畫くに似たり。豐島の村落は眼下にありて、耕し畑うつ賤が業までも一望に入り、利根川の遠帆緣樹のかげに見えかくれして、さながら白鷺の飛ぶが如く、此地の風色畫中にあるが如し。

或人云く、往昔此麓は豐島川に續きし入江にて、道灌の砦城（トリデ）ありし頃は、米穀其外すべて運送の船よりこの松を目當にせしものにて、つなぐといふもあながち繫ぎとゞむるの義にはあらず。是は舟人の詞にして、つなぐといふは、目的にするなどいへるに同じ心とぞ。よつて其後道灌山の船つなぎ松と稱して、はるかに此所の松を目當にせしを、誤りて道灌船繫ぎの松と唱ふるとぞ。

道灌山

一名を城山ともいへり。南は新堀を限り、北は平塚に接す。往古太田道灌、江戸城にありし頃、出張の砦城とせし跡なりとも、又關道觀坊といへる者の第宅の地なりとも云傳ふ。道觀坊はじめは小次郎長顯といふ、後剃髮して道觀坊となづくるとぞ。中興應寺の開基にして、則ち應感寺を長耀山と稱するもこのゆゑなり。谷

此地藥草多く、採藥の輩常にここに來れり。殊に秋の頃は、松蟲鈴蟲露にふりいでて、清音をあらはす。依て雅客幽人こゝに來り、風に詠じ、月に歌うて、其音を愛せり。

根津權現社

上野より五町ばかりを隔て、乾の方にあり。

祭神　素盞嗚尊　御產土神　相殿　左　山王權現　御城の鎭守神　右　八幡宮　源家の祖神

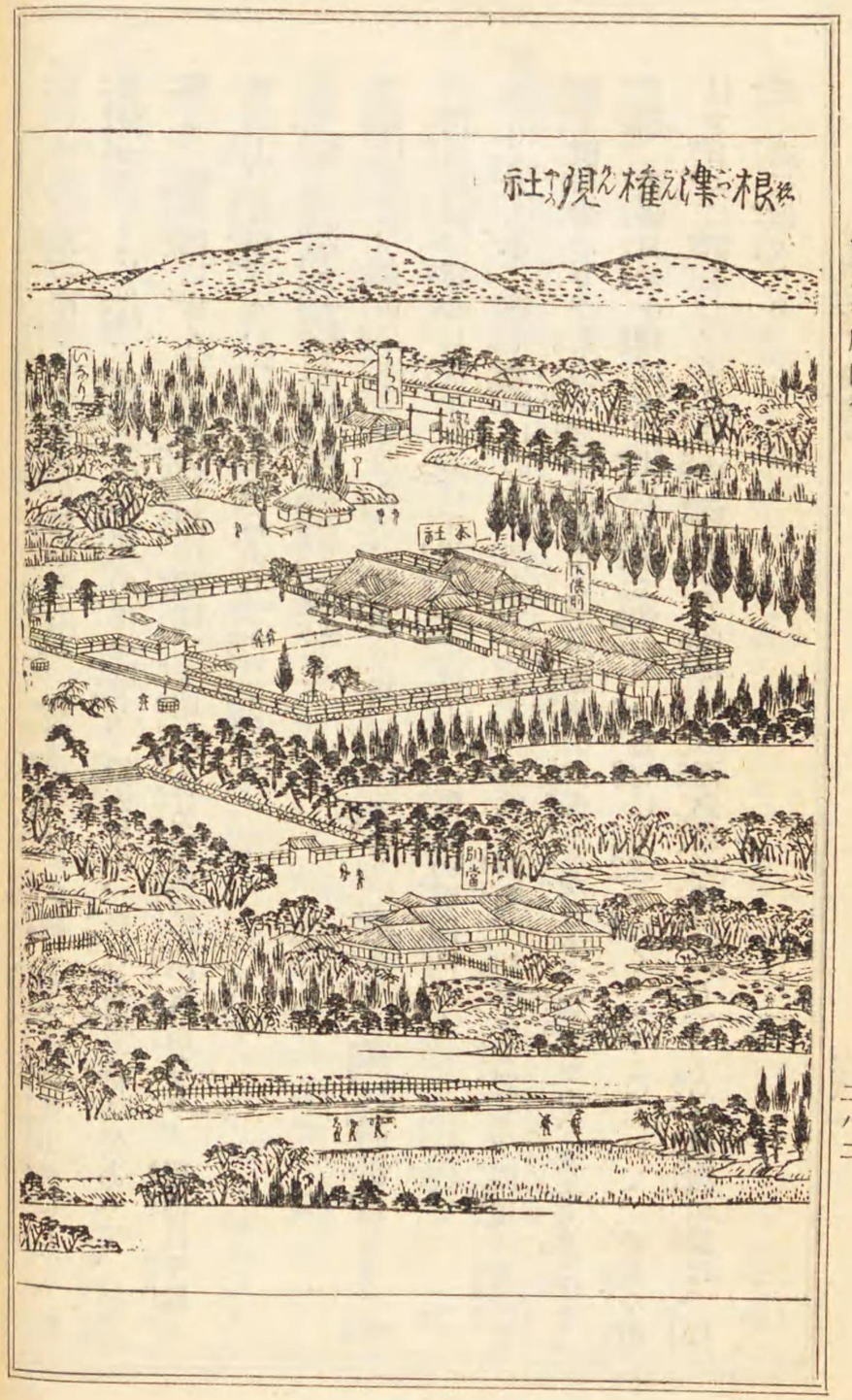
當社境內、始めは甲府公御館の地なりしが、根津權現は、大樹　文昭公　の御產土神にして、御宮參迄ありける故、後に右の御館の地を賜り、寶永年中、新に當社を御造營ありて、結構備る。隨身門に掛くる根津大權現の額は、大明院宮公辨法親王の眞蹟なり。舊地は千駄木坂の上、元根津といへるところにあり。祭禮は隔年九月廿一日なり。

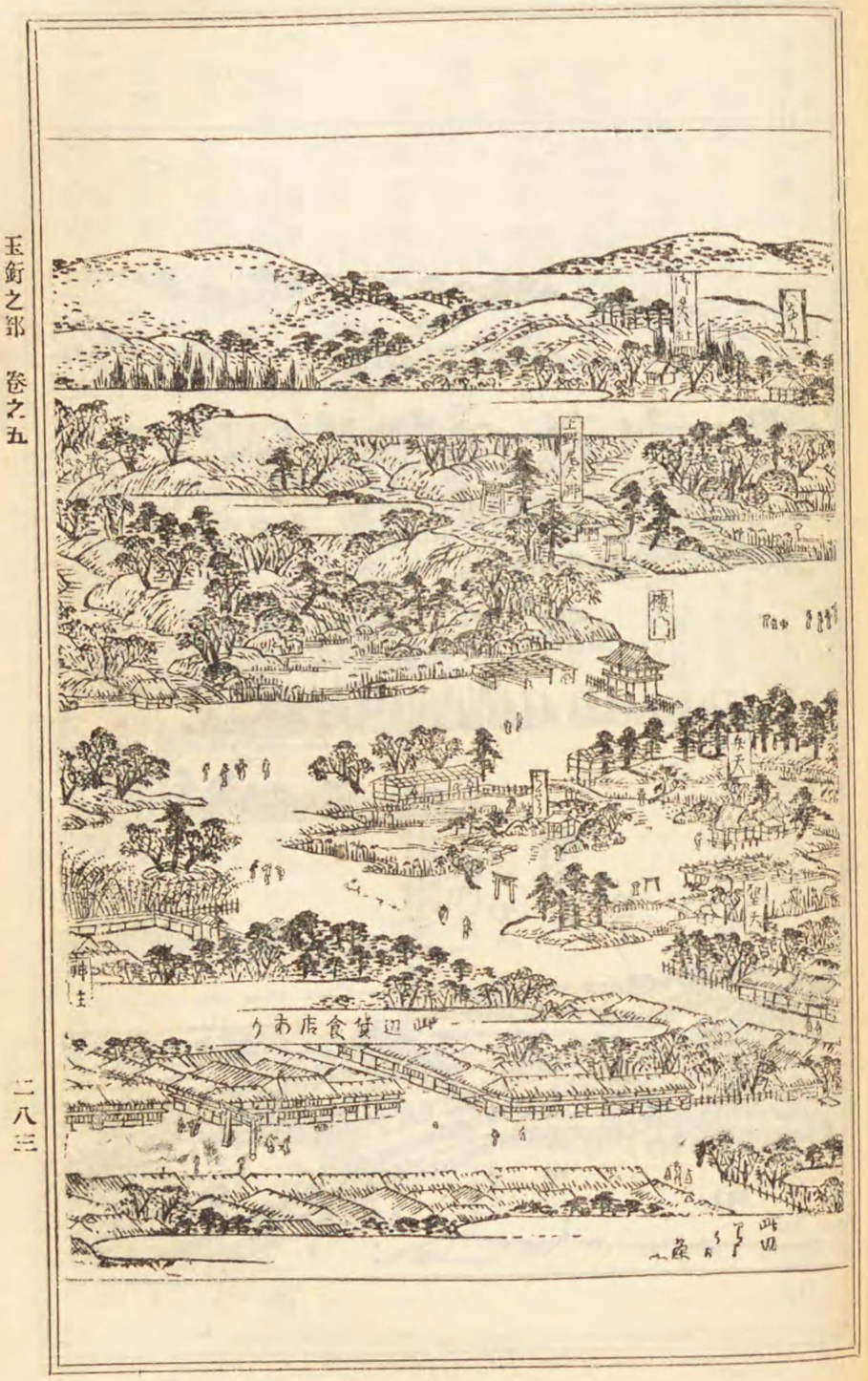
觀音堂　本社の左、岡山のうへにあり。洛陽清水寺の摸にして本尊千手大悲の像は、慈覺大師の作といへり。

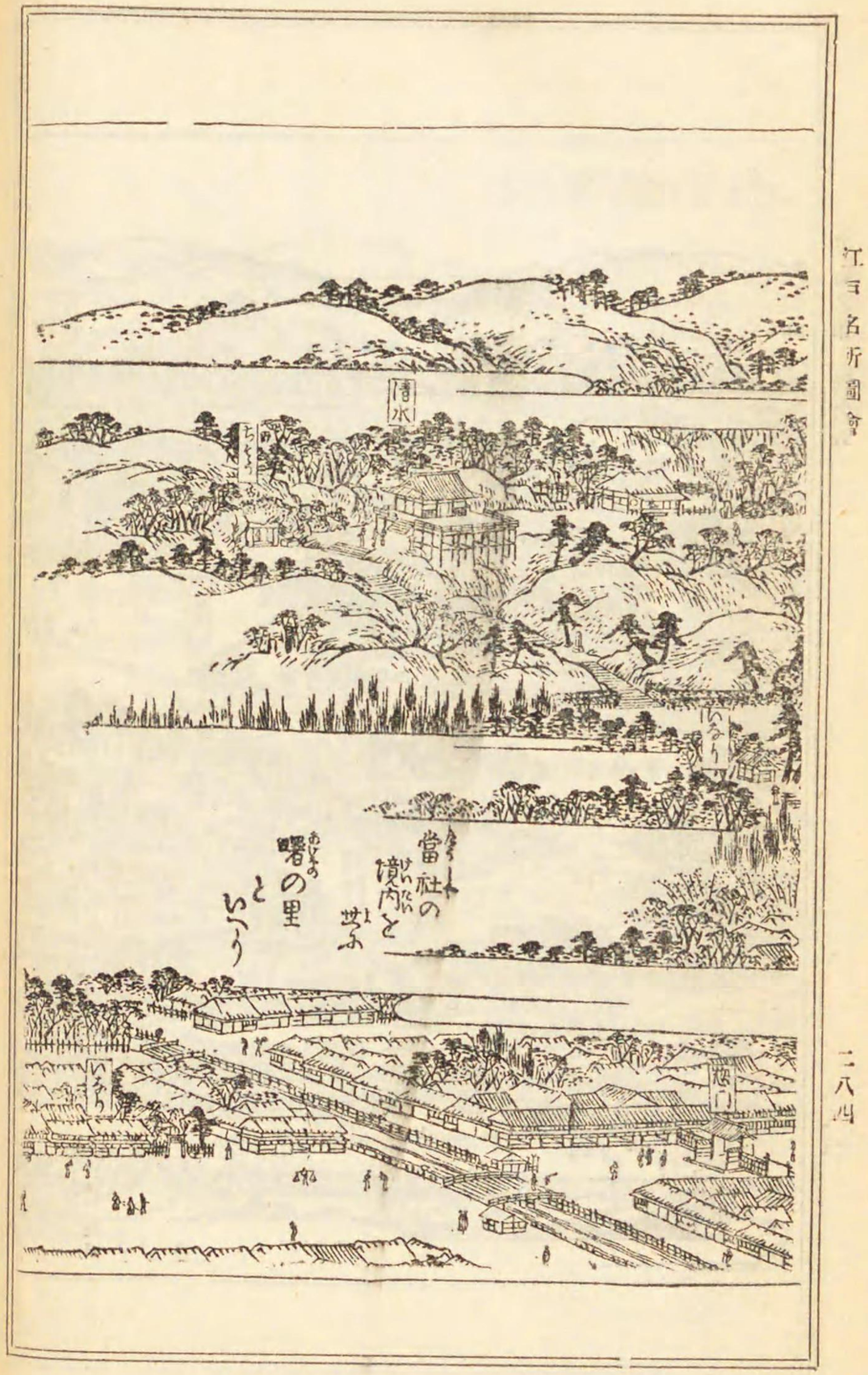
當社境內は、假山泉水等をかまへ、草木の花、四季を逐うて絕えず、實に遊觀の地なり。殊に門前には、貨食店簷をならべて詣人を憩はしめ、酣歌の聲間斷なし。

普賢山法住寺

谷中三崎にあり。淨土宗にして、本尊に阿彌陀如來を安置す。開山は幡隨意院了碩和尚なり。其頃一派の高德にして、貴賤の信仰少からず。寶曆年中、當寺を草創す。其砌、貴賤男女を擇ばず、土砂を運ぶ輩へ、一簀毎に十念を授く。こゝにおいて、老若を厭はず日々に群集し、不日に成就せり。此地は淸淨無塵の佛界にして、六時禮讚の聲は、松風と共に寂々たり。


根津權現社
本社
拝殿


一帯辺貸食店あり



日登山妙林寺　法住寺の西、小川を隔てゝあり。日蓮宗にして、天文年中の草創なり。開山は日秀上人とぞ。正徳年中、故あつて天台宗に改められ、俊海法印を中興開山とす。

田中辨財天社　昔は田の畷道の草堂に安置ありしを、弘安六年に、内海何某始て此社を建立せしよし、縁起に詳なり。

顧地藏尊　弘法大師の作、光入法師感得の靈像なり。

靈驗不動尊　延享三年七月八日、浅草川より出現せし像なり。御長一寸七分、背の面に銘あり。

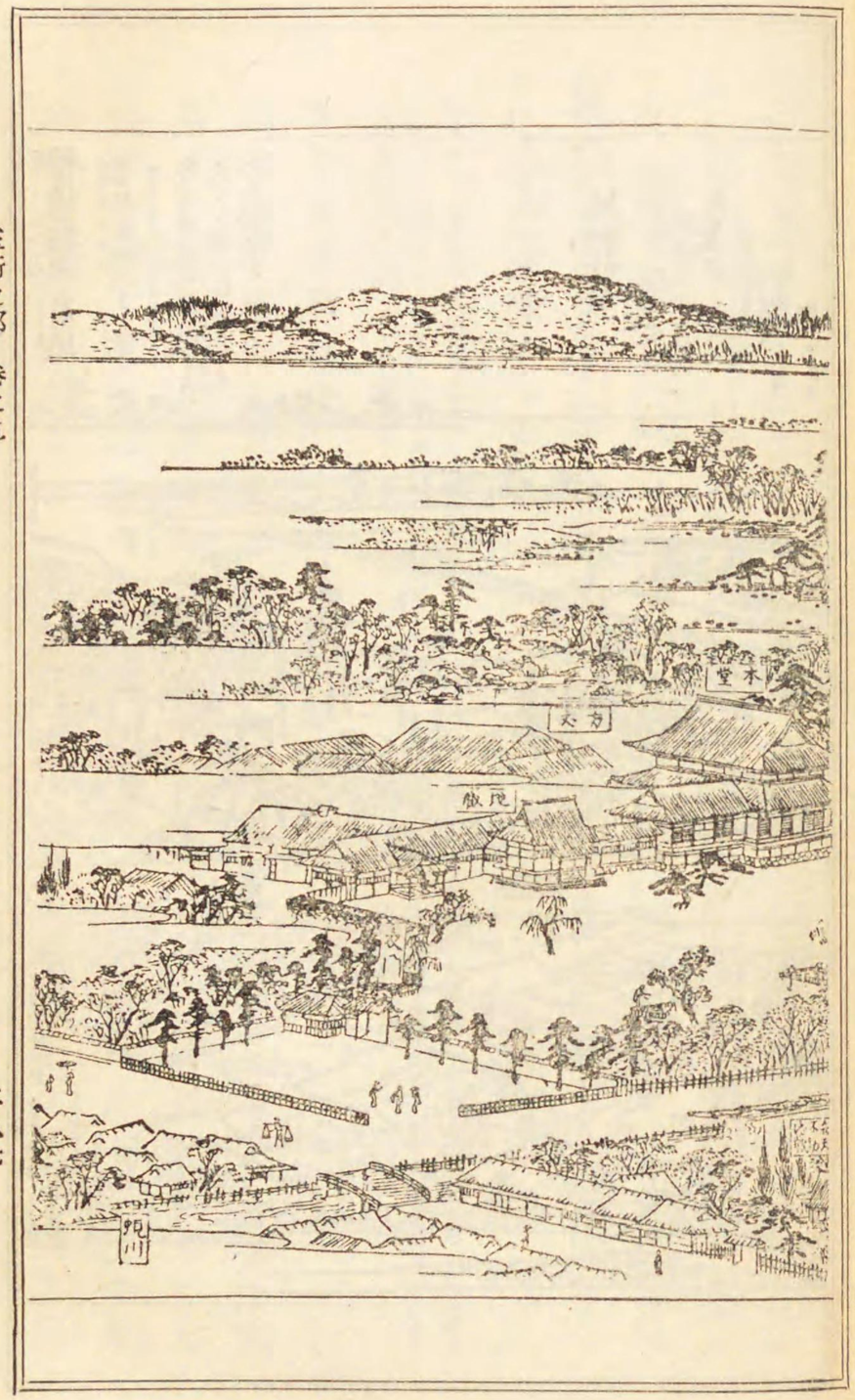
讃曰

金利石堅　神惠佛救　授福與徳　靈驗不動
大同二丁亥四月　空海

大觀音　千駄木七軒寺町光源寺といへる淨宗の寺内にあり。和州長谷寺の摸にして、十一面觀音の立像長一丈六尺なり。又同堂内に千體の觀音を安ず。貞享年中、江府の商人丸吉兵衛なるもの是を建立す。

大覺山淨心寺　丸山片町にあり。日蓮宗にして、太田資高の妻法名を淨心院日海禪尼と號せり。草創す。北條五

三瀧法住寺
俗ニ新幡隨意院ト云
妙林寺
蛍澤


本堂
方丈
殿堂
鬼子母神
目黒川

代記に、永祿七年、北條氏康と、里見義弘と、國府臺にて合戰の時、資高おのれが妻の親なりし太田下野守小田原方先手也。と渡り合ひ、終に資高里見方に一味す。棒を以て舅下野守を打殺せり。軍散じて後、妻此事を聞き大に歎き、葬祀ねんごろにいとなみ、後髻をきり、父の菩提の爲に、武州神田に淨心寺を建立すと、云々。初め建立の地は御城内平川也。當寺始めは神田にありしを、小石川にうつされ、後復今の地にうつさる。

按ずるに、寺傳に、太田資高の室は、北條氏綱の女にして、康資の母なり。依て康資母儀のため、天文十九年當寺を江戸平川に草創すといへり。鐘の銘にも天文十九年とあれば、寺說を以て是とすべき歟。追て考訂すべし。當寺の鑄鐘今はにぴたり。銘は深草元政なり草山集に出づる故に、こゝに擧ぐ。

淨心寺鐘銘竝序

古者論草創守文二者之難矣。蓋無草創莫成守文。無守文莫遂草創然者皆難矣哉。武江淨心寺。山號大覺。開基祖日日成。乃以天文十九年創之。而九世祖日日眞。方此之時江府大火。因移地於小石川。大揚再興之力。蓋淨因所感。未幾佛殿方丈。及厨庫書院煥乎新成矣。夫極

晉所照。如々法界絶封疆。絶方所。而不礙塵刹者。我覺王之土也。觀彼久遠猶如今日。亡古今亡遠近。而不分劫頃者。我覺王之時也。由此觀之。府内之舊址。城外之新基。内外雖殊。均是我土也。昔日之開基。今日之再興。今昔雖異。均是我時也。且以今日之地易昔日之處。今昔不二。内外一相。古之所云草創守文二難相竝。二師之功不亦茂乎。有斯人焉。有斯處焉。而又欲推鐘告四方以弘大法矣。鐘成乞銘於余。雖以固陋不克峻拒焉。銘曰。

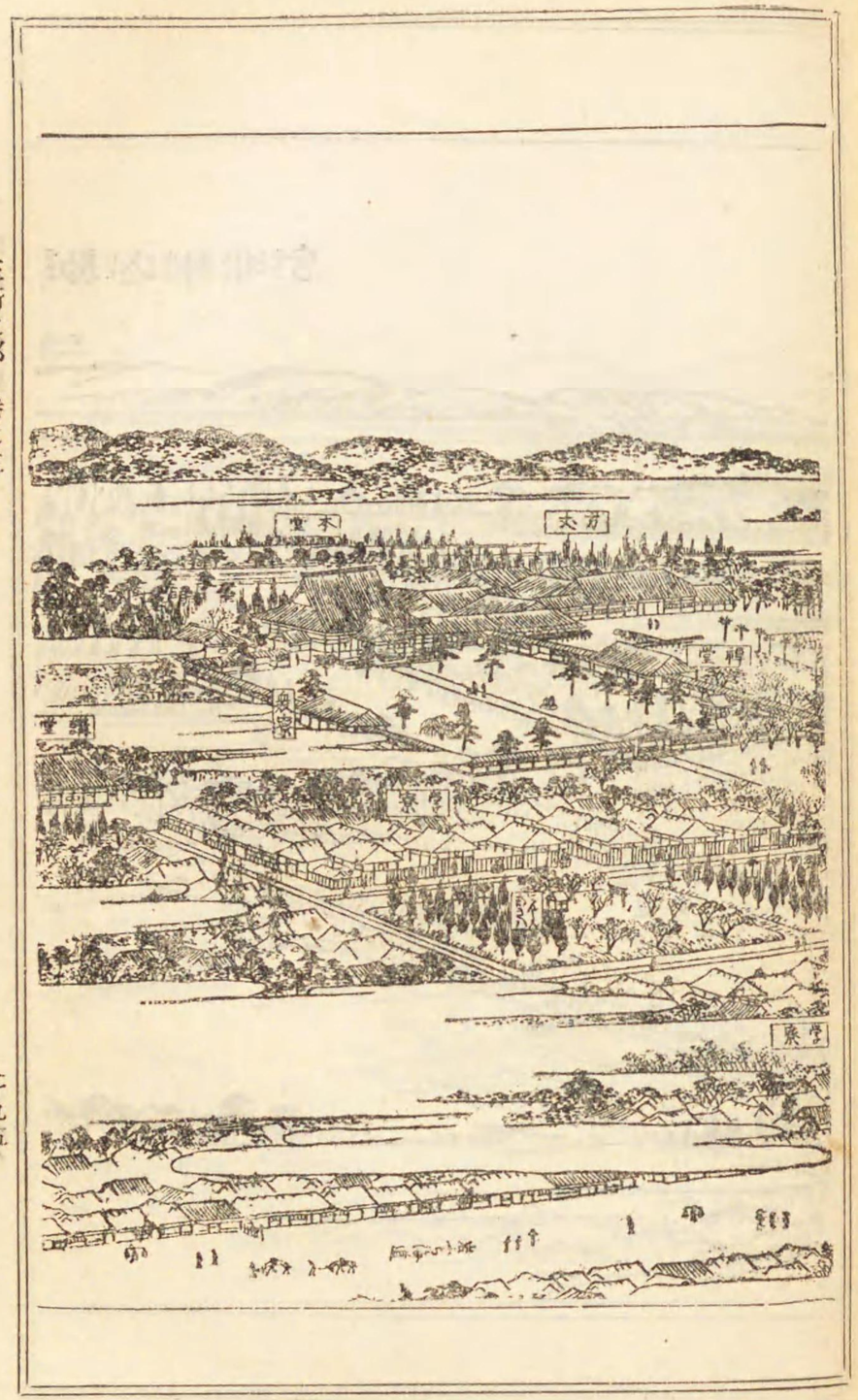
淨心爲眞因　大覺爲眞位　名是實之賓
以名山與寺　已離火宅塵　新開石川地
如々常寂光　始無東西異　莊嚴淨佛國
斯備晚成器　便擊甘露鼓　共醒無明睡
善哉東漸土　音聲作佛事

目赤不動堂　駒込淺香町にあり。伊州赤目山の住職萬行和尚回國の時供奉せし不動尊像、屢靈驗あるに仍て、其威靈を恐れ、別に今の像を彫刻して、彼像を腹籠とす。則ち赤目不動と號し、此所に一宇を建立せり。（始め千駄木に草堂をむすびて安置ありしを、寛永の頃、大樹御放鷹の砌、今の所に地を賜ふ。千駄木に動坂の号あるは、不動坂の畧語にて、草堂のありし舊地なり。）後年終に目黑、目白に對して、目赤と改むるとぞ。

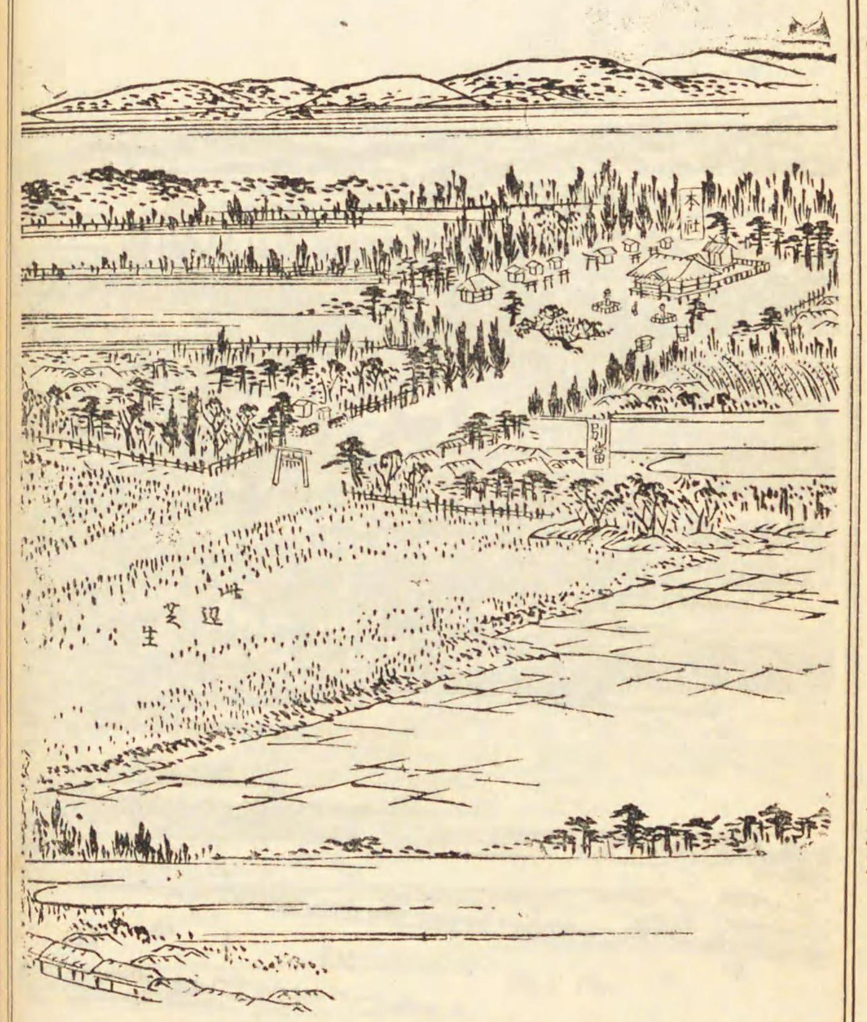
諏訪山吉祥寺　同所一丁ばかり北の方にあり。曹洞の禪宗にして、江戸檀林の一なり。因て旃檀林と號す。（諏訪明神の敷地なる故に、諏訪山と號す。今猶境内に鎮坐す。）本尊は釋迦如來、開山は青巖周陽禪師なり。當寺は長祿年中、太田持資、江戸城を營みし頃、かしこに井を掘りしに、土中より吉祥增上の文字ある銅印を得たり。依て吉瑞なりとて、一宇を建て、直に吉祥庵と號く。（今御城の中和田倉、其舊地なりとぞ。）其後北條幕下、遠山丹波守中興す。天正年中、御城御造營の時、（五代目用山和尚現住の頃なり。）神田の臺に地を賜ひ、寺領等を附せられ、遂に明暦三年、今の地にうつさる。（水道橋は、當寺神田の臺にありし頃の、表門の地なりとぞ。故に寶文年中江戸繪圖にも、水道橋を吉祥寺橋と記せり。）

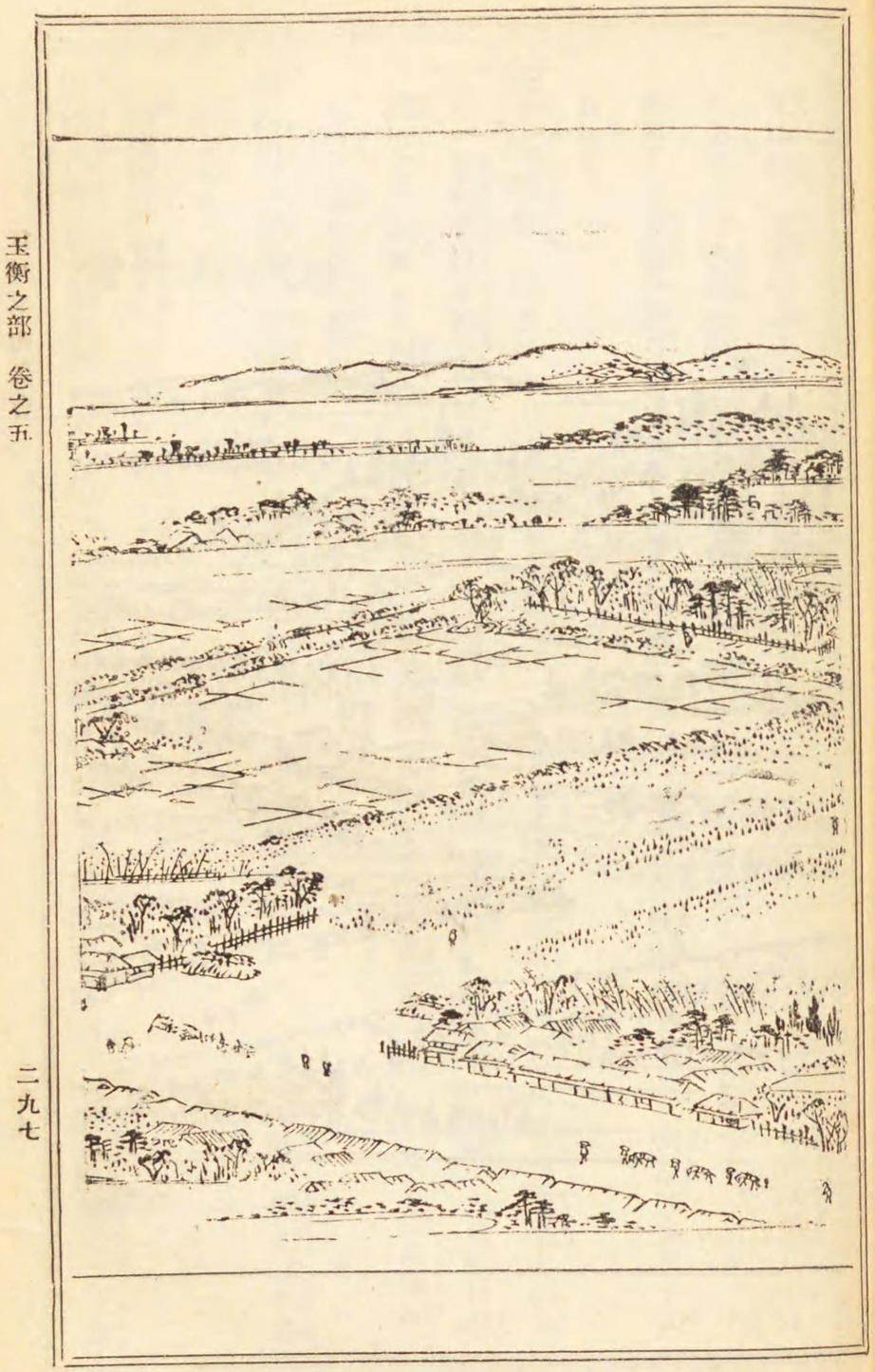
駒込神明宮　同所二丁ばかり北の方にあり。社傳に云く、文治五年、右大將頼朝公、奥州征

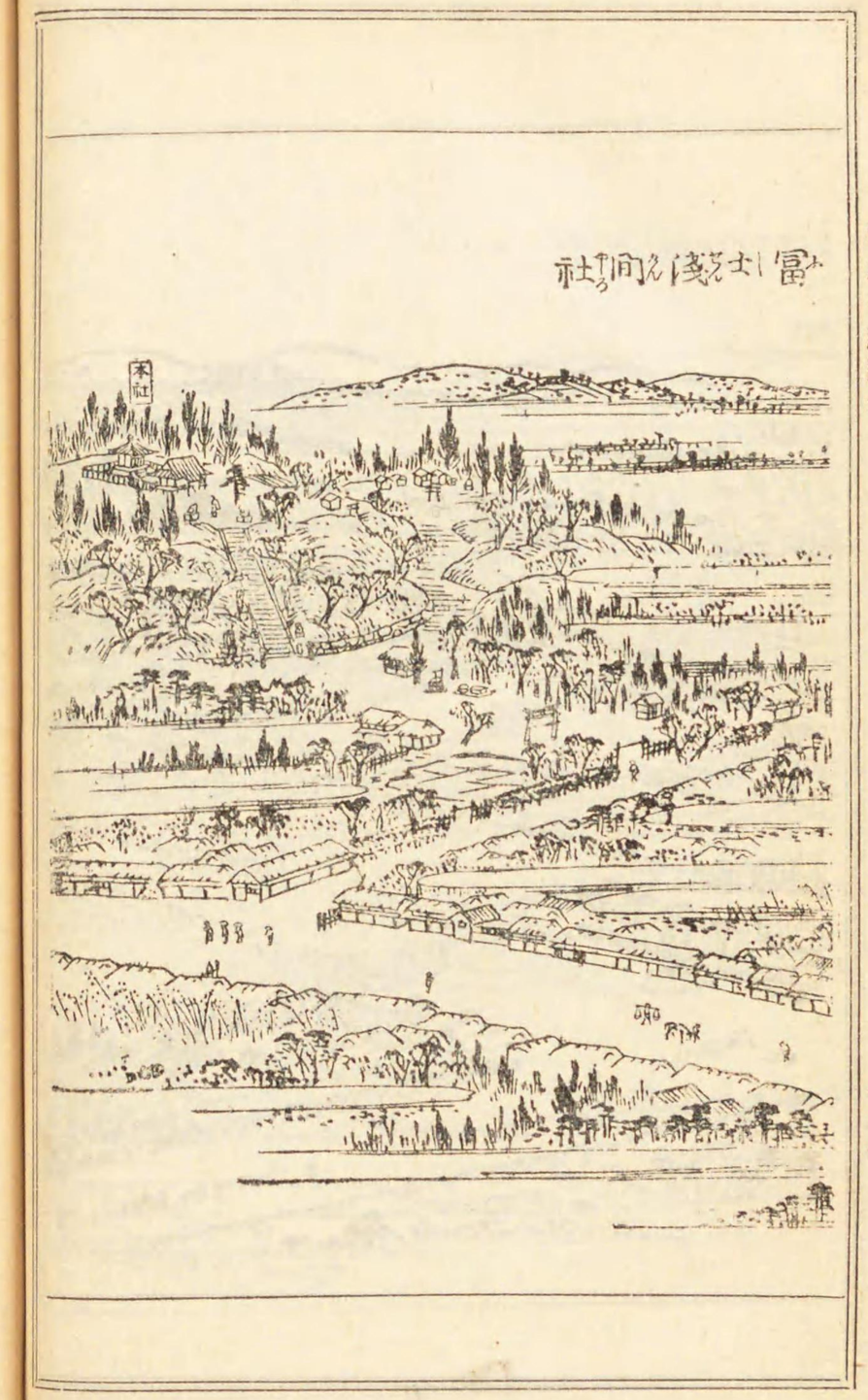
吉祥寺
表門の内左右
並木の桜い
其昔
ゑいより極させられ
とも
時


木堂
方丈
學寮
學寮

駒込神明宮







伐の時、靈夢の事ありける。其朝此あたりに社地を求め索りしに、一松株の枝に大麻のかゝれるあり。公是を拜し給ひ。是靈夢の應なりとて、直に其地に神明宮を勸請すと、云々。其後多くの星霜を經て破壞におよびしを、慶安の頃、堀丹波守利直再興あり。例祭は九月十六日なり。

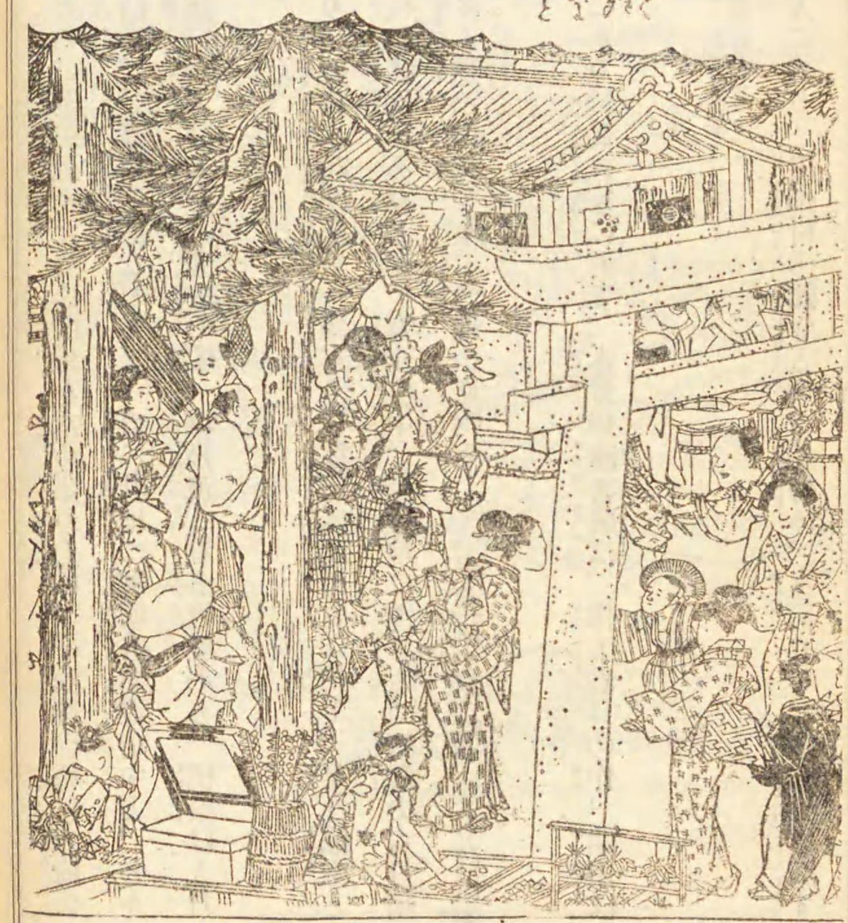
富士淺間社　同所にあり。祭神木花開耶媛一座なり。往古靈瑞あるに仍て、是を鎭坐といへり。當社昔は本鄕加州侯の後園にありしが、寛永年中、今の地に遷さる。毎歲の六月朔日祭禮にて、前夜より詣人多く道路に充てり。此地の產物として、麥藁細工の蛇、ならびに團扇、五色の網などを鬻ぐ。

寶珠山與樂寺　田畑村にあり。眞言宗にして、本尊地藏菩薩は、佛工春日の作、開山は行基大士なり。

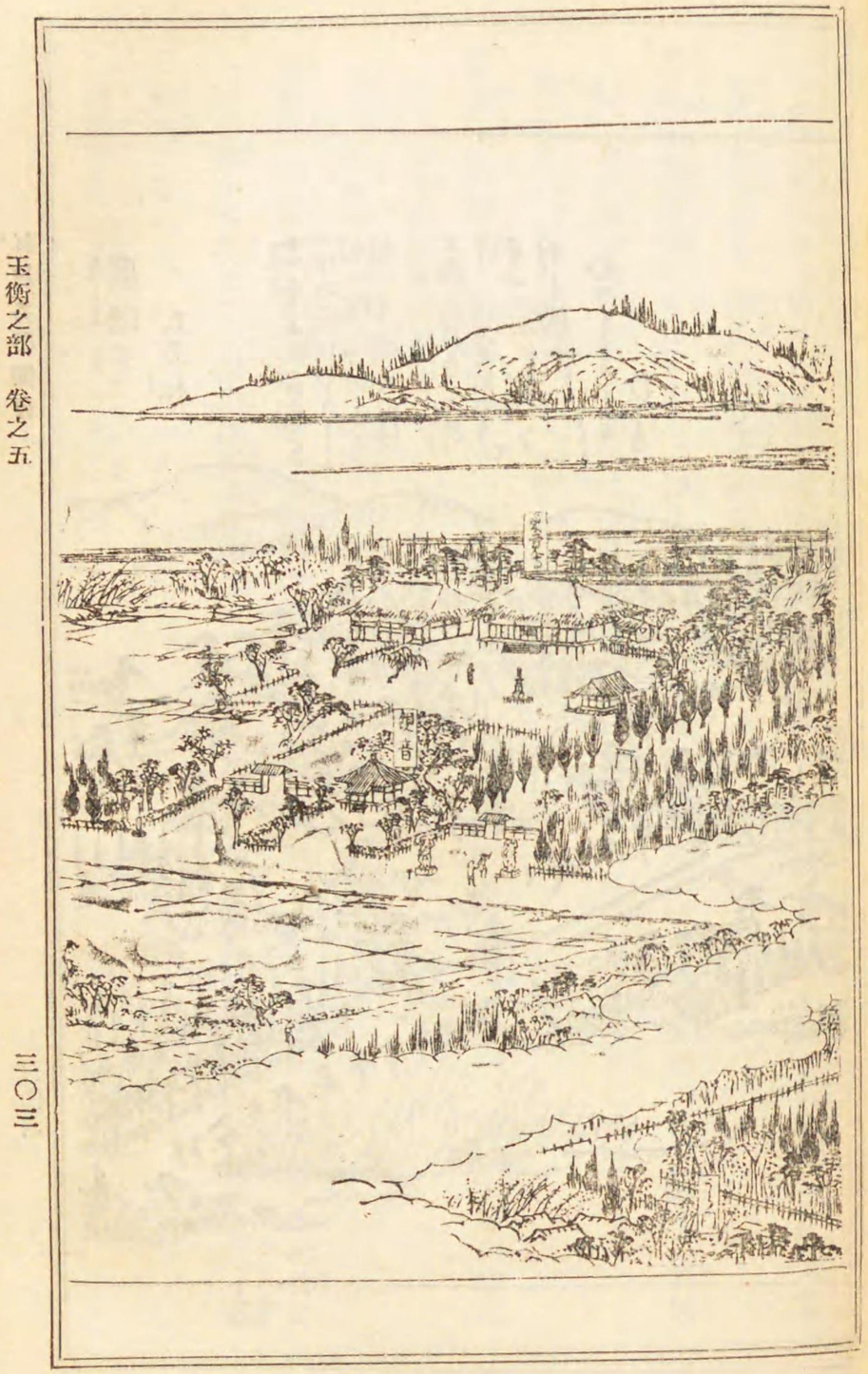
阿彌陀堂　本堂の左の方にあり。本尊は行基菩薩の作、六阿彌陀第四番目なり。

田畑八幡宮　同所西の方にあり。田畑村の鎭守とす。相傳ふ、文治五年、賴朝公勸請す。卽

六月朔日
富士詣



八幡宮
興樂寺
六阿彌陀
四番目



ち駒込神明宮と同時の鎭座なりと云ふ。別當は眞言宗東覺寺と號して、弘法大師の作の不動尊を本尊とす。開山は行基菩薩なり。

光明山圓勝寺　中里にあり。淨土宗にして、本尊阿彌陀如來は、慈覺大師の作、脇士二菩薩は、惠心僧都の作なり。開山は深蓮社聖法上人。當寺始めは御城内龍の口にありしとぞ。

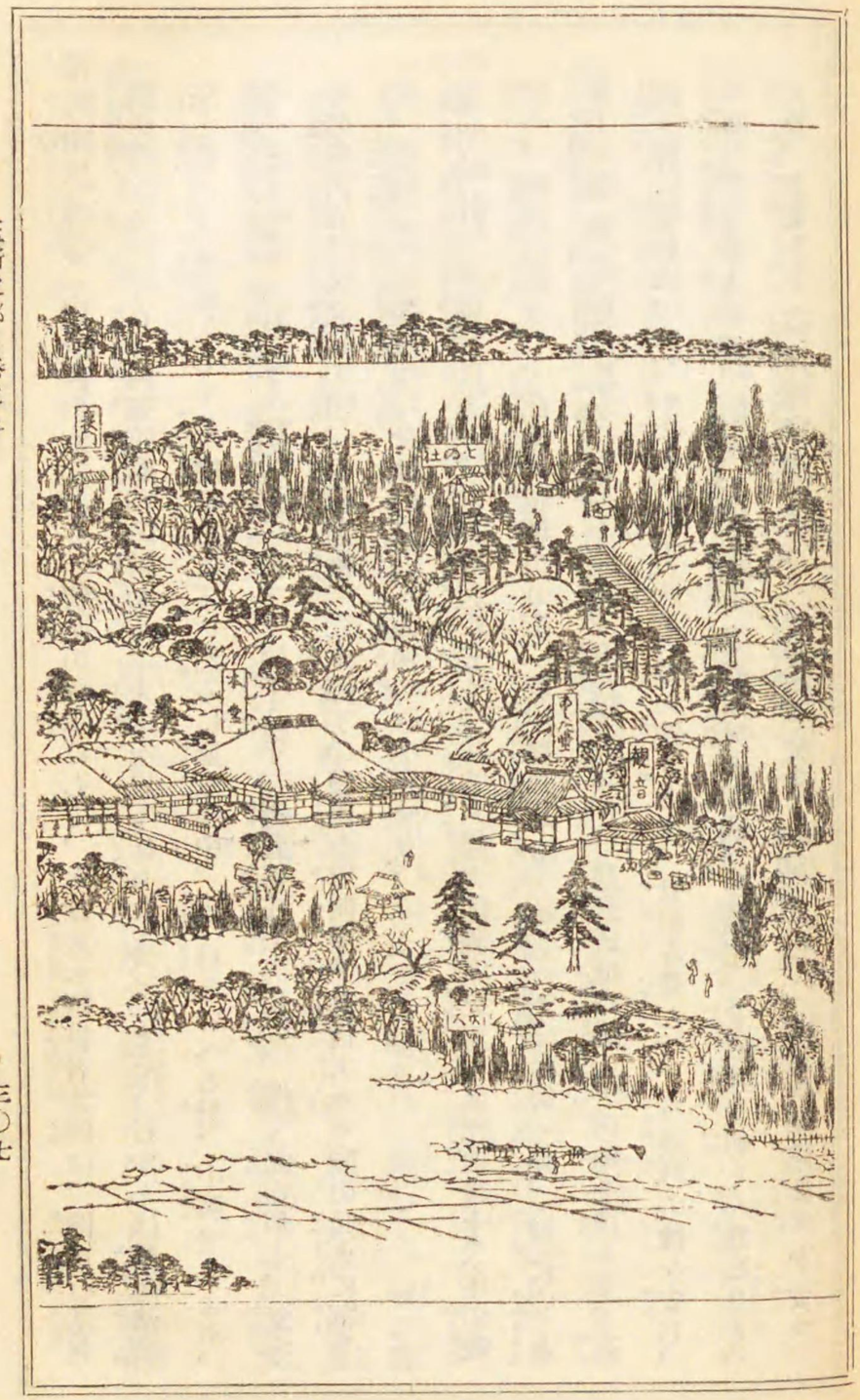
藤林山西福寺　染井村にあり。眞言宗にして、本尊には阿彌陀如來を安ず。德一大師の作なり。當寺は狹少の地なりといへども、尤も殊勝の梵刹なり。

染井稲荷社　本堂の左にあり。往古よりの鎭座にして、染井一村の鎭守也。昔此所に染井となづくる泉ありしが今は水涸れて、其跡を矢ふ、村を染井と云ふも、この泉によるとぞ。

佛寶山無量寺　西光院と號す。同所北の方、西ヶ原にあり。眞言宗にして、弘法大師の作の不動尊を本尊とす。開山は行基菩薩なり。本堂にかくる南無阿彌陀佛の額は、幡隨意院了碩和尚の筆なり。

阿彌陀堂　本堂の右にあり。本尊は行基菩薩の作、六阿彌陀第三番目なり。

無量寺
天門法院
三番目
七社


七の社
本堂
梶の木

補陀山昌林寺　同所西の方にあり。曹洞の禪宗にして、本尊末木觀世音菩薩は、開山行基菩薩の作なり。往古六阿彌陀彫刻の折から、末木を以て作りたまひしとぞ。むかしは補陀洛壽院と號く。其後久しく荒廢におよぶ。然るに應永年中、祥林といへる僧、中興せしより、後又宗最和尚こゝに來り、當寺を再興す。昌林寺と祥を改めて昌に作る。號す。同十八年、鎌倉持氏公の母堂、深く是を信じ、堂宇を修營あり。又文明の頃、太田道灌、二十餘丁の齋田を寄附す。其後大永年間の兵火に罹りて、堂塔悉く炎燒す。今はいにしへの俤のみを存せり。

平塚明神社　平塚村にあり。當社緣起に云く、往古八幡太郎義家兄弟、奥州前後十二年の戰終り、凱陣のみぎり、此地に逗留ありて、城主豐島氏某、或豐嶋太郎義近とも云へり。に鎧一領、竝に守本尊十一面觀音長七寸、行基菩薩の作也。今城官寺に安置す。を賜ふ。其後元永年中、豐島氏城内淸淨の地を擇んで、彼鎧を塚に築收め、塚の形高かざるを以て平塚と號す。地名も亦これに因て稱す。城の鎭守とす。且社を營んで、三連枝の像を安じ、平塚三所明神と號す。八幡太郎義家、加茂次郎義綱、新羅三郎義光。是義家兄弟の武功を欽崇、且武運を祈らん爲なりと、云々。別當を平塚山城官寺といひ、安樂院と號す。城官寺の來由は姑くこゝに略す。本地阿彌陀如來を安ず。

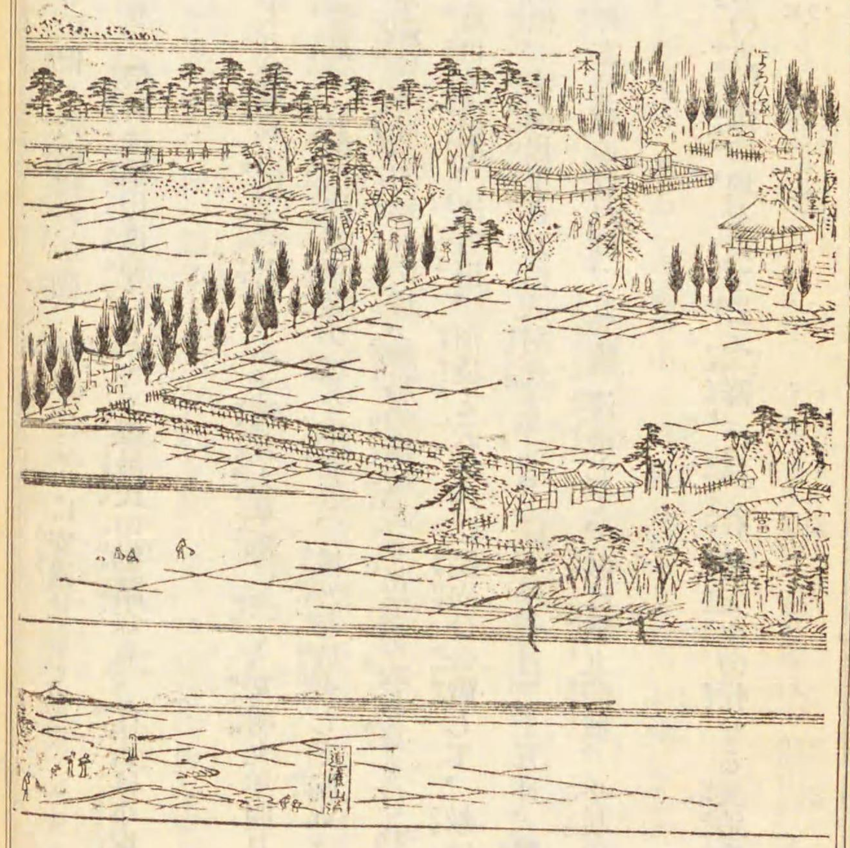
赤檀佛、毘首羯摩天の作、瑞瑙の玉座なり。昔筑紫安樂寺の僧、回國修行の砌、此像をこゝに安置せしとぞ。

白髭明神社　同所畑の中にあり。祭神は猿田彦命にして、豐島氏の勸請なり。往古は平塚の城中にありしとぞ。

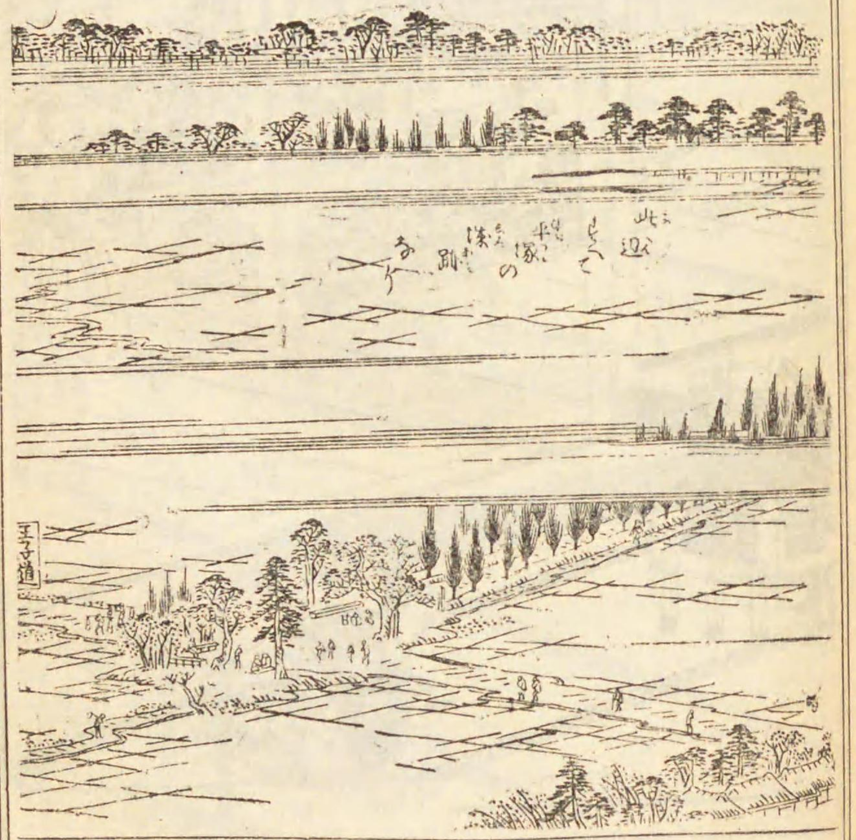
平塚城跡　平塚明神のあたりより、飛鳥山の邊迄をいふ。鎌倉大草紙に云く、文明九年四月十三日、道灌江戸より打て出で豐島平右衛門尉が平塚の城を取卷き、城外を放火して歸りける處に、豐島兄の勘解由左衛門を賴ける間、石神井の城、練馬の兩城より出でて攻め來りければ、太田道灌、上杉刑部少輔、千葉自胤以下、江古田、沼袋と云ふ所に馳向ひ合戰して、敵は豐島平右衛門尉を始として、板橋、赤塚以下百五拾人討死す。中略　同十年正月二十五日、豐島勘解由左衛門が平塚の要害へ押寄せ攻めければ、其曉沒落して、敵は猶九間城、小机の城に籠ると、云々。

犬追物上覽地　同所道より右の方、畑の地を指て云ふ、詳に林春齋先生の作せる犬追物記に出でたり。江戸名所圖會拾遺に詳に記す。因てこゝに略せり。

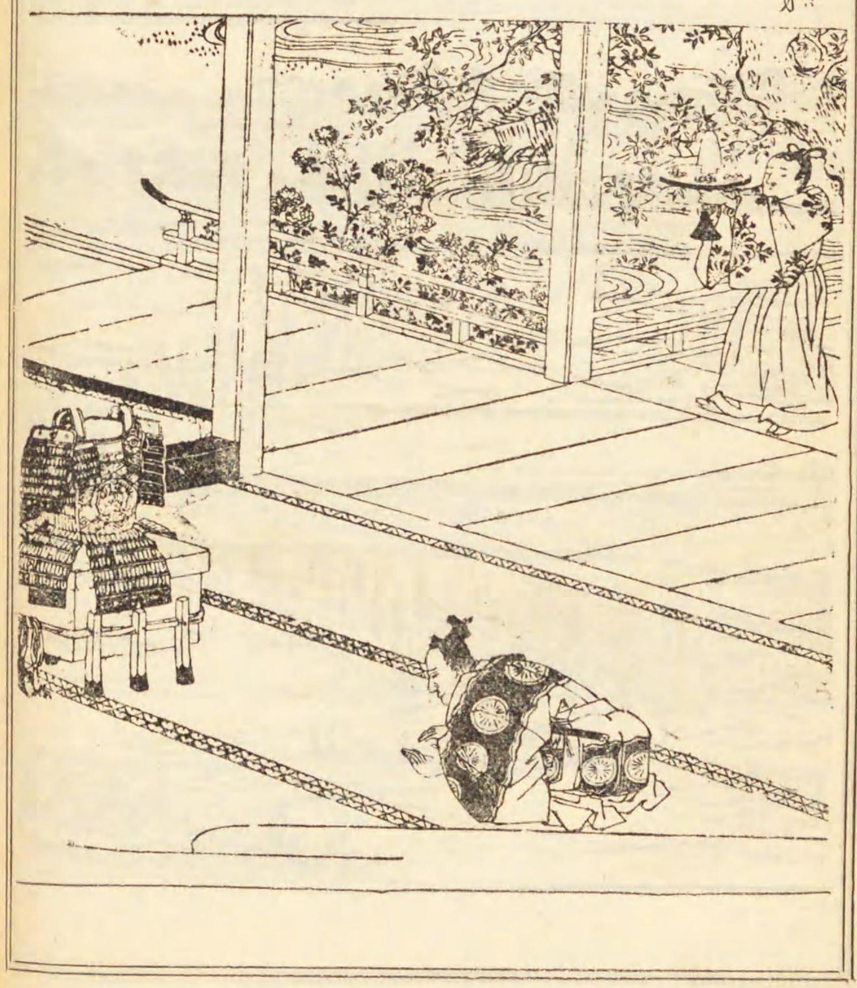
平塚明神社
鎧塚
別當妙宮寺

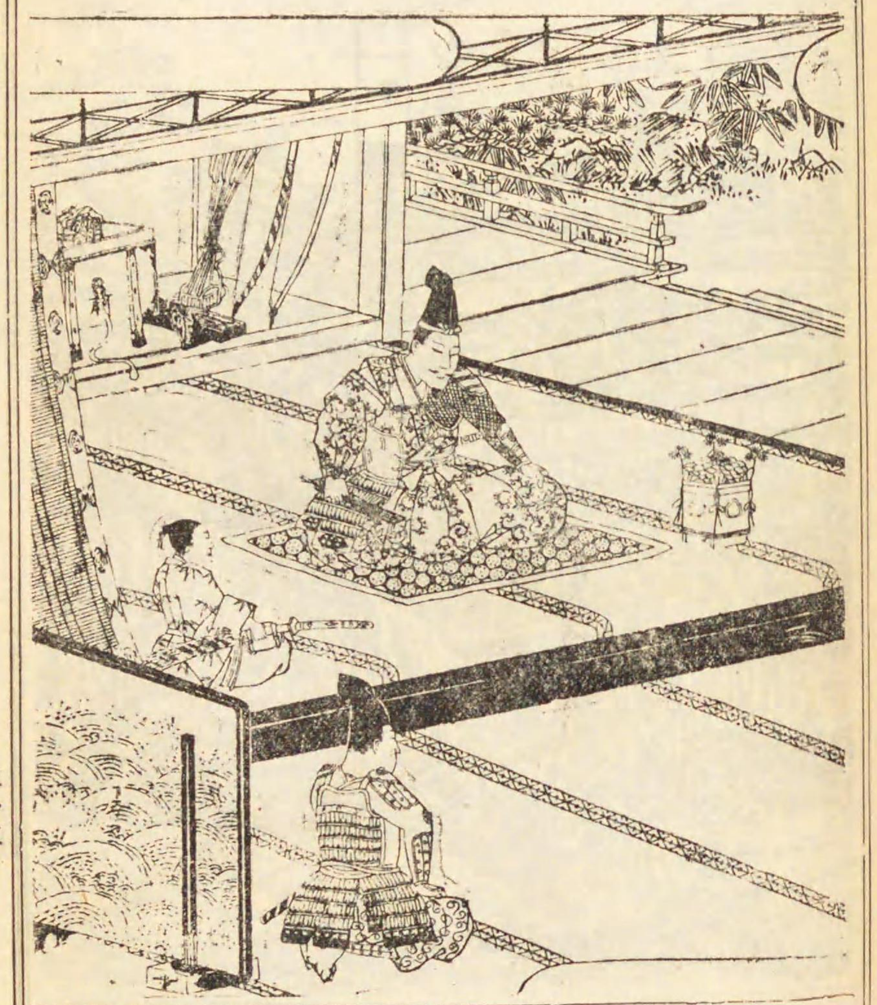


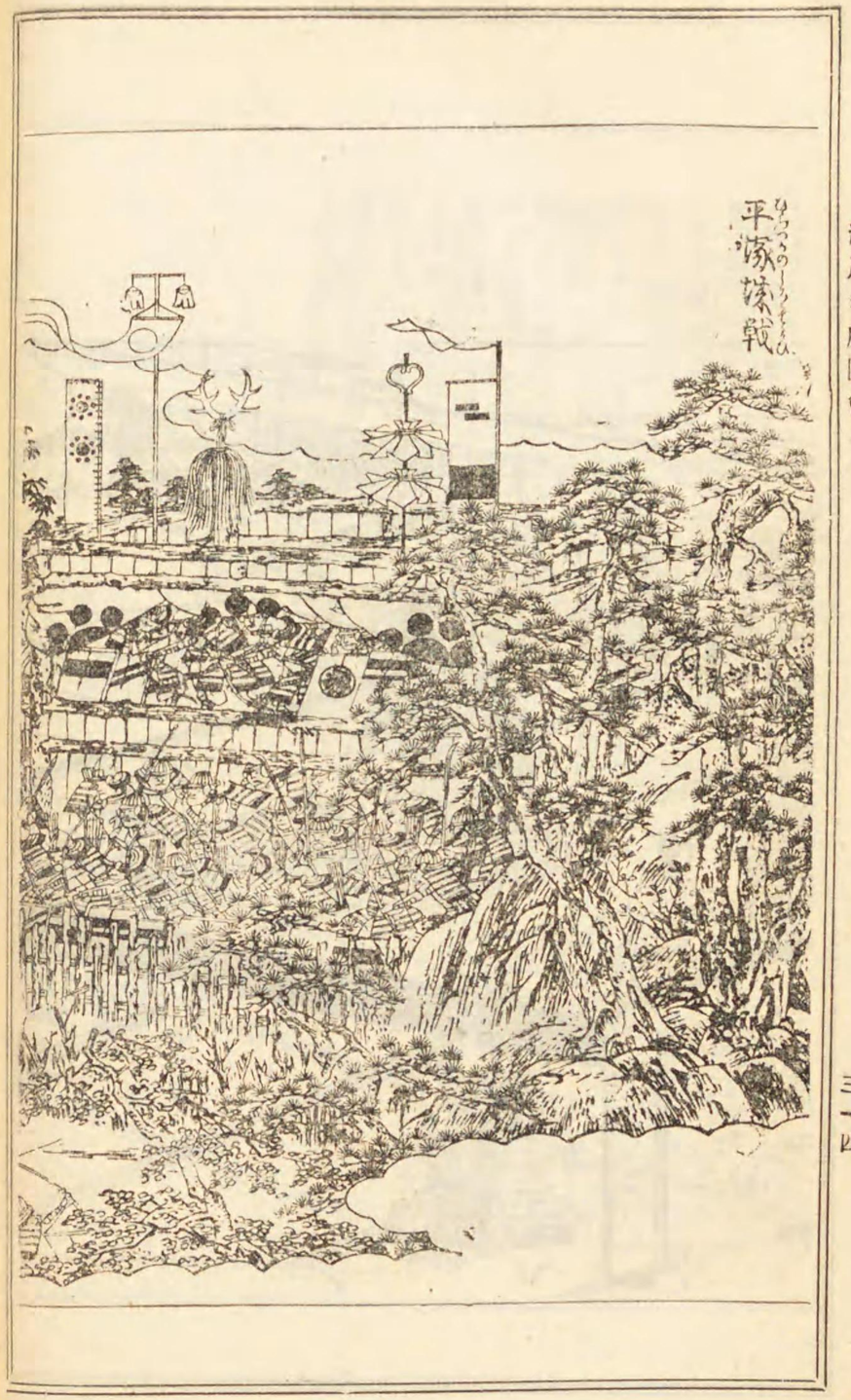
此辺よりて平塚の陳跡あり



八幡太郎義家兄弟奥州加征伐凱陣のころ武藏國より入たまふ豊島某の住し平塚の城より逗留あつてあるゝゆ償一領と賜へり けゝと後塚より祭祀めし城の守とし平塚二社明神と いつきまつりしも實へよ武功の考へしむる故なるへし






平家落戦

鎌倉大草紙に文明十年正月廿五日道灌豊島勘解由左衛門尉が平塚の要害へ押寄せ責めくれハ其夜元景落て敵ハ移り九間塚小机の城に籠るとあるハ此平塚の事なり

飛鳥山　數萬歩に越えたる芝生の丘山にして、春花秋草夏涼冬雪眺あるの勝地なり。始め元亨年中、豐島左衛門飛鳥祠を移す。（祭神事代主命なり。）因て飛鳥山の號あり。寛永年中、王子權現御造營の時、此山上にある飛鳥祠を遷して、權現の社頭に鎭座なしけり。其後元文の頃、台命によつて櫻樹數千株を植させらる。内には遊觀の便とし、外には芻蕘の爲にす。年を越えて花木林となる。爾しより騷人墨客は、句を摘み章を尋ぬ、牧童樵夫は、秣を刈り、薪をとる。殊にきさらぎ、やよひの頃は、櫻花爛漫として尋常の觀にあらず。熊野の古式に、春は花を以て祀るといへるに相合するもの歟。

元文四年の春、冷泉前大納言爲久卿、關東下向の折から、鳴島信遍に命じて、此山のさくらを爲久卿へ送られけるに、

飛鳥山といふ所の花とて、人の見せける、若木の枝の殊に
うるはしき色香も世に似ずぞおぼえし。江戸よりはかげふ
むばかりの近さなれど、行きて見ぬ思ひを霞の關にとゞむ
るばかりになむ。

折る枝の色香をみずば飛鳥山花の所の春もしられじ　爲久

明る年再び御下向の時、御田立に、今年は飛鳥山の花も御見せなき上しにて、

咲きぬともつけぬ飛鳥の山櫻こゝの言葉の色やわすれし　同

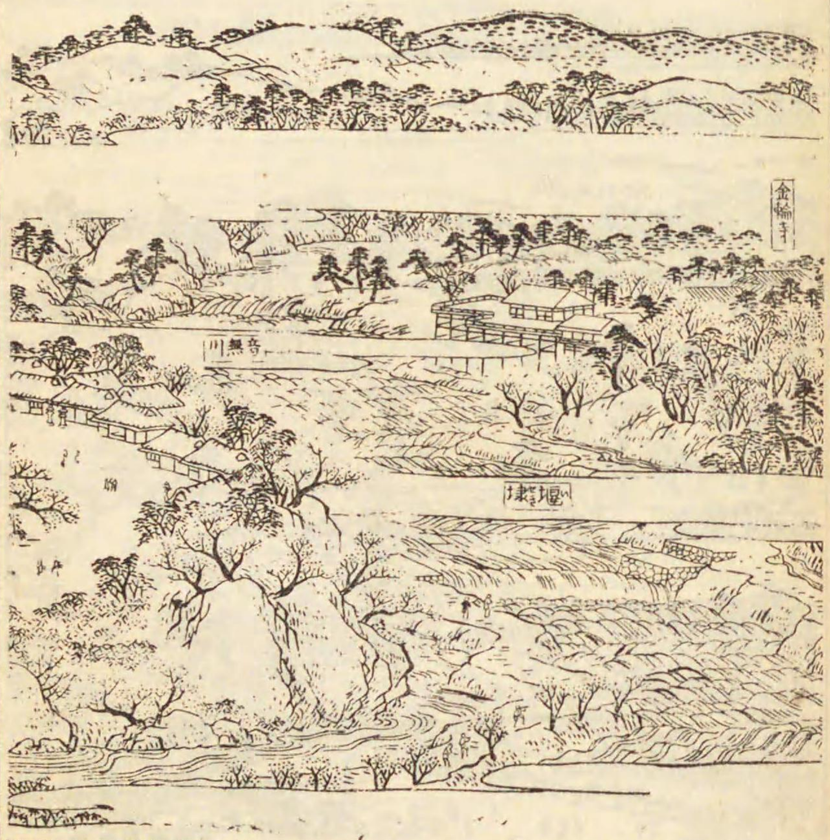
とありしかば、いそぎ金輪寺へ仰ありて、一枝の花を手折らせ、これをもたせて、品川の宿にて御覽にいれける。

飛鳥山碑銘竝序

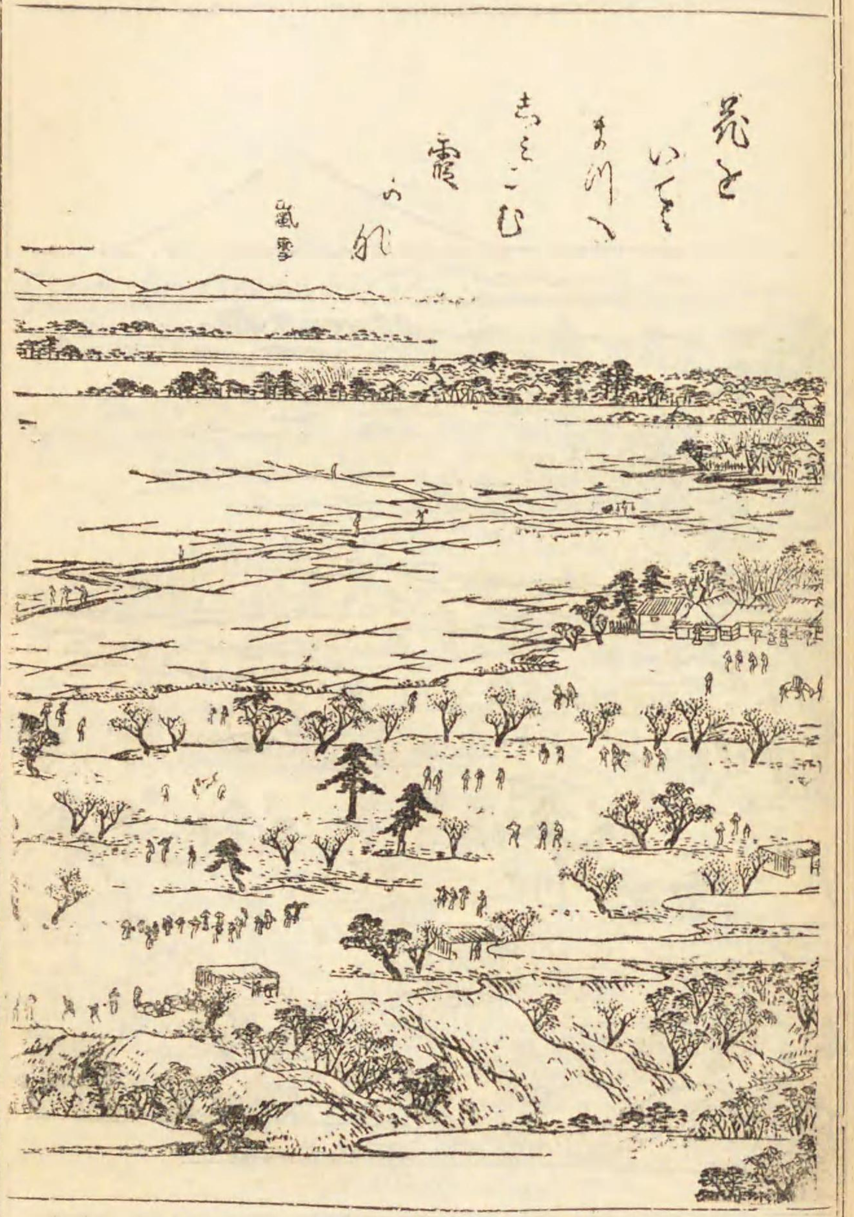
惟峯國之鎭曰熊埜之山。有神曰熊埜之神。實伊弉冊尊也。配祀伊弉諾尊事解王子。或稱之三神。事解別爲飛鳥之祠。三狐神副焉。語在神史中。別錄藏焉。誌曰。在昔元亨中。武之豐島郡豐島氏。拂兆豐島郡爲熊埜神坐。地之曰王子。山之曰飛鳥。蓋自此始也。熊埜之川曰音無。川流象焉。爾來四百有祀。土人以岩祀之如一日矣。祀典曰。熊埜之神春以花祀。鼓之吹之旗之歌之舞之。今之王子祀日。鼓吹旗歌舞者。其來也尚矣。而世之邈。祠宇荒壞。風日不蔽越。暨寛永中。有司奉命祇飾祠

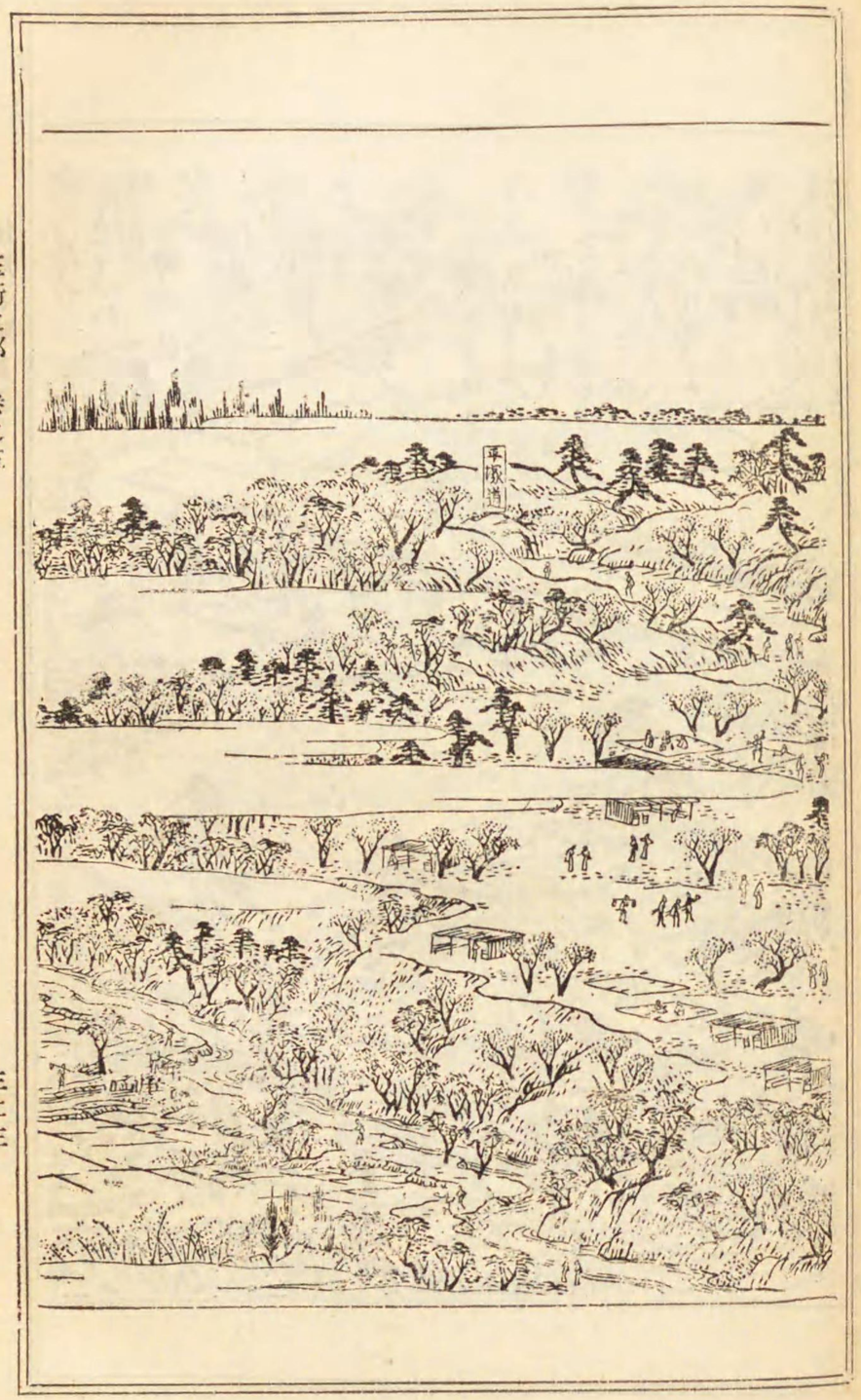
音無川

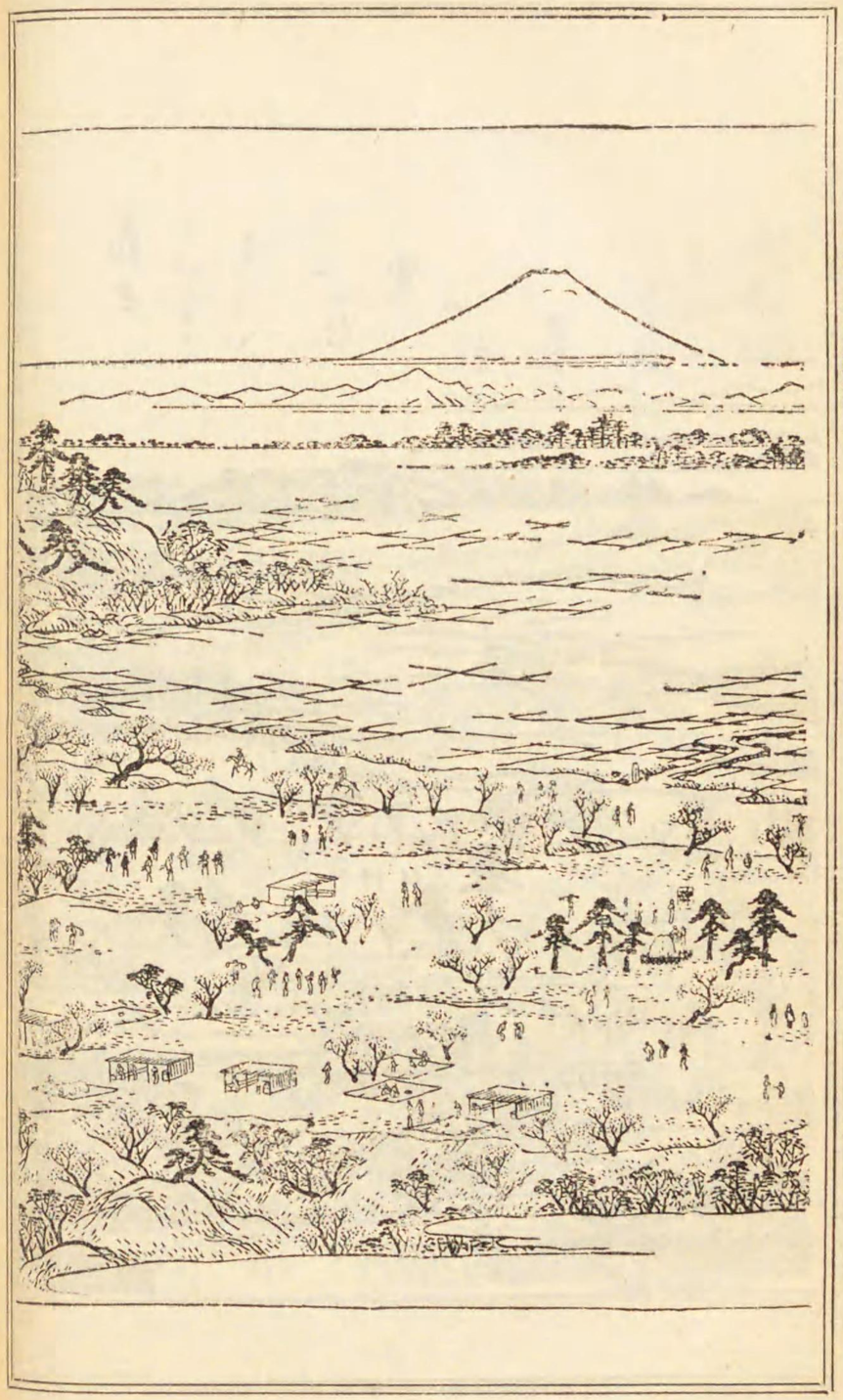
蘭亭高惟馨
飛鳥山前張碧溪
春來芳徑自成蹊
年年載酒看花處
不似飛原使客迷



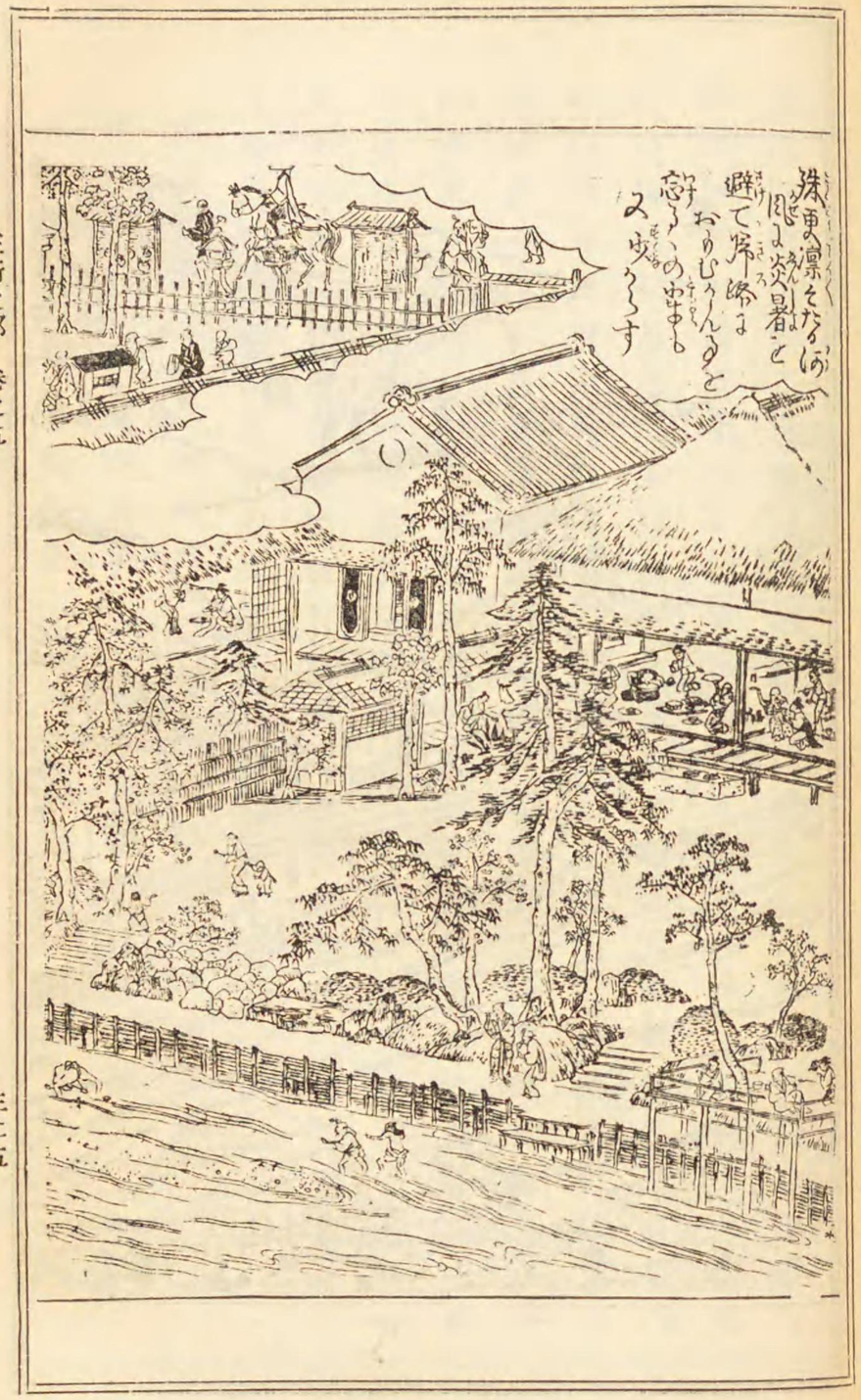
飛鳥山全圖

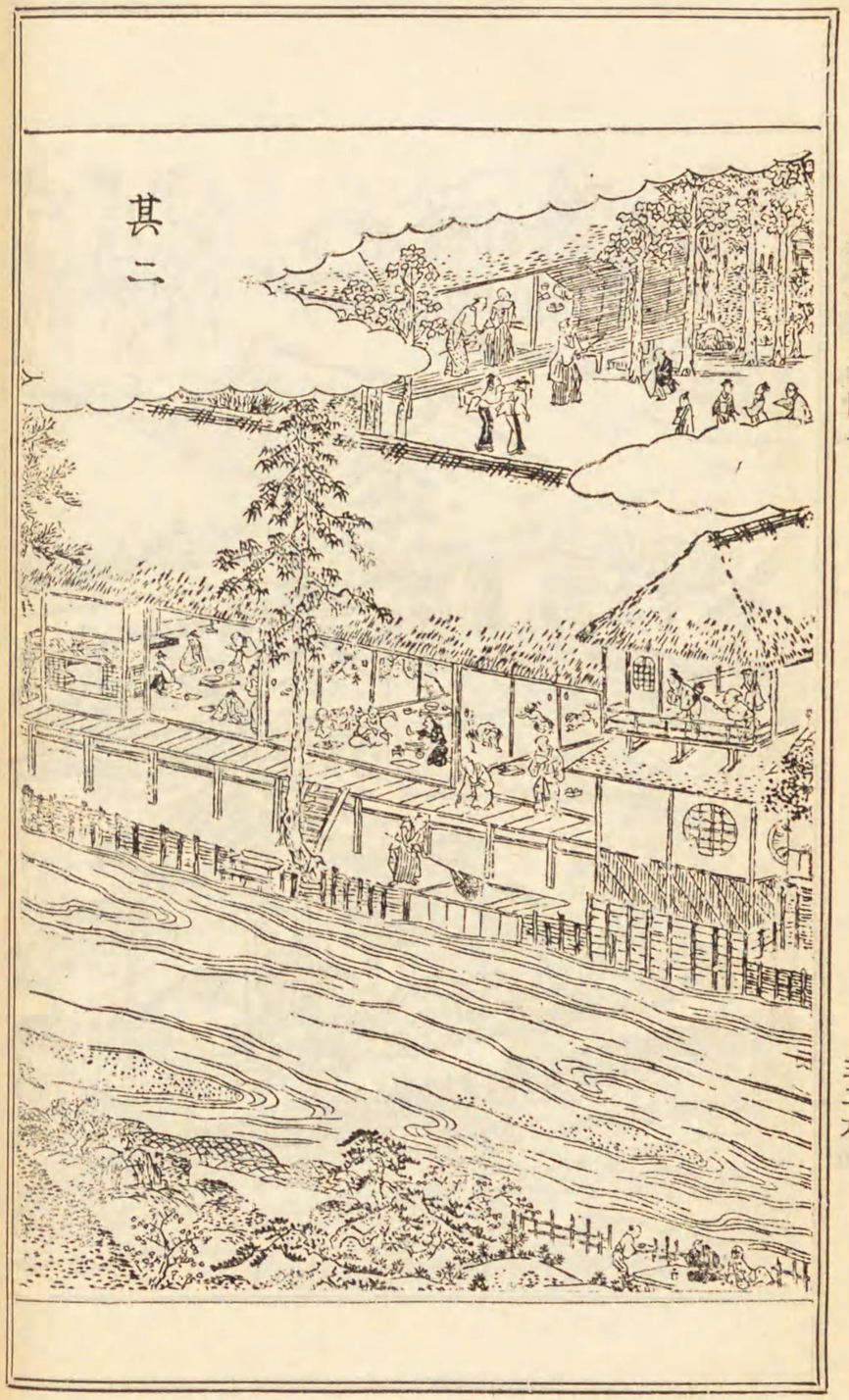



平塚道



花鳥橋の
貨食の
鋪の
亭造
後亭の
音羽川の
下流をうけて
生洲をかまへ
都下を離れて
常に王孫の
遊び
臨むに宴を
催し沈醉
する也


涼風
炎暑を
避て
おりむらんを
忘るゝの
也



事。乃因故兆新之。遂遷飛鳥祠於本祠。飛鳥之山有名無祠者由焉三狐祠僻在北叢云。今玆丁巳春三月己亥。我后省畊之次。規土封飛鳥之山。獨給祠無所與。永屬奉祠者。衛等恭奉祠。乃蹈舞捧手稽首敬八之日。於穆我后。事神以誠。治人以明。措則正。施則行。以諟樂郊爲神之鄉。神其不歆。明惠惟馨。初飛鳥之山。蓬顆蔬壤雉兎徑焉。車駕之肇從紀蕃來也。有司行邑吏。蓉谿谷道。泉瀑礬碧硞磐确洄而旋。乃植花木數千株。內成游觀。外便芻蕘。雇役數千人。二紀之久猥大爲美土。花木亦爲林。每春昔爛漫焉。豈惟種善種乎。祀典所謂春以花祀者。冥契會之奇非邪。抑亦國家之符也。遂鐫于石。以爲表經。銘曰

緜邈洪荒　有神開國　垂跡峯紀　東土是祀
明明我后　來封其域　神之眷祐　豐穰薦至
本支繁衍　其麗豈億　八埏懷仁　神祇饗惠

千載懿範　之石是勒

元文丁巳之秋

碑陰　飛鳥山四至牓示　自艮至坤七十三歩　自巽至乾二百二歩

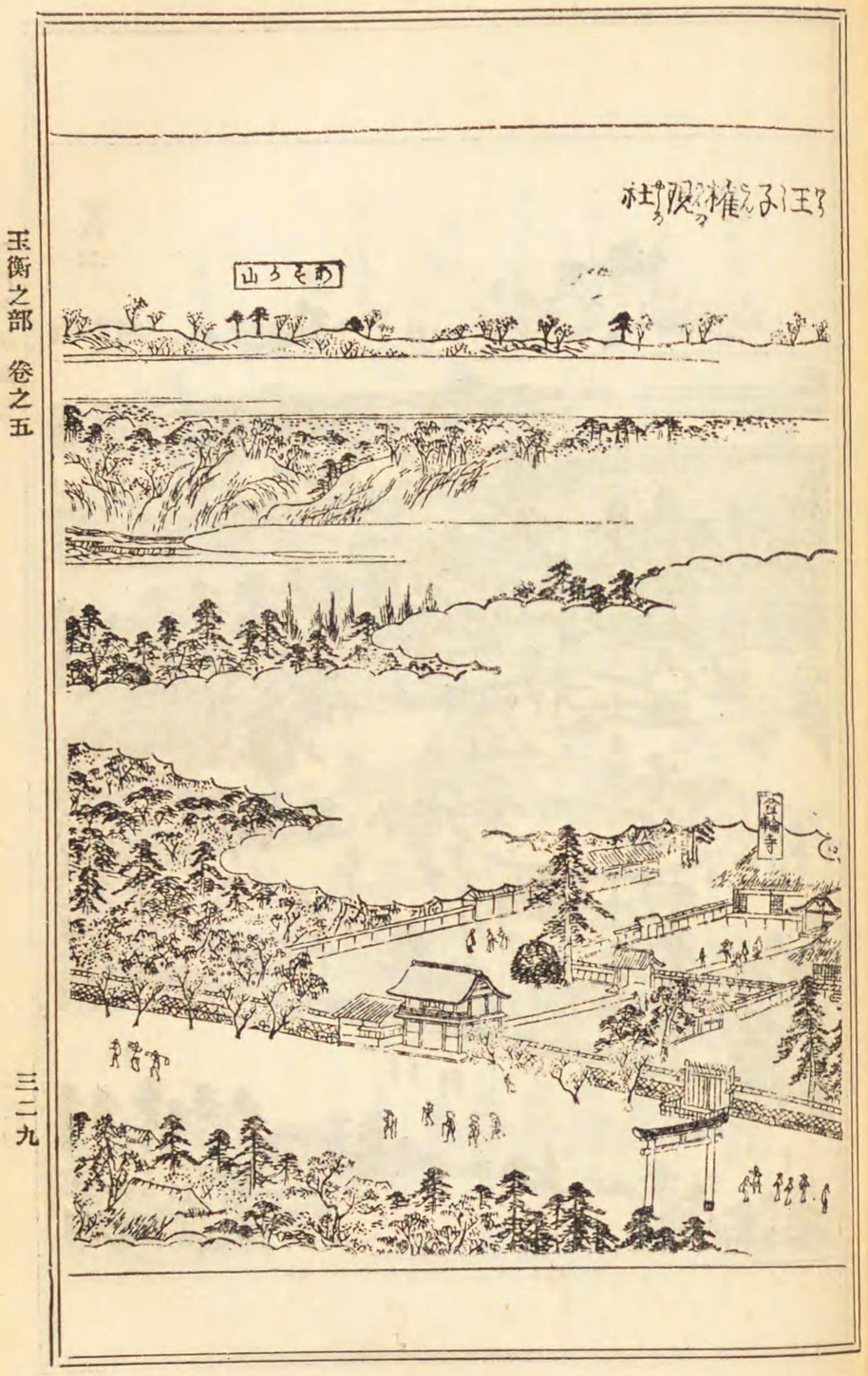
奉祠金輪寺住持權大僧都宥衛立
東都圖書府主事鳴鳳郷代撰拜書
加藤忠郁刻

短冊翁舊跡　今より六十年あまりのむかし、此山の麓に住める翁あり、名を勝行といふ。いづれの所の産なる事をしらず。短冊を賣るを以て世の業とす。因て人是を呼んで短冊の翁と云ふ。毎春の花の盛にはかならずこゝに於て短冊を賣る。又人人の詠歌の短冊を乞ひ是を集むるを己が榮とす。元文の頃、大樹御放鷹のみぎり、此翁の事を聞こしめされ、くだんの短冊を見そなはし、白銀等を下し賜ひぬとぞ。翁常に集る所の人々の詠歌をうち誦して志を養ふ。されど後其跡をかくして、終る所をしらず。

王子權現社　飛鳥山の北の方、音無河を隔ててあり。

本殿　祭神　伊弉冊尊　左　速玉男命　右　事解男命　三神鎭座

社記に曰く、若一王子の社は、紀伊國熊野權現を勸請す。後醍醐天皇の御宇、元亨年中、豐島何がしの主とかや、新に祠宇を建てて崇めけるが、風霜ふり、歳月深うして、朝の霧は香を焚くかとあやしみ、夜の月は燈を挑るに似たり。靈神は人の敬ふによりて其威をまし、境致は靈神の德によりて其名を顯す。つらく此神の本を尋ぬれば、伊弉諾、伊弉冊の尊と申す二柱のみこと、國土をうみ、萬の物をうめり。其廣大の功德既に成りて後、伊弉冊尊神退ま



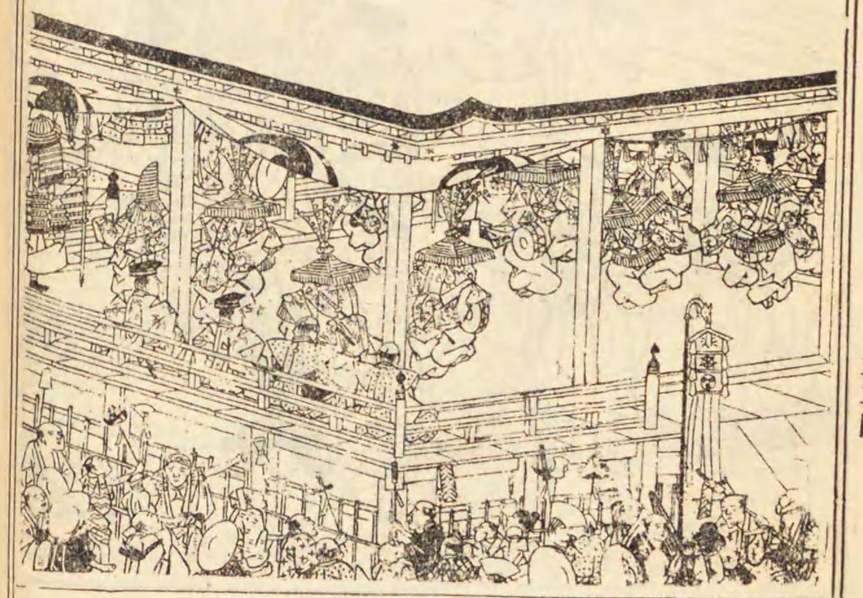
其二

花漬の
祭祀い
今
始り
燈るさを
存せんう
さめ
古墨を
摸寫て
こてふ
加ふ

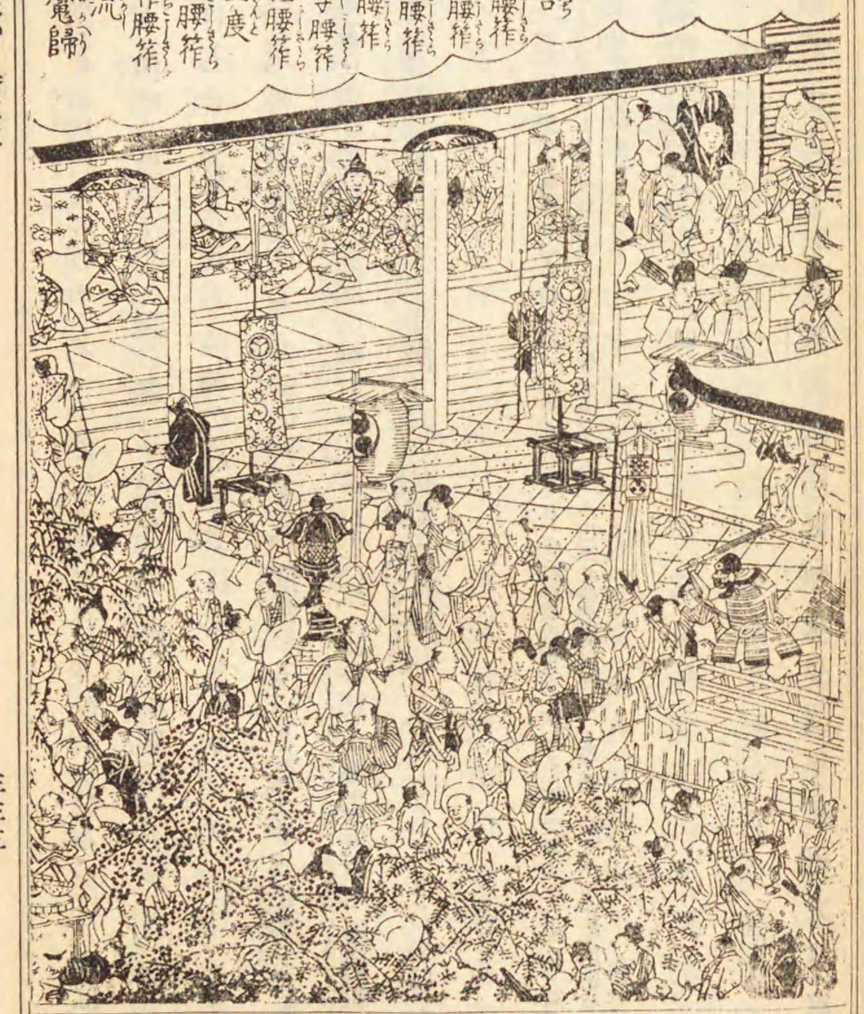
祭禮

毎歳七月十三日神前の幕営まとひて十二番の相撲あり此日同一番蓋（赤得水の）みくる番付と掲る

たのめり



第一番　中門口
第二番　道行腰作
第三番　行違腰作
第四番　脊摺腰作
第五番　中居腰作
第六番　三指子腰作
第七番　點禮腰作
第八番　捻三度
第九番　中立腰作
第十番　搗作腰作
第十一番　作流
第十二番　子魔歸



しければ、紀州熊野の有馬村にをさめまつる。熊野大神是なり。此神を祭るには、春は花をもて祭り、鼓うち、笛吹き旗立てて、諷ひ舞うて祭る。白河院の御製に、

咲匂ふ花のけしきを見るからに神の心ぞ空にしらるる

とよみ給へるは花しづめの事なるべし。此神の御子を、熊野早玉男とまうす。其第一を泉津事解男と申す。延喜の帝の御時、諸國の神社を記されしに、紀伊國牟婁郡熊野早玉神社とあるは是なり。此故に伊弉冊尊、早玉男事解男是を熊野三所權現といひならはせる事になりぬ、云々。

按ずるに、當社縁起に、元亨年中豐島氏新に祠宇を建て崇めけるよし記せり。當社別當金輪寺に收むる所の大般若經の奥に、文保二年とあれば、勸請は文保より以前にして、元亨に初めて社を營みしならん。小田原北條家分限帳に、王子領江戸上平川下平川牛込の内にて、以上廿八貫八百六十文の地を附すとあり。

當社縁起三卷　文章は民部卿法印道春、畫は狩野尚信、筆者は鈴木氏とぞ。

跋曰

武州豐島郡若一王子社者。所勸請熊野權現也。頃年征夷大將軍左大臣從一位源大君。治世理國之暇。敬神整民之餘。造替當社。然以其未有縁起故。忽降鈞命。令愚拙撰其詞。於是能書揮行草之勢。畫工盡丹青之美。其功已成。裝爲三軸。以納社内。誠是神寶之最也。須遺芳於萬世。而耀神威鎮邦家者也。奉命者。復使愚拙記其事於軸末。於是乎書。

寛永十八年七月十七日　民部卿法印道春敬書

熊野三神傳記壹卷　金輪寺に傳ふ、元文三年成島氏信遍、台命を奉じて是を識さる。飛鳥山碑文の中に所謂別錄を藏すとあるは此傳記の事なり。

熊野三神傳記曰

熊野之神蓋三祀。皆屬牟婁郡。隷紀府治。一曰本宮。祀伊弉冊尊。及速玉雄命。事解男命也。二曰新宮。距本宮六十有里。三曰那智。距本宮五十里。傳曰。崇神帝六十五年。始建本宮。景行帝五十八年。又建新宮。唯那智不詳起何時也。神史所載。伊弉諾尊。伊弉冊尊。所過而化乃生國

土草木。終生軻遇突。是爲火神。冊尊既因生火之神所灼而去矣。乃葬紀之阿哩馬邑。邑有華窟。卽葬神之地。以故土俗祀之以花。結繩爲旛。鼓樂舞蹈。今尙然也。蓋古之遺也。有產田祠。又祀二神之地。其跡業已在本宮先云。又曰。開闢之始。冥々中有物象。帝之先號國常立尊。神之代七焉。傳至二神。始生日神。是稱天照大神。又曰弱宮。或號弱一王子。共配熊野祠。至新宮那智亦類。依其例凡我語神之道。形於人物於惠。其速玉事解二王子者。特分稱二神之惠。是已。是其大略也。若夫飛烏三狐。徐福。八咫烏。自外諸祠。則自上世所副。各有其傳。存焉。鳳卿聞之紀人。熊野之山負海而昇峙。天工之所造。神而秀不可體矣。厥石磊砢而麗。厥水澄徹而甘。厥草木區萌而達。厥土壤赤埴而肥。神之止焉。固其所乎。聖者之出。寧知不在斯乎。豈啻與雲雨降福釐。不測之謂神。其不然邪。蓋二神之跡。在彼盤古之紀邪。其必在結繩先。而神德不可揜如斯。夫神統千世。確乎不遷。嗟乎神之國其疇不欽哉。鳳卿日代撰飛烏山碑。遂閱舊史謹叙三神事如此。

元文丁巳之冬　　東都中祕書少監源鳳卿子陽謹識

大般若經卷第三百四十九。今一卷を傳ふるのみ。餘は寶曆六年上州脇屋村正法寺觀音へ奉納せしといへり。其卷末に、

奉施入武州豐島郡熊野權現御寶前文保二年戊午初秋

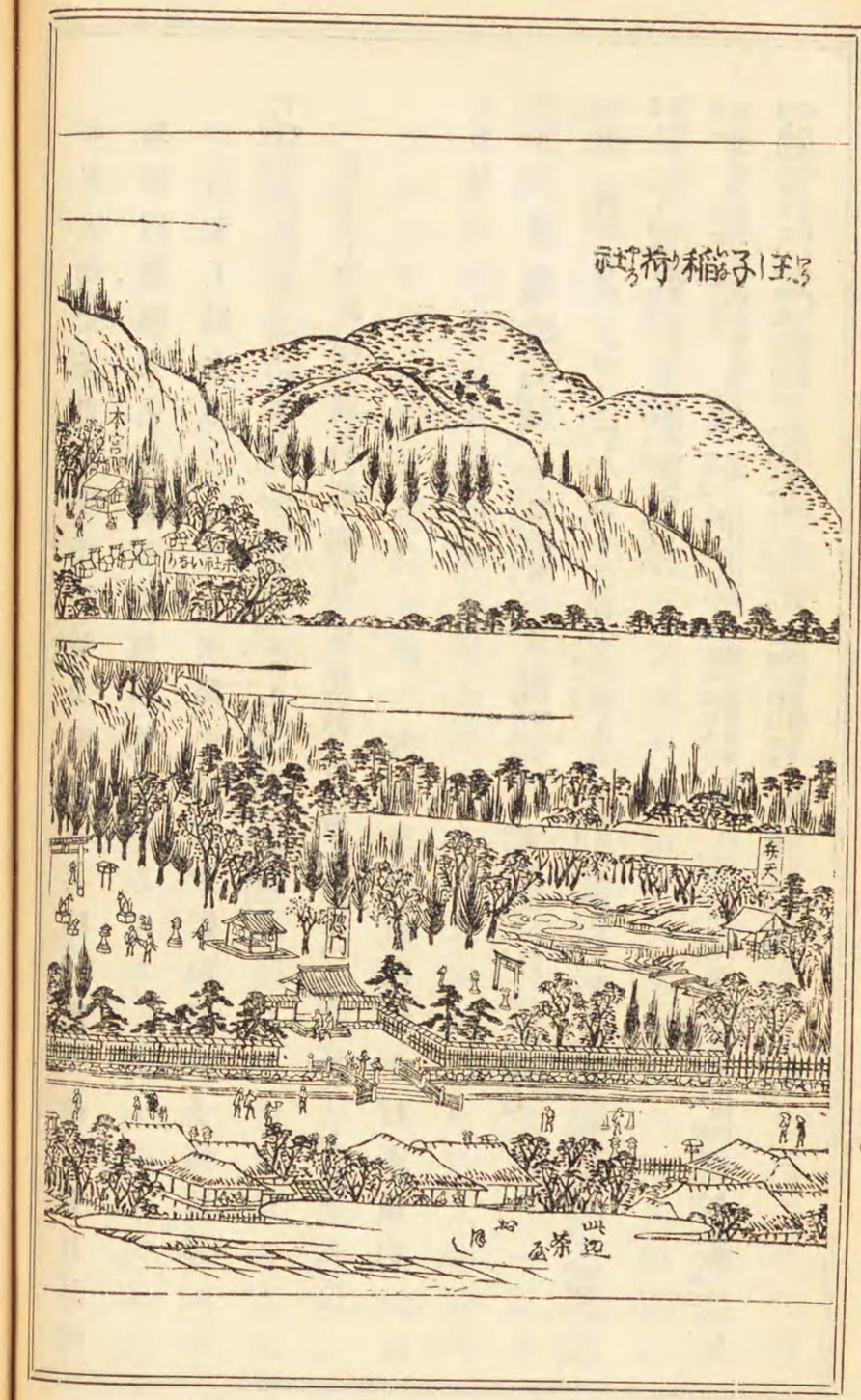
大施主右衞門尉平行泰敬白

とあり。

古證文二通　北條氏政氏直神領寄附の證文なり。　千鳥屛風一雙　狩野古法眼元信の筆なり。　蘆屋釜一口　共に北條氏直の奉納なり。

祭禮　例年七月十三日にして、十二番の拍板あり。此日王子村の童子手毋に竹の鉾を持ちて警固す。祭終りて後參詣の貴賤彼鉾を携へて皈り、火災盜難を除くの守護とす。是も古よりの習俗とぞ聞えし。其外一季十餘度の祭祀連綿として、國家安寧五穀豐饒の禱怠慢なし。

本地堂　本社の左にあり、彌陀藥師千手大悲を安置せり。　若一王子宮　本社の右にあり、新宮天照大日靈貴尊を鎭る。　飛烏祠　同じ所に竝ぶ。祭神は事代主の命なり。元享年中豐島左衞門なるもの勸請す。始めは飛烏山にありしが、寶永の頃、合命に依て、當社の境内に遷坐す。　康家淸光社　同本社の左にあり。是豐島太郎康家、同權頭淸光父子の靈を鎭る。其餘末社多しといへどもこゝに略す。

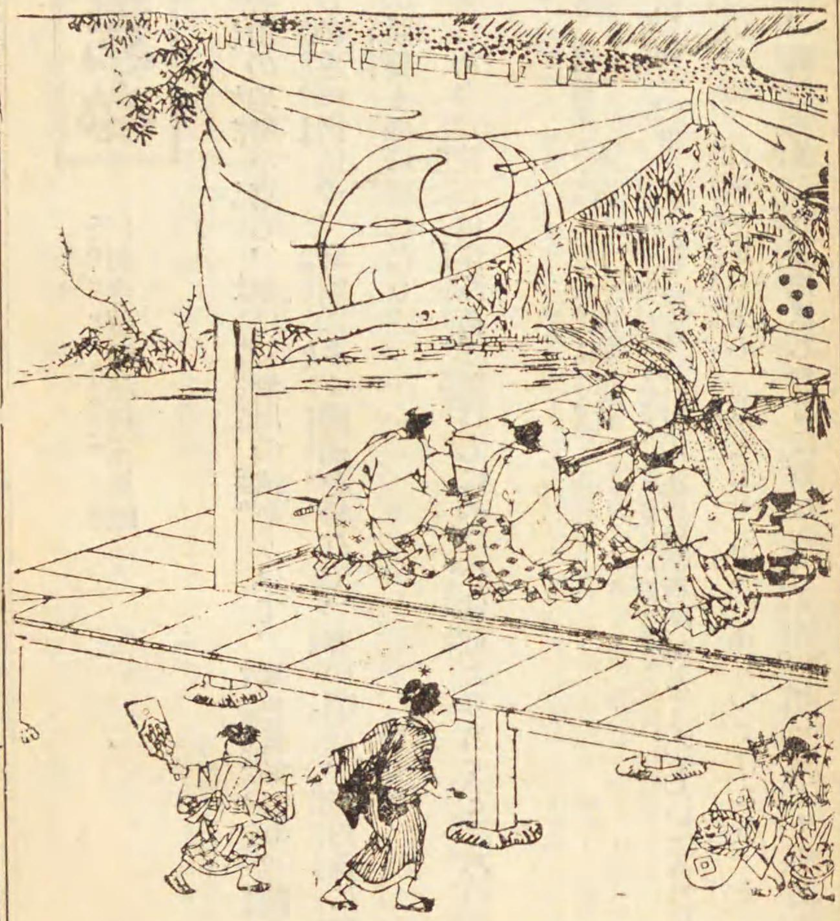

王子稲荷社
本宮
しろい社
弁天
此辺茶屋

いろり
本社
神木
此辺茶屋

狐火東自
衣裳櫃
毎歳十二月晦日の
夜諸方の狐夥しく
こゝに集り來るよ
恒例なりて今ゝ
然り其燈ぜし火
影に依て土民明
年の豊凶を
卜
こと此事霜月
あり初更時
なりて時刻定る
事なり

十八講

毎歳正月十七日王子村農家より是を行ふ當日権現の別當金輪寺の住持を請じ酒飯の賓客多し又當番の百姓村板鯉魚盤の三品を拵へ生てのまとよいやさの言葉とをしむ食とをしむ是此地の舊例よりて十八講と云ふ神領十八箇村あり下頃の



樓門額

仁和寺覺深法親王眞蹟

當社はすべて紀州熊野山の地勢を寫し、前に音無川の流をうけて、風色眞妙なり。花の時は花をもて祀るといへる神慮に因にや、社頭に多く櫻樹を植ゑて、春の頃は、境内殊に觀賞あまりあり。亦冬月雪の眺望も他に勝れたり。

王子稲荷社

同北の方にあり。往古は岸稲荷と號けしにや、今當社より出すところの牛黄寶印にしか記せり。

本殿　倉稲魂命　聖觀世音　陀枳尼天　藥師如來

本宮　十一面觀世音

王子權現縁起に曰く、いづれの世にかありけん、此社の傍に稲荷明神をうつしいはひければ、毎年臘晦の夜、諸方の命婦、此社へ集り來る。其ともせる火の連りつゞける事、そくばくの松明を竝ぶるが如く、數斛の螢を放ち飛ばしむるに似たり。其道野山を通ひ、河邊をかよへる不同を見て、明年の豐凶を知ると聞ゆ。命婦の色の白きと、九の尾あるは、奇瑞のものなりと、古き書にありとなん。下畧

因に云ふ、今の世三狐神〔ミケツノシン〕の名に附會して、伊奈利〔イナリ〕を白狐とするものは、大なる誤りなり。又狐を伊奈利の使者とし、又こゝに命婦といへるは、或書に云く、後小松帝の明德年中、一人の老命婦あり、深く稲荷を信じ、毎日詣でけるに、命婦が飼ひける野狐あり、必ず參詣の時は先へ社壇に來り待ちし故に、社人も狐の來るを見て、命婦のやがて詣づるを知り、命婦も年老ひ世を退りて後は、狐を養ふ者もなく、終に伊奈利山へ至り住みけり。社參の人、命婦狐〔ミヤウブギツネ〕と名づけ、呼出して菓物などあたへけるが、年經て死しけるを、人憐みて、本社のかたはらに埋め、社を建てて祀りしよし記せり。是狐を伊奈利の使者とせしよりどこゝなるべし。

當社は遙に都下をはなるゝといへども、常に詣人絶えず。月毎の午の日には殊更詣人群參す。二月の初午には、其賑ひ言ふもさらなり。飛鳥山のあたりより、旗亭、貨食舗、或は丘に對し、或は水に臨んで、軒端をつらねたり。實に此地の繁華は都下にゆづらず。

禪夷山金輪寺

王子權現、同稲荷兩社の別當寺なり。康平年中、源義家、東征凱陣の頃、新に當寺を營みしとぞ。其頃奉納の鎧兜等、今猶傳へてこゝにあり。治承四年、賴朝稲荷の宮へ奉納ありしといひ傳へて、義家の腹卷および薙刀等は、元亨以後、權現の寶庫に併せ納むるよしにて、今當寺にあり。當寺昔は新義の眞言宗なりしが、台命によりて、天正年中、相州小田原早川眞福寺の宥養上人を、權現の別當に補せられ、此時より古義に改められ、關

松橋辨財天窟
石神井川

不動滝
泉流瀧
正受院の本堂の
後背壁に
趨る
此境は
常に
蒼樹茂り
鬱
して
飛泉
あり
滴くして
背壁に
趨る
此境は
常に
蒼樹茂り
鬱

白日を
さくして
青苔露
あらふ
人跡
稀なり

東一派の棟梁たらしむ。關東古義の五ヶ寺は、所謂豆州走湯山般若院、相州箱根金剛院、同國大山八大坊、鎌倉鶴岡坊中莊嚴院、ならびに當寺等なり。

五香湯　王子權現縁起に曰く、ある時詐宣して、五香の藥を授けられしより、其藥を服するもの、諸病悉く除く。神の恩德甚だ厚し。もろこし眞人が龍宮の祕法を傳へしも、いかでか是に增るべき。藥師如來のもなしくましますゆゑなれば、瑠璃の壺の露の滴（メグミ）の人を助くるしるしにて、佛を醫王と號する事は、一切衆生の病をいやす故なりとあるも、げに もとあぼえ侍ると云々。此くすりは別當金輪寺より出す。一切の病によく、殊に小兒に用ふるに驗あり。

音無河　王子權現の麓を流る。故に紀伊國音無河を摸して、かくは名づくるとぞ。本名を石神井川といふ。武州石神井村三寶寺の池より發するところなり。下流は荒川にいる。世俗瀧野河と云ふは誤なり。瀧野河村と號して河のなにはあらず。

松橋辨財天社　王子現權の西の方、三四丁ばかりにあり。本尊は弘法大師の作にして、卽ち大師の勸請なり。此地は石神井河の流に臨み、自然の山水あり。兩岸高く、櫻楓の二樹枝を交へ、春秋ともにながめあるの一勝地なり。源平盛衰記に、治承四年十月、賴朝卿、隅田河をうち渡り、武藏國豐島の上瀧野河松橋といふ處に陣をとる、とあるは、此地の事なり。賴朝奉納の太刀、振當社寶物たり。

瀧河山金剛寺　松橋院と號す。松橋辨天境内に安ず。弘法大師の開基にして、本尊不動尊は、卽ち大師の作なり。其後あまたの星霜を經て荒廢におよび、他の宗風に化せり。天文の頃、中興阿闍

梨看印なるもの、曩祖開基の靈地をして他の宗風に轉ぜし事を歎き、其頃北條氏康に訟へて、再び眞言の靈區に復せしむとぞ。

瀧不動尊　金剛寺の東二丁あまりにあり。此境後は石神井川に臨めり。寺を正受院と號く。傳へ云ふ、弘治年中、和州龍門の奥に、學仙坊といへる僧住んで、不動尊の法を修する事年あり。或時靈夢を得て、東國に來り、此所に瀧のありけるを觀て、是を幸とし、其傍に庵を結びて、不動の法を修せり。しかるに其年の秋、洪水にて此河夥しく水嵩まさりしに、水中に光あり。水落つるの後、彼光のさしけるあたりを求むるに、不動の靈像を得たり。不測に感得せしをよろこび、卽ちこゝに安置し奉るとぞ。

自得山靜勝寺　曹洞派の禪宗にして、稻付にあり。此地は太田道灌問讃の居跡なり。道灌亡ぶるの後は、狐兎のふしどとなりけるを、中頃萍水浮雲の僧あつて、此所に草庵を結び、道灌寺と號す。是當寺の草創なり。其後太田家より、當寺を建立ありて、靜勝寺と改む。

觀音堂　本尊十一面觀音は、越の秦澄の作にして、道灌入道崇尊の靈像なり。影堂　道灌入道の木像を置く。

懸雲燈
圓通閣
灌公祠
梵鯨樓
古城沼
樓鷺壕
霊亀池
蟠松岡

衣當寺の八勝あり既に石正倚の詩あり是を畧す

五葉松（南の方畑の中に有り、道灌手植の由云ひ傳ふ。）龜ヶ池（寺の後の方にあり。むかし此池より靈龜出でけるより名とすと云ふ。）

抑（そもそも）太田左衛門大夫資長（或は持資と號す。初めの名は源六郎、世に左金吾と稱す。薙髪して道灌又春苑香月靜勝と號す。永享四年壬子相州に產る。）は、源三位頼政十世の孫、備中守資淸入道道眞の子なり。扇谷上杉修理大夫定政に屬し、江戸城に住す、父と共に武毅勇烈關東に覆ふ故に、人唱んで眞灌と稱す。また城を築くに巧なり。東國の城、多くは道灌の指圖にして築く所なり。長祿元年、武州江戸城を草創し、城中に燕處の室をいとなみ、靜勝と名づく。西を含雪といひ、東を泊船と稱す。和漢の書を集むる事、幾千卷といふをしらず。常にこゝに在つて詩歌をたしむ。仍て城北に菅神を勸請し、祠を建つる。（今の御城西平川天神是なり。）

此時兩上杉（扇谷上杉修理大夫定正。山內上杉兵部少輔房顯。）權をあらそひ、互にこばみ、終に間計を以て、定正に道灌をうたがはしむるによつて、定正人をして灌を浴室に刺殺さしむ。時に文明十八年丙午七月廿六日、年五十五歲、（相州糟屋洞昌寺に葬る。）死にのぞんで云く、余を害するは定正亡家の兆なりと。はたして定正威衰へ、再び振はず。道灌是より先、寬正年中上洛す。勅してむさし野の勝景を問はしむ。和歌を以て答へ奉る。

露置かぬ方もありけり夕立の空よりひろきむさし野の原

又平生の眺望をとはしむ。

我庵は松原つゞき海近く富士の高根を軒端にぞみる

此時感のあまり御製をたまふ。

むさし野は高萱のみと思ひしにかゝる言葉の花や咲くらむ

又ある時、勅して角田河の都鳥をとはしめたまふに、

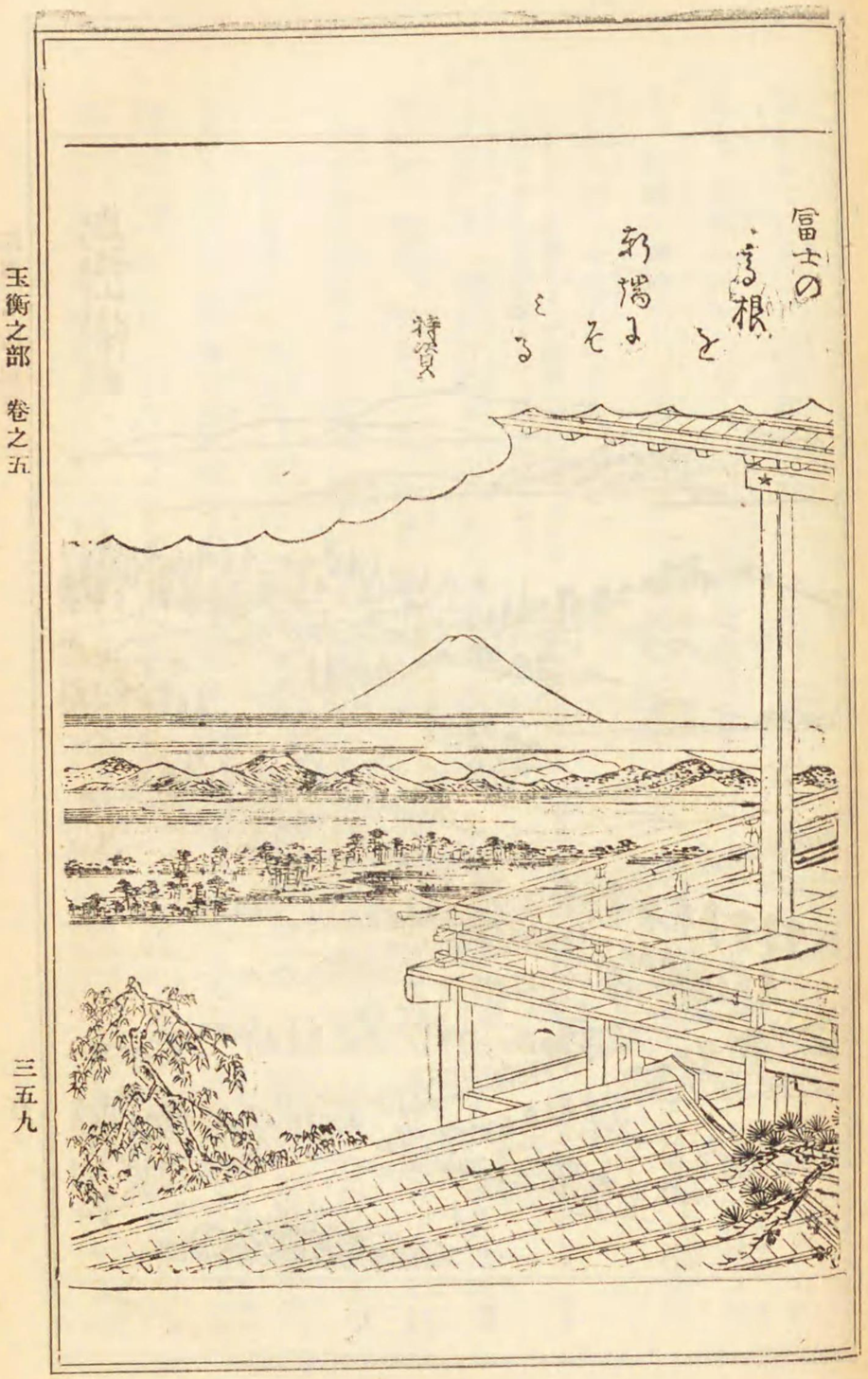
年ふれど我まだしらぬ都鳥角田河原に宿はあれども

其餘の和歌は家の集に出づるを以て、こゝに略す。

赤羽山八幡宮　あかばねむらにあり。社傳に云く、當社鎭座の年歷は、久遠にして詳ならずとぞ。中古大に荒廢におよびしを、文明の頃、太田道灌再興ありしより、祭禮怠る事なし。神寶に獅子の頭一箇、古き面二枚あり。

川口渡（往古はこかはぐちといへり。）義經記に、九郎御曹子、奥州より鎌倉に至り給ふといへる條下に、室の八

太田持資
含雪亭より
富士峯を望こと
和哥を詠す
永庵ハ
松原
つゝき
海
ちゝ
く


富士の
高根を
新緑よそ
る
特資

島をよそに見て、武藏國足立郡こかはぐちに著きたまふ。御曹子の御勢八十五騎にぞなりにける。板橋にはせつきて、兵衞佐殿はと問ひたまへば、おとゝひこゝを立たせ給ひて候と申す。武藏の國府の六所町につきて、佐殿はと仰ければ、おとゝひ通らせたまひて候、相摸の平塚にとこそ申しけると、云々。

按ずるに、渡場より一丁程南の方の左に、府中道と記せる石標（ミチシルベ）あり。是往古の奥州海道なり。是より板橋にかゝり、府中の六所町より玉川を渡りて、相摸の平塚へは出でしなり、

川口善光寺　川口村渡場の北にあり。天台宗にして、平等山阿彌陀院と號す。本堂には阿彌陀如來、觀音、勢至、一光、三尊を安ず。寺傳に曰く、往古定尊といへる沙門あり。法華經を誦するの外他なし。建久五年の夏、一時睡眠の中に、信州善光寺如來の靈告を得る事あつて、直にかしこにまうで、正しく如來の聖容を拜す。示現に依て十方に勸進し、財施を集め、金銅を以て中尊阿彌陀佛を鑄奉る。時に建久六年己卯五月十五日なり。佛の御胸中には、三寸五分の水晶の寶塔をこめ、うちに佛舍利四十八顆を收めたてまつる　同六月二十八日、二十九日に脇士觀音勢至の二尊を鑄奉る。終に堂宇を建立して、善光寺と號す。御告に依て、四十八日の間、四十八度の開眼供養を修行しけるに、本師如來降臨あつて、當佛の頂を摩でて、ともに開眼し給ふ上し、當寺緣起に詳なり。二王門の額に、平等山

川口善光寺

河口鍋匠

其家に伝へて云天命圖安國論を淺草

人皇九十七代光明院の門宇潛應午間河内の丹南郡より此所に移り住す其子孫今猶ことに繁榮して

連綿たり

とあるは、黄檗木庵の筆なり。

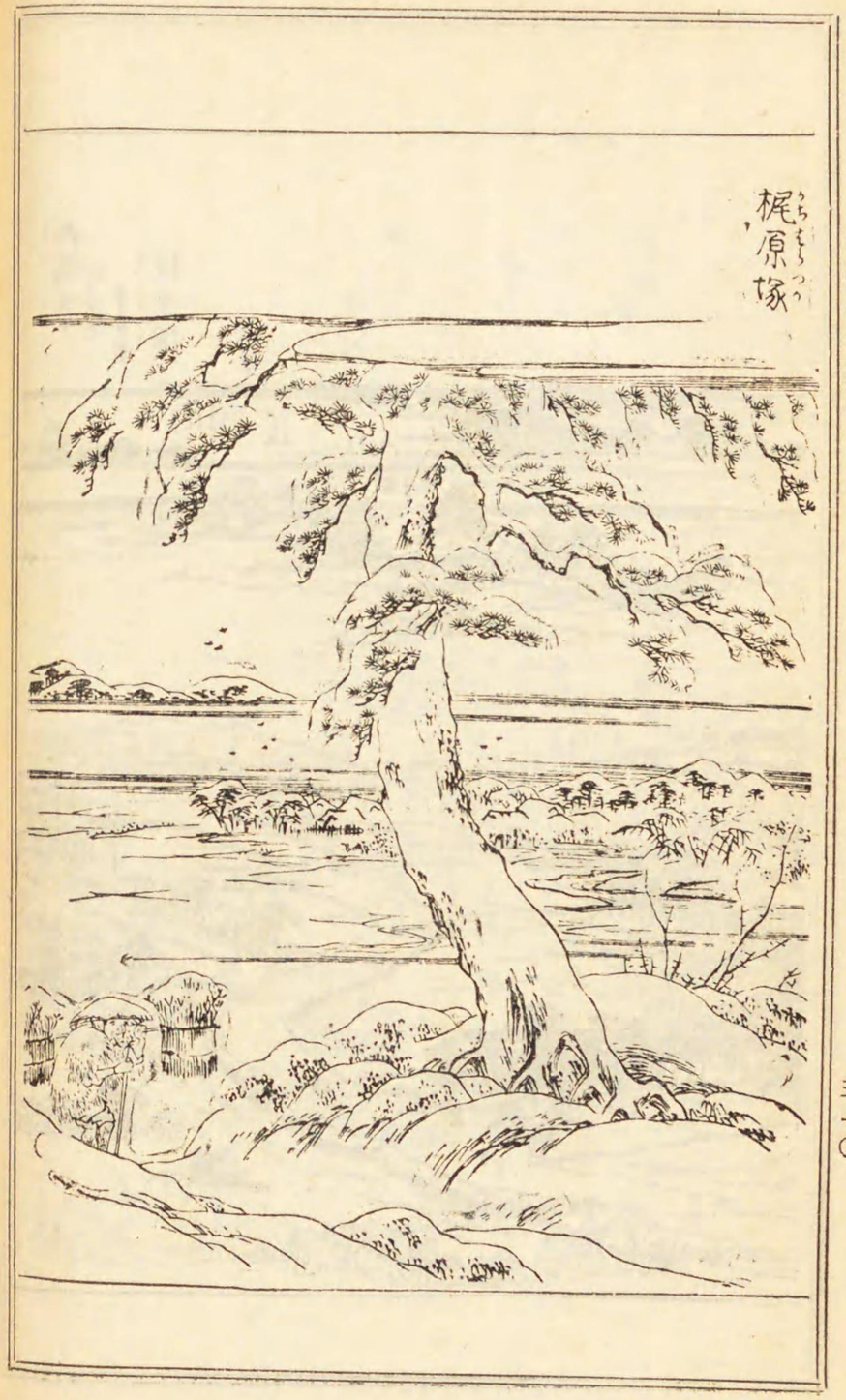
豐島驛　今豐島村と號する地、其舊跡にして、往古は此郡の府なりしと見ゆ。續日本紀に、武藏國乘潴、今其所をしらず、訓も又詳ならず。豐島の二驛の事を擧げたり。又和名抄に、武藏國豐島郡とある中、驛家と記せるは、恐らくは此地ならん歟。或人云ふ、豐島系譜に、堀河院の御宇、豐島太郎義近と云ひし人、此地にありて、八幡太郎義家に仕へし由を載すと云々。東鑑に、仁治二年四月廿五日の條下に、大宮三郎盛員、豐島又太郎時光と、武藏國豐島庄大食名を相論ずるは、大宮の有忠が四一半を打つより事起るとあれば、豐鳩氏代々こゝに住せしと見えたり。又鎌倉大草紙に、文明九年豐島勘解由左衛門尉泰經、舍弟平右衛門泰明、平塚の城にありて、道灌と いどみ戰ひ、終に討死し、明る十年正月落城すとあれば、文明の頃は、豐島村の地には住せざりしならん。永祿年中北條分限帳に、太田新六郎知行の中に、江戸豐島の地名を加ふ。按ずるに、永祿の頃は、太田新六郎知行せしと見えたり。

三緣山西福寺　豐島にあり。禪宗にして、行基菩薩の開基なり。本尊阿彌陀如來も同作なり。豐島櫻頭清光建立あり。七佛の隨一なり。當寺は六阿彌陀第一番目にして、是を元木の如來と云ふ。緣起あれども、未だ詳ならず。四卷目小石川光圓寺の條下と照し合せて見るべし。二王門にかくる三緣山の額は、三國畫海宣の筆なり。

梶原塚　梶原堀内、豐島川の河曲堤の本にあり。昔は寺院もありしかど、そのかみ洪水の時川へ缺込みて亡びぬるとぞ。此塚は太田美濃守入道資正法名道譽、又三樂齋と號す。の次男、梶原源太政景の墳墓なり。梶原上總介が後家養子とす、始め謙信に屬し、後佐竹の幕下たり。享保の頃迄は、石碑石壇ありしが、洪水の時、豐島川へ崩れ込みけるとて、今は小笹の中に一株の松の

六阿彌陀
かけて
あく
らむ
ろと
きん
其角

西福寺
六阿彌陀
第壹番
梅原塚
梅原塚
ちまた川



み存せり。永祿二年北條家分限帳に、太田新六郎知行の内に、梶原堀内にて澁江分の地を加へたり。又平塚明神の北、飛鳥山の麓に、今梶原屋鋪跡といへる所あり。按ずるに、是も政景が第宅の地ならん。

醫王山清光寺　豐島村にあり。眞言宗にして、豐島權頭清光の開基なり。本尊不動明王は、清光建立ありし七佛の隨一なり。清光は賴朝の家臣にして、當寺は則ち清先舊館の地なりとぞ。今も當寺構の外に、御殿跡と稱して、わづかばかりの芝生あり。

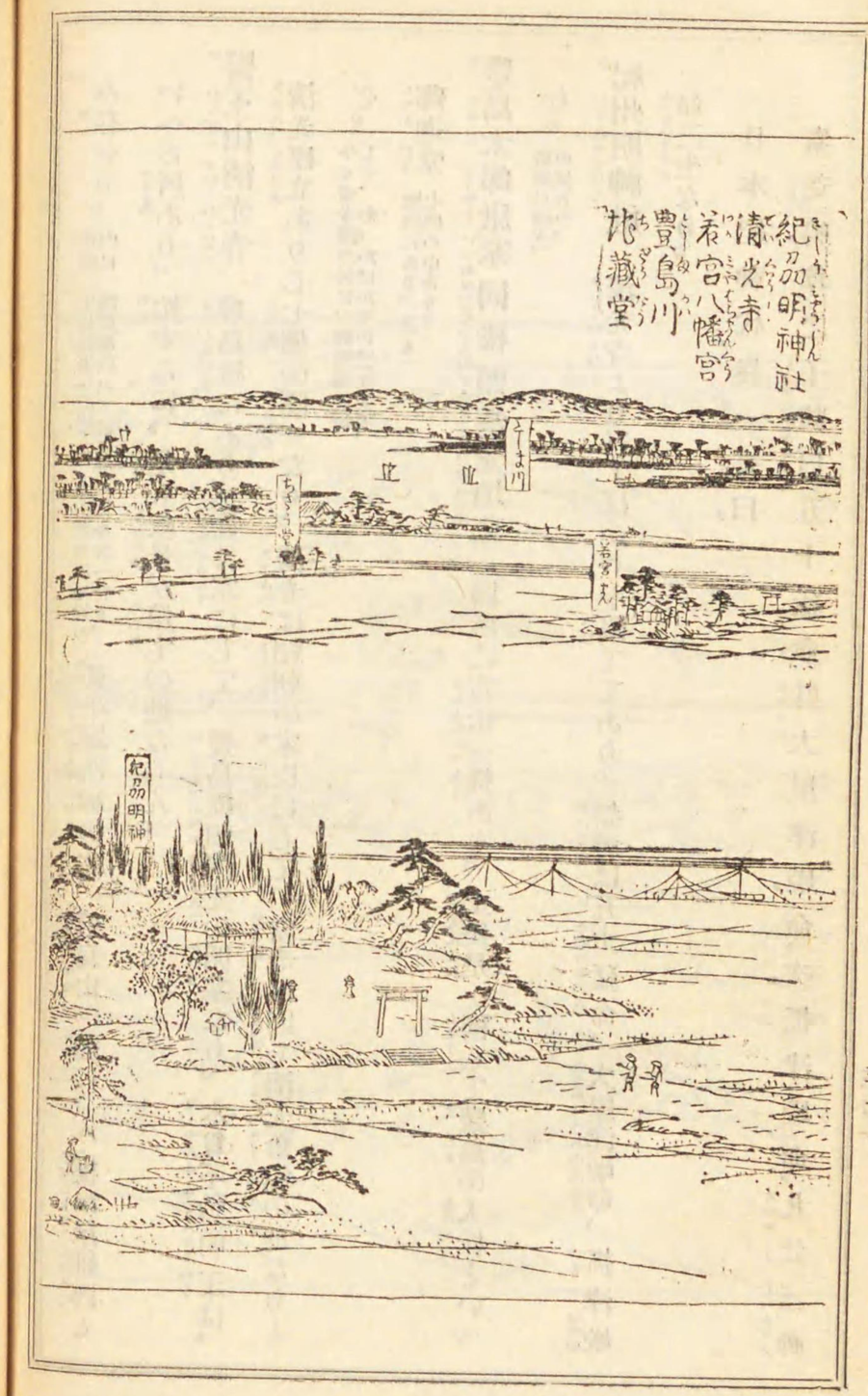
釋迦堂　境内にあり。是も七佛の中なり。

豐島太郎康家同權頭清光墳墓　同所に古松一株あり。土民是を稱して豐島の大松といへり。康家は清光の父なり。

紀州明神社　清光寺より三丁ばかりを隔ててあり。祭神は五十猛命、大屋津姫命、抓津姫命三坐なり。

日本紀神代ノ卷一書曰

素戔嗚尊之子號曰五十猛命。妹大屋津姫命。次抓津姫命。凡此三神


紀加明神社
清光寺
若宮八幡宮
豊島川
地藏堂
紀加明神

清光寺
清光宅池

亦能分布木種。卽奉渡於紀伊國也。云々。

社傳に云く、往古豐島氏某、王子權現を勸請せし頃、彼地の末社に鎭座なしけるに、故あつて天文年中、今の地に宮居を移せしとぞ。當社は昔より豐島村の產土神にして、祭例は毎歲九月十八日執行ふ。社司鈴木氏は、元亨年中紀州より來る。彼地八庄司の後裔なりといへり。

觀音堂 同所にあり、本尊は毘首羯摩天の作なりといへり。此地も昔は淸光寺の境內にて、淸光建立ありし七佛の中なりとぞ。

地藏堂 豐島川の端にあり。

龜島山專稱院と號す。 本尊地藏菩薩は、行基大士彫刻の靈像にして、豐島左衞門尉淸光建立ありし七佛の一なり。寶永二年乙酉、祐天大僧正、此地の住人臼倉四郎左衞門といへるものの助に依りて再建し給ひ、同四年正月廿七日、入佛供養あり。僧正其頃群參の男女へ十念授與ありし舊跡なり。又堂內に祐天僧正自ら開眼ありし六十九歲の壽像を置き、名號を添へらる。俗是を稱して證據の名號とあざなす。訶羅多山地藏尊、是も僧正の本地佛にして、自ら開眼ありしとなり。

若宮八幡宮 同所豐島川の端にあり。當社は豐島權頭淸光の靈を鎭るところなり。

江戸名所圖會 卷之六

開陽之部目錄

〔原本十六より十七まで二冊〕

金龍山淺草寺 觀音宮 古繪馬 山門 五層塔 輪藏 隨身門 三社權現堂 熊谷稻荷社 十社權現社 念佛堂 閻魔堂 地藏菩薩古碑 蔡覺大師護摩壇の跡 護王殿 淡嶋祠 錢塚辨天祠 例幣使松 西宮稻荷社 平內兵衞石像 石の枕來由

一權現社 姥が池 楊枝店 六地藏石燈籠 坊舍 雷神門 觀世音出現の圖 藜堂來由の圖 六月十五日祭の圖 節分會の圖 十二月十八日年の市圖 蔽內馬圖

駒形觀音堂 淺草川

三嶋明神社 清水稻荷社 同來由の圖

櫪寺 御厩河岸渡しの圖

大藏前八幡宮 諏訪明神社

閻魔堂 奪衣婆 地藏觀音

祇園社 同祭の圖 十王堂

銀杏八幡宮 鳥越里

第六天神社 篠塚稻荷社 鳥越明神社

西福寺 御宮辨天祠

東漸寺 淨念寺 手向野舊址

東本願寺 報恩講參詣圖 報恩寺 開山古事 寺寶 誓願寺 日輪寺

天嶽院 稱往院 東光院 海禪寺

清水寺觀世音
長遠寺日蓮大士
廣德寺
五條天神社
善養寺閻魔堂
根岸圓光寺　庭中藤棚
簑輪西光寺
萬里小路寓居之地
飛烏明神社　瑞光石
光茶銚
十二天森
六月村八幡宮
上宮太子堂
幡隨意院　妙龍水
下谷稲荷社
常樂院　六阿彌陀五番目
入谷庚申堂
時雨岡
千束郷　千束稲荷社
山谷熱田明神社
誓願寺
沼田延命寺　六阿彌陀二番目彼岸詣の圖
餘木彌陀如來
白籏塚　白籏耕地　兜塚
除厄太子堂
信州善光寺燈明　燈明寺
下谷岡
上野坂本口圖
小野照崎明神社
不動堂御行の松
木戸孝範第宅舊跡　三河嶋
駿馬の塚
熊野權現社
富士淺間宮
西新井弘法大師堂
梅田明王院
祝言寺
永昌寺
東叡山山下の圖
養玉院
金杉安樂寺
正燈寺　園中楓樹
小塚原天王社
千住大橋　千住川
淺間の淵
大師加持水
天滿宮

不動堂
橋場
眞崎稲荷社　神木榎
正平合戰之圖
妙龜塚　妙龜明神社古墳
玉姫稲荷祠
長昌寺　宗論の芝　鐘ケ淵來由
山谷堀今戸橋の圖
日本堤
鷲大明神社　同祭の圖
朝日神明宮
思ひ川
砂尾不動堂
鏡ケ池
東野先生墓
今戸八幡宮
慶養寺
新吉原町
石濱
牛頭天王祠
隅田川渡
總泉寺　千葉介墳墓　宇都宮入道墳墓
袈裟掛松
法源寺　從二位有理卿墓碑　權大夫景道石塔
聽水鷄の圖
眞土山
石濱城跡
天滿宮
石濱古戰場
淺茅ケ原
采女塚
齋藤別當實盛墓
今戸陶器師
聖天宮

江戸名所圖會

開陽之部

卷之六

金龍山淺草寺　傳法院と號す。坂東順禮所第十三番目なり。天台宗にして、東叡山に屬せり。

按ずるに、東鑑に、建久の三年壬子五月八日、法皇四十九日の御佛事に、百僧供を修せらるゝと、其條下に、僧衆の中、淺草寺よりも三口とあり。又同書に、建長三年辛亥三月六日、淺草寺へ牛の如きもの忽然と出現し奔走す。時に寺僧五十口ばかり、食堂に集會する所に、件の怪異を見て、廿四人立所に病痾を受く、七人即座に死するよしを記せり。寺僧五十口ばかりとあるときは、往古も猶大伽藍なることをしるべし。永祿二年小田原北條家の分限帳に、淺草寺家分四十貫九百文を附せらるゝよし出でたり。

本堂　本尊聖觀世音菩薩　佛にして、輒く寶帳を褰げざれば、其實を知りがたし。世に傳へいふ、御長一寸八分と。しかれども、古より祕

脇士　梵天帝釋　二尊は行基大士の作なりとあり。此　四天王　脇壇　右不動明王　左愛染明王　後左右

三十三身像　其餘堂內に諸の佛天を安置す。中にも賓頭盧〔ビンヅル〕尊者は慈覺大師の作にして、靈驗いちじるし。

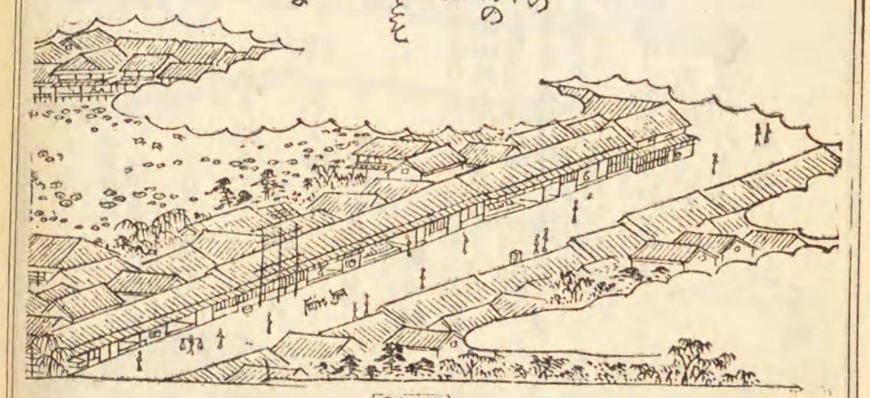
額　觀音堂　御拜の上にかくる。大明福州漳郡龍邑徐紹勳の筆

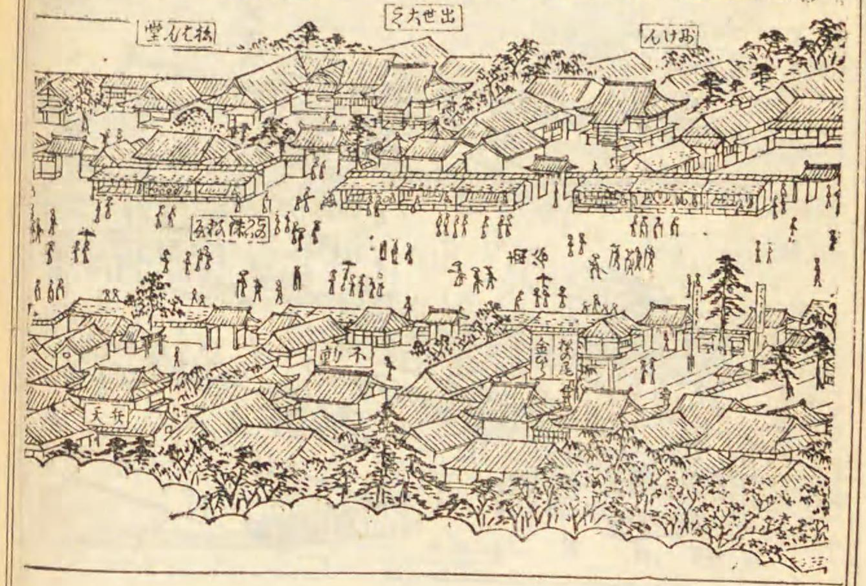
金龍山
淺草寺
金圖
五枚
隅田川
浅草川
北十間

四國雜記
淺草といふる石
庭小歳ゆる
あられ
まつ海苔の
うら枯
蛾の雪
ひとと
庭うれ
道真淮后
京國記行
南田川も
春の
雲東順禮
ふとうん
秋
おはらの
露
南田川
宗牧
風雷神
大宮神

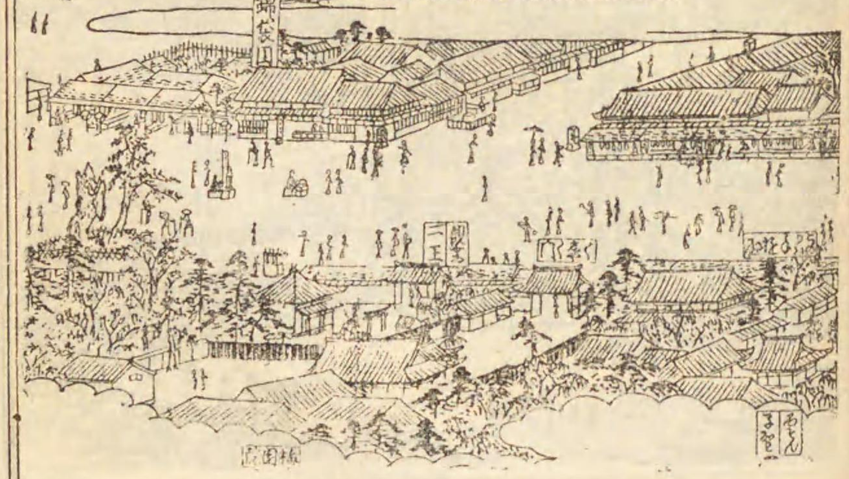
其二

二十軒茶屋ハ
千仙茶屋とも
いろ〳〵昔ハ茶店ありし御膳の
茶ものれとて茶
碗のくらべとて
今ハ其ハ名の負
二十余軒あるゆゑ
俗名とて
二十軒茶屋と
いひしなり

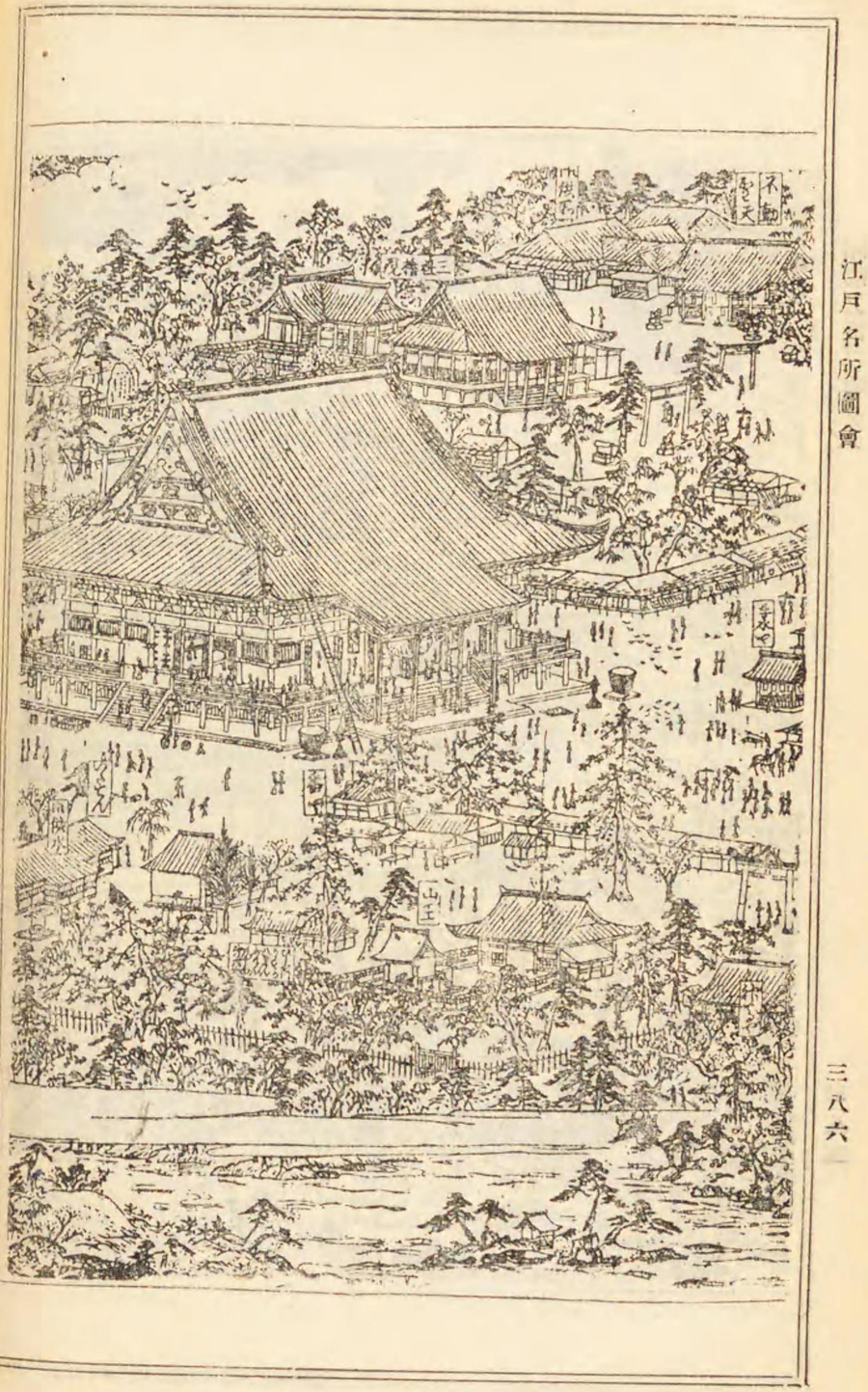


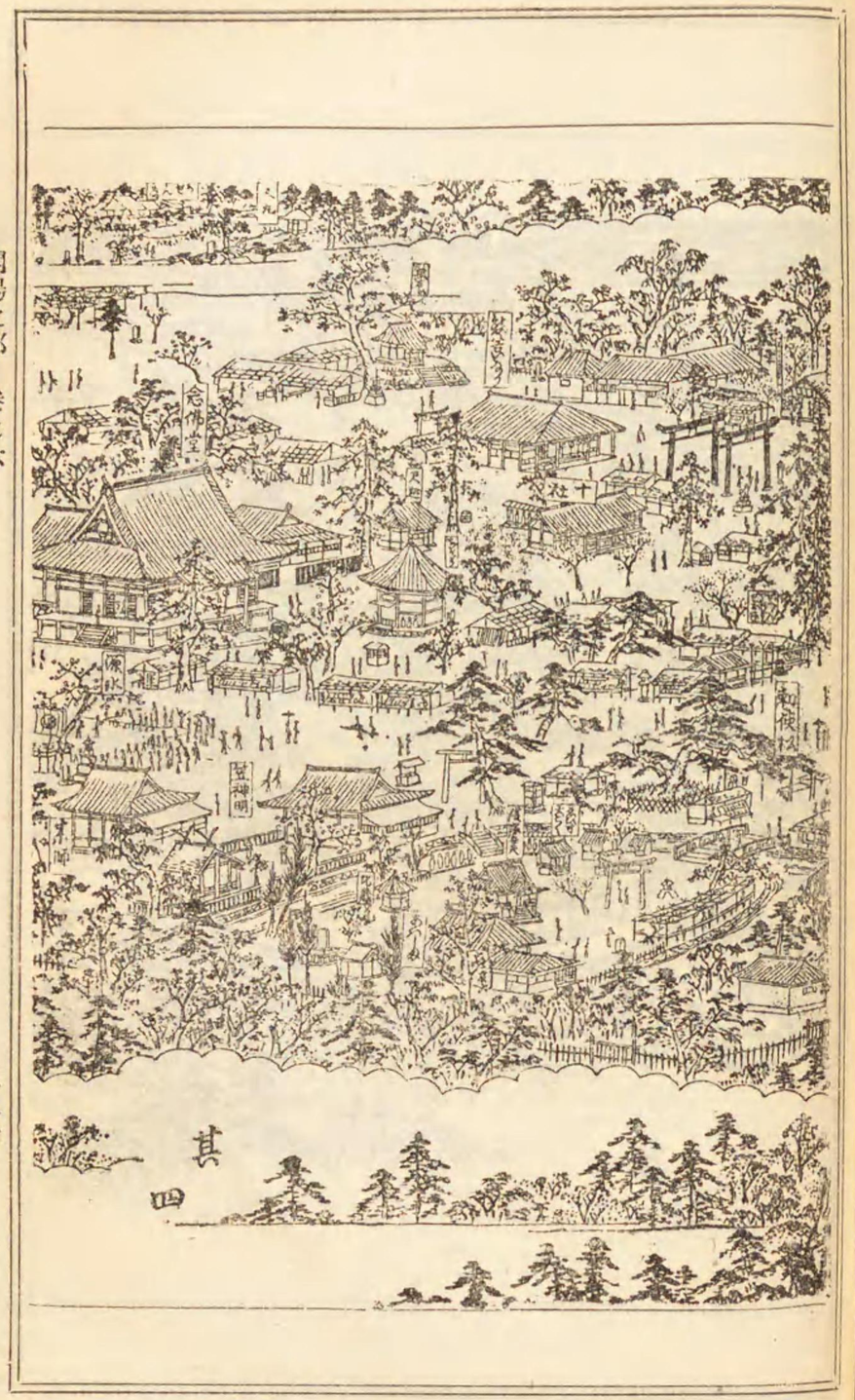


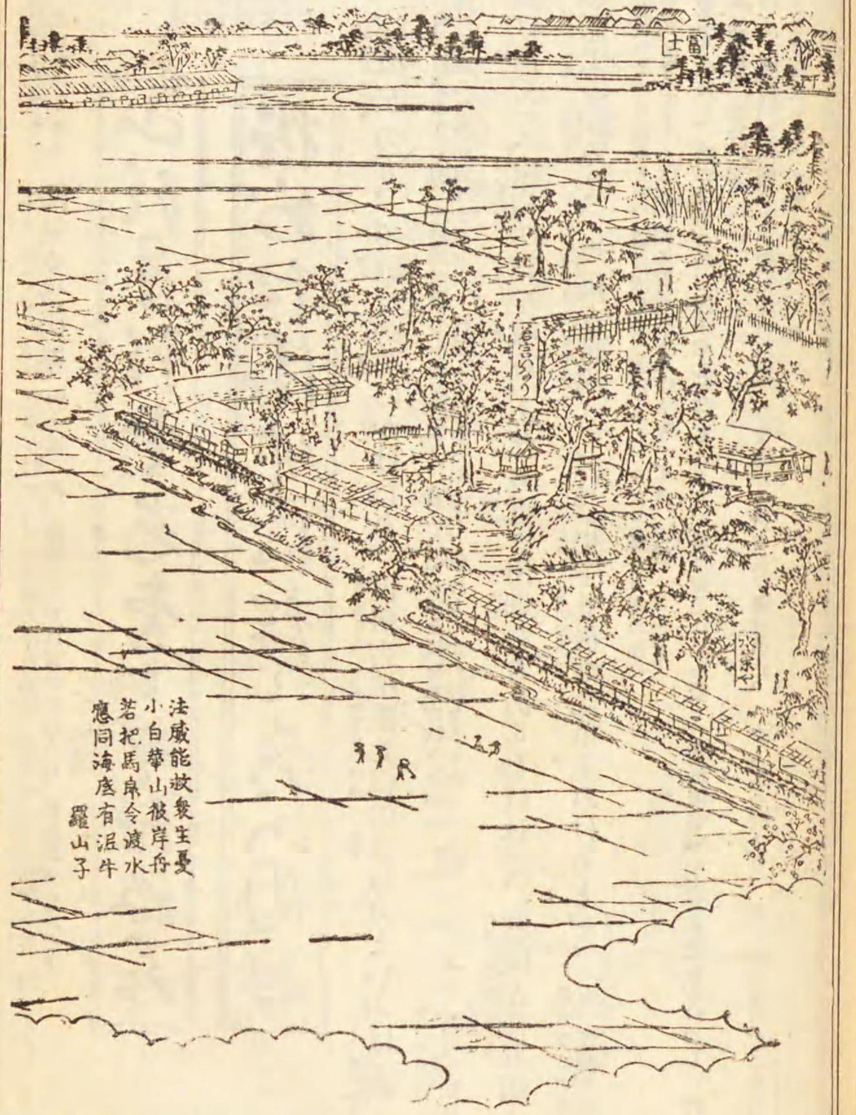
立元集
石の枕了
鯨や
いろ〳〵
今ハ
茶屋
其角

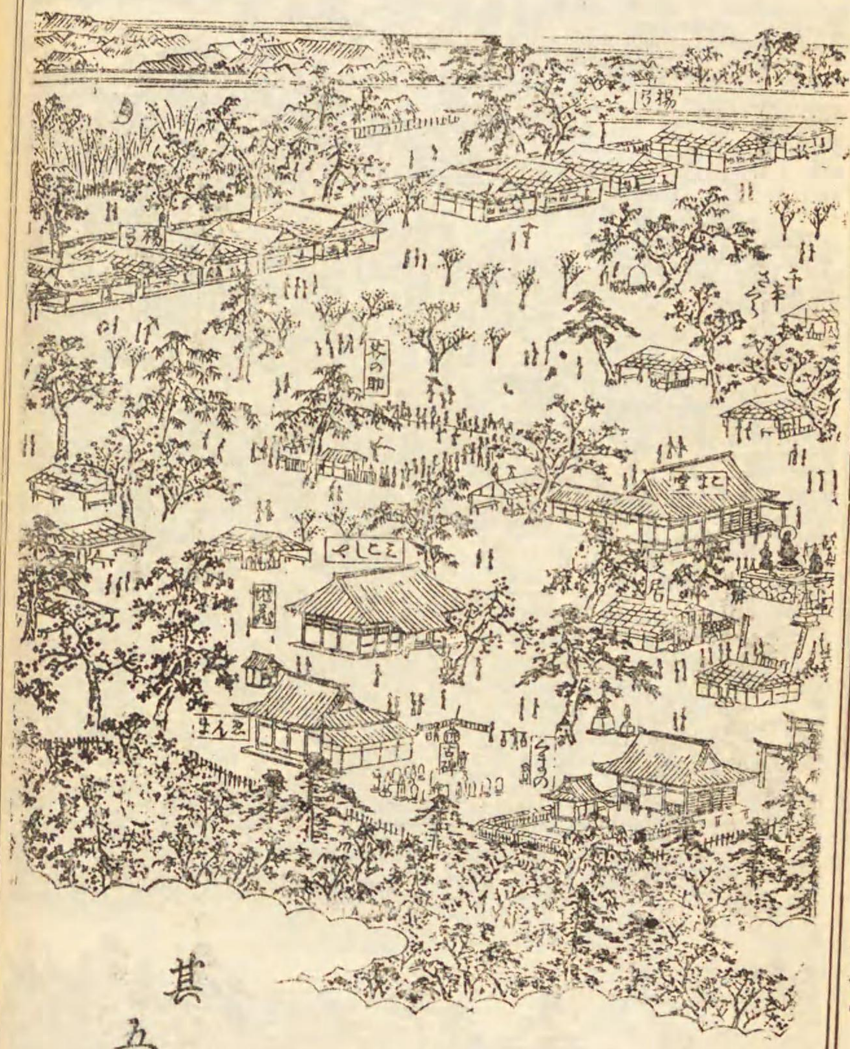


其三









其五

額、施無畏（外陣の家欄、ナゲシ）にかけてあり。深見玄岱の筆（天井の龍ならびに内陣天井の鳳凰、後壁の二十八部衆等は、狩野永眞の筆、拜殿の天井に畫ける天人は、狩野洞春の筆なり。）

聯（内陣の左右に掲くる印に元壽の二字を注す。筆者孟寛の傳あれども、しげきをいとひてこゝに略せり。）

古繪馬

脇壇左の方、不動尊の前にかけたり。世俗古法眼元信の筆なりといふは誤なり。往古此馬毎夜に額を抜け出でて、境内の草を喰み、あたり近き田畑をもあらしければ、其頃左甚五郎といへる名譽の彫工を頼みて、曳縄を書添へしむ。仍て其後は此事止みけりとぞ。（是大なる附會の說ならん。曳縄も同時の物にして、後世書加へたるにはあらず。圖に依て辨じ明むべし。されど畫する所の馬に靈ありて拔け出でたるといへる事、頗る妄誕に似たりといへども、其證とするあり。）

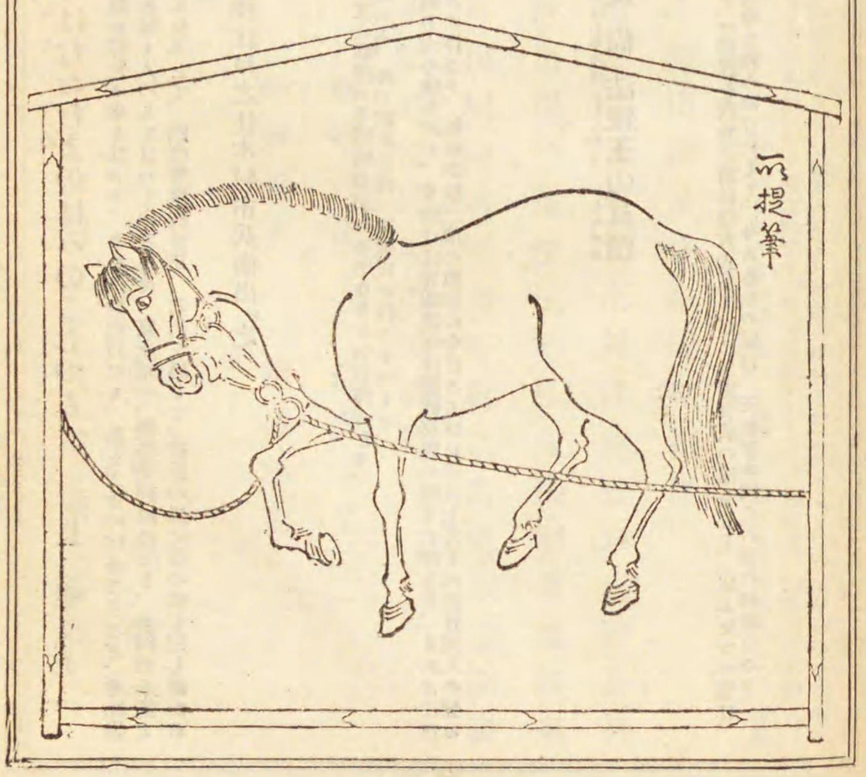
寛政の始め、本堂修營ありし頃、狩野何某親しく是を影寫す。實に六七百年を經たる古物うたがふべからず。既にして木の性をうしなへり。傳へいふ。往古此馬毎夜

歴代名畫記卷第八に云く、唐の世祖の時、楊子華といへる人あり、嘗て壁上に馬を畫く。其馬夜嘶いて水草を索むるが如し。仍て天下なづけて畫聖と稱すと、云々。又

揮麈後錄に曰く、聖宮門の兩廡の下に畫く所の人馬、みな流汗の迹あり。慶曆中に、一夕人馬の聲あり。明くるに至つてこれを觀るに、汗の流るゝあり。今にいたつて滅えずと、云々。

元亨釋書に云く、昔天王寺の道公、紀の熊野山に安居す。夏終て歸るさの道、暮れに逮んで、大樹の下に宿せり。其夜半騎馬の　あまた樹下にいたつて、翁ありやととふ。一老翁答へてありといへり。彼者云く、何ぞ前に進まざるゝ。また翁こたへて云く、馬の足損じて乘るに任へず、齡もまた衰へたれば、かちより行く事あたはずと答へければ、いざとて皆々通り過ぎけり。明旦公怪みて樹下を見るに、小神祠あり、その像朽ち損ず。前に一片の古き繪馬あり。前足のところ、その板破裂す。公すなはち糸をもつて繋補し、前の神言をこゝろみんとして、次の夜も猶樹下に宿す。中夜また騎馬の人來つて翁を問ふ。翁馬に乘じてさきに進て出でたり。曉に至つて歸りきたり、公に向ひ謝して云く、師馬の脚を治し給ふこと幸ひに堪へたり。公問ふ、騎馬の人は何ぞ。翁曰く、役疫神管内を巡れるなり、我も其前驅たり、もし出でざればかなちず罵を受く、今師の惠を蒙り、喜慶甚だ深しと云々。

丙辰記行に、昔此所に牛鬼の出て走りありきし事を、心に不圖思ひ出て、馬こそ大士の化現なれ、なにとて牛は出でけるぞ、をかしかりき、とあり。また、

擧白集、あづまの道の記に云く、

淺草の觀音とて、國ゆすりてもて
なす佛おはす。口にまかせて